
蛇咬 ～この手で君を～

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇咬 ～この手で君を～

【Nコード】

N3845G

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

これは、ある呪術師の物語だ。香我美美輪かがみみわの父親は数年前、家族に対し心中自殺を図った。止めようとした母親は、誤って父親を殺害し、そして、自責の念から後を追って自害してしまう。残されたのは、娘——美輪一人。心中事件として、警察は捜査を早々に打ち切った。——しかし。あの事件が、ただの心中事件ではないこと、すなわち両親が、実は何者かに殺されたことを知った時——美輪の心に復讐の牙が閃いた。

序章

ベッドの上で目を覚ますと、もう窓の外はすっかり暗くなっていた。

「もう、こんな時間……」

声を上げると、喉がからからに渴いていることに気づく。寝起きのぼんやりした頭でベッドから降りて、ふらふらと部屋を出た。薄暗い廊下を歩き、居間を目指す。

居間に続くドアの前まで来ると、私は欠伸をしながら片手でノブを握った。

握ったノブを、ゆっくりと回す。鉄が軋む音を立てて、ドアがゆっくりと開いた。私は開いたドアの隙間から、母さん、喉乾いた、と顔をひよっこりと出した。

居間の中央に、父さんと母さんが立っていた。二人を見た途端、悪寒が走った。

二人はびくびくと小刻みに震え、苦しそうに悶えていた。その様子は、明らかにおかしかった。

父さんが、私の視線に気づき、ぎょろりと私に目を向けた。その瞬間、父さんの口から獣のような唸り声上がり、私の耳を裂く。

私は、弾かれたようにドアから離れた。けれど、足が思うように動かず、バランスを崩して尻餅をつく。

父さんが私に襲い掛かってきた。

私は腰を上げて必死に逃げようとしたが、すぐにその堅い両腕で首を掴まれた。

「あ——ぐ」

喉が潰れていくような痛み。大きな指が私の首に食い込み、肌を抉っていく。

——痛いよ。どうしてこんなことするの？

痛みと悲しみに、目から涙が滲み出る。

——どうして、父さん。

父さんの腕が上がり、私の顔が父さんの顔と同じ高さに来る。

父さんは、まるで別人のようだった。

息を荒げ、恐ろしい形相で、私の首を絞めている。

だが、その瞳だけは、いつもの父さんのものだった。

父さんの瞳の奥には悲しみが渦巻いていて、父さんの悲鳴が、泣き声が聞こえてくるようだった。

私は身体を懸命に動かして、父さんの腕から逃れようともがく。しかし、次第に頭に靄がかかり、思考が保てなくなっていた。目が痛みにくらぐらと揺れ、視界が涙で歪む。

——父さん、父さん。

私は父さんの目を見つめながら、懸命に心の中で叫んだ。

と、突然私の身体に鈍い衝撃が走る。すると、私の首を絞めていた父さんの腕が解かれる。私の身体は宙を舞って、地面へと落下した。鈍い音と共に、私は仰向けに地面に倒れた。

げげほと咳をして、私は首を押さえる。すぐさま肺に、空気が供給されていく。私は肩を上下させながら呼吸を再開させた。次第に頭の靄が晴れ思考が回復し、おぼろげにしか見えなかった視界がクリアになる。明瞭な視界を取り戻した途端、私の目に飛び込んできたのは、固まったまま動かない父さんの姿だった。

私の首を絞めていた時のまま、両腕を当てもなく虚空へ向けて、中腰の姿勢で動かずに固まっている。しかし、身体は数秒の後に、ぐらりと傾き、重い音を立てて倒れた。

そして、父さんの背中からざらりと何かが光り、私の視線がそれへと移る。背中には、刃物が深々と刺さっていた。その刃物を握っていた手は、母さんのものだった。

私の渴いた喉から、ひつと短く掠れた悲鳴が上がる。

「とうさん……とうさん！」

私が声を上げて駆け寄ろうとした瞬間、父さんの亡骸を見下ろしていた母さんが、

「来ちゃ駄目！」

と叫んだ。

それは、紛れもなく、いつもの母さんの声だった。

その声を聞いた途端、私の胸に一気に安堵感が広がった。私は、制止の声を振り切つて、母さんの元へ駆け寄ろうとする。だが、

「駄目……私に近寄らないで……！」

母さんはそう叫び、よろよろと足をもつれさせながら、もう動かない父さんの横で跪いた。

「うつ、ぐつ、ああ……！」

母さんの口から嗚咽に似た声が漏れ、幾筋もの雫が頬を伝る。

「かあさ——」

私が駆け寄りながらもう一度、口を開きかけたとき、

「ごめんね、美輪」

母さんが、涙で濡れた笑顔を私に向けて、そう呟き——。

父さんの背中に刺さった刃物を抜き、自身の胸へとそれを刺した。……崩れ落ちる母さんの身体。それを目にした私の心臓に、どくんと不気味な音が響いた。

「……どうして」

私は目を大きく開かせたまま、呆然と二人の亡骸を見つめた。

——どうして。父さん、母さん。

私の口から呟きが漏れ、血に染まった空間に空しく響いた。

「お客さん。着きましたよ」

低い男の声で、私は目を覚ました。見れば、車窓の外は、懐かしい住宅街の姿が広がっていた。

——戻ってきたんだ。

胸の中が、ほんわかと暖かくなる。懐かしい幼少時代の日々が、住宅街の景色と重なって、思い起こされた。しかし、同時に、禍々

しい事件の記憶も思い出す。私は唇を固く引き結んだ。

――私が呪術師になった原点がここにある。

呪術という、現実離れたものに触れたのも、全てはあの事件がきっかけだ。

あの事件が起きなければ、私は今でもここで穏やかな日々を送っていたかもしれない。

私が窓の外の景色に見惚れている中、タクシーは、ゆっくりと道の端に停車した。私は代金を払い、一つ礼をすると、タクシーを降りた。

運転手は不思議なものを見るような目で私を一瞥した後、アクセルを踏んだ。タクシーはあっという間に道の向こうに消えていく。

私は、ゆっくりと歩き出した。

人通りの少ない道に沿って、古い民家が立ち並んでいる。昼間だというのに、生活音がほとんど聞こえてこない。私がここに住んでいる頃は、ここまで寂しい場所ではなかったと思う。

子供の頃によく遊んでいた公園があった。公園には、遊ぶ子供の姿は見る影もない。それが、寂しさを一層募らせた。

私は眼前の景色に嫌気が差し、足早に歩き始めた。途中で道を右に折れると、懐かしい家々が見えてくる。

「……あつた」

見覚えのある家が立ち並ぶ先に、忘れようもない大きな家があった。

鍵は開いていた。インターホンを押しても、反応はない。本当に誰も居ないのかと思い、玄関に入って「すみません」と声を上げるが、やはり返事はなく、家に人が居る気配はない。

「鍵掛けてないなんて」

何て無用心なんだろうと、ぴしゃりと腹いせに扉を強く閉め、鍵を掛けた。

この家の住人は現在一人だけだ。

現在高校生の従兄弟が、この家で一人暮らしをしている。今日遠

くからはるばる私がやって来ることを知っていたはずなのに、出迎える気は毛頭なかったらしい。

「お邪魔します」と言いながら上がると、この家は元は自分の家だったんだということにすぐに気づき、苦笑した。

私は廊下を歩き、居間に続くドアの前まで来て、足を止めた。ノブを握ると、手が震える。私は一つ深呼吸をして、ドアを開いた。その瞬間、懐かしい匂いが漂ってきた。どくと私の胸が鳴る。私は溢れ出しそうになる感情を必死に抑えながら、居間に足を踏み入れた。

私はゆつくりと部屋を見渡す。

……変わっていない。六年前と、何も。

部屋はまめに掃除され、当時の面影を残したままになっている。居間の先にはドアがあり、その向こうに私や父さん達の部屋が並び廊下が続いている。そのドアの前まで来ると、床にカーペットが敷かれていた。私はしゃがみ、そのカーペットを両手で掴むと、ゆつくりとどけた。

そこには、やはり六年前の事件の痕跡が残っていた。少し黒ずんだ血痕が、床にまだらな模様を作っている。

それを見た途端、涙が目から溢れ出し、床に新たな染みを作った。

——父さん、母さん。

そんな呟きが、零れた。

六年前のある秋の夕暮れに、その事件は起きた。

父親が突然錯乱し、娘——私を絞殺しようとしたところを、母親が止めに入り、誤って父親を刃物で殺害してしまう。その後、母親は同じ凶器を用いて自殺する。娘は、二人の死骸の前で呆然と立ち尽くしていたところを隣家の住人によって発見され、保護される。

それが、この家で起きた事件だった。

警察は、父親は心中を決意して、このような凶行に走ったのではないか、と推測した。当時の香我美家は、莫大な借金を抱えていて、心中する動機は十分にあったからだ。

事件の後の私はしばらく放心状態で、警察には事件について何も語ろうとしなかった。私の心の中ではただ、「どうして？」と疑問がずっと渦巻いていた。警察側も、幼い私の心的ショックを考慮してか、深くは追求してこなかった。

心中未遂事件として、早くも捜査は打ち切られた。

私は今の両親である老夫婦に養子として引き取られた。幸いなことに、私は二人に愛され、大切に育てられた。それだけではなく、二人は自分達の財産を惜しみなく香我美家の借金の返済に当てた。そんな恵まれた環境下にもかかわらず、私はただ陰鬱な毎日を過ごした。

——父さんは、絶対にあんなことをするような人じゃなかった。優しく、いつも私と遊んでくれた。自分の娘の首を絞めることなんて、絶対にできない人だった……。

私はそんな風に、長いこと現実を信じられずにいた。

そんな中、私はある事実を知ることになった。

両親の遺品を渡されて、それらを闇雲に漁っていた時のことだった。私は、積み重なった遺品の中に、埃で煤けた古びた本を何冊か見つけた。

その中の一冊を手取る。表紙には何も書かれていなかった。本を開くと、そこには難解な言葉がずらずらと書き綴られていて、当時の私にはその内容はさっぱりだった。それでも、なんとなくその本に惹かれた私は、それが何か解らずとも読むようになった。時が経ち成長するにつれ、私はその意味を次第に理解するようになる。

——香我美家は、呪術を継承する家系である。

ある一冊を開くと、一行目にはそう書かれていた。それを読み進めていくと、香我美家は驚いたことにその言葉の通り呪術を継承する『呪術師』の家系で、子供ができると、親はその子供がまだ小さいうちから、呪術の修練を指導するのだという。

『呪術』とは、一体何か。

ある本の記述によると——「呪術とは、超古代から連綿と伝え研

究されてきた魔法、すなわち超常の力のことを指す」とあった。

簡単に言ってしまうえば、呪術とは超能力に近いものだ。高度な呪術を行うには修行して、経験を積まなければならない。

——私は、呪術とは何かを理解した時、首を傾げずにはいられなかった。私は両親に呪術なんてものを習ったこともないし、そんな言葉が聞かされたこともなかった。

そこで、一つの想像が頭を過ぎった。

——父さんと母さんは、私が平凡な人生を送ることを願ったのではないか。

しかし、私は、父さんと母さんのその願いを知っても、呪術について語られたその書物を捨てることはできなかった。私は何よりも、真実を知りたかったのだ。

真実を知る一心で私はひたすら書物を読み続けた。ある時、”呪術の修練と使役”について綴られた本の中の、ある呪術の項目に目が釘付けになった。

——『蛇眼』。

その効果の種類は広範囲に渡るが、主に金縛りを引き起こす。強烈な蛇眼は、例えば、その人間を傀儡にさせることも可能である。

この『蛇眼』という呪術は、睨んだ相手を意のままに操ることができるという、便利にして凶悪な呪術だった。

私は、こんな効果を持つ呪術があるとは知らず、ただ驚いた。

……同時に、ふとある考えが浮かんできて、私は背筋が寒くなった。父さんと母さんは、他ならぬこの呪術という兇器によって、誰かに殺されたのではないか。

事件には、たくさんの不可解な点がある。

——居間で苦しそうに悶えていた二人。

——父さんの、原因不明の発狂。

——母さんの、突然の自害。

『呪術』という一つの可能性を考えることによって、徐々にピースが繋がっていく。

この『蛇眼』という呪術を行使すれば、父さんと母さんを殺すことができるのだ。二人の不可解な行動も、説明できる。

そう、例えば、二人が『蛇眼』の呪術によって、『殺人を行え』という強い暗示を掛けられた場合を想定してみる。二人の理性はその命令に必死に反発するだろう。しかし、理性でその殺人衝動を抑えられなくなった時は、どうなるか。……簡単だ。その時は、殺人人形に成り下がるしかない。

父さんは何者かによって暗示を掛けられ、理性が保てなくなり、殺人に走ったのだ。

母さんは、理性を保とうと苦しみながらも、父さんに殺されかけていた私を救った。そして、自分の理性を保てなくなのは時間の問題だということを悟ったのだろう、自身の胸を刃物で刺し、自ら命を絶った。

死ぬ前の母さんの言葉を思い出す。

——駄目……私に近寄らないで……！

精神が錯乱していたために出された言葉と考えるのが、普通だろう。

しかし、真実はそうではなかったのだ。

今の自分に近寄れば、躊躇なく殺してしまうかもしれない——そんな警告を秘めた言葉だったのではないか。

この推測が本当ならば、二人は何者かによって殺されたことになる。事件があった日の夕方、私が寝ている間に、何者かがこの家を訪ね、二人に呪術を掛けた——。

深い憎しみが私の心にじわじわと広がっていった。

そして——私は呪術師を目指すようになった。

呪術師になって、事件を究明する。そして、父さんと母さんを殺した者がいるならば、他でもないこの呪術によって、その者に復讐しようという決意したのだった。

私は、何年もの間、我慢強く呪術の修練をこなし続けた。年月はあっという間に過ぎていき、今、私は十五歳、中学三年になった。

既に、書物に書かれたほとんどの呪術をマスターしている。一年に一度はこの家を訪ねて事件の手がかりを探してきたが、今までに、それらしきものは一度も発見できなかった。

一頻り泣いて落ち着くと、私は涙を拭いて、立ち上がった。悲しみはほとんど涙と一緒に出し切った。だが、その代わりに憎しみが胸に渦巻いている。

一先ず目の前の濡れた床を拭こうと思い、私は腰を上げた。と、

「あれ……？」

私は雑巾を取りに台所に向かおうとして、ふと壁が一部分だけ真っ黒に汚れていることに気づいた。よく見れば壁紙が剥がれている。触ってみると、埃で指が真っ黒になった。

剥がれた壁紙を捲ってみると、そこには。

「——本？」

壁紙の隙間からそれを取り出す。私はその本を軽く叩き埃を払ってから、開いた。

筆跡は、明らかに父さんのもの。数ページ捲ってみて、これが父さんの手記であると判断した。

私は焦る気持を抑えながら、手記を読み出す。どんな衝撃的なことが書かれているのだろう、と私は身を強張らせて読み進めるが、予想に反して、それは幸福な内容だった。

——○月×日。

今日は美輪と一緒に絵を描いた。美輪は、私に似て絵が下手だ。私達は、お互いの絵を見て、笑い合った。

——○月 日。

美春と美輪と、三人で外食に行った。

——美輪と公園に行った。

——映画を見に行った。

——旅行に行った。

私は懐かしい日々を思い出し、目が潤むを感じた。

——だが。

このまま幸せな思い出を綴るだけで終わると思った時、その一文が現れた。

——治也が、私を殺そうとしている。

見れば、その文の横に、事件の一週間前の日付があった。

——今日、私の遠い親戚である加賀治也が久方ぶりに私を訪ねてきた。治也は、昔と何ら変わっていない。残忍で——狡猾な男だ。治也は、妻の智夫人と共に——私はあの女の正気を疑う——私に誘いを持ちかけてきた。

私は、当然断った。人殺しの誘いを、受ける奴が居るものか。憤慨した私は、奴らを家から追い出した。

治也と智夫人は私を無言で一瞥すると、そのまま何事もなかったように去っていった。私は彼らに無言で見つめられたとき、背筋を寒いものが走るのを感じた。

そう、二人の目の奥には、純粹な殺意があった。

美春は二人を怖がって、泣き出した。美春は言う。

きつと私達を殺しに来るわ、と。これを書いている今も、美春は泣いて私の元を離れない。

彼女を元氣付けている私も、恐怖で身体が震えてどうしようもない。——助けてくれ。

最後には、そう書かれていた。その声は、誰に当てたものでもない。だが、懸命に誰かに訴えている声でもあった。

字はすべて、ぐにやぐにやに曲がっている、きつと、ペンを持った手の震えが止まらなかったのだろう。

私は怒りに、唇を強く噛んだ。口の中に、血の味が広がる。

——どん、と私は右手を壁に叩きつける。その拳は、木製の壁をいとも簡単に突き抜けた。私は、ゆっくりと壁に食い込んだ腕を引き抜く。切れた肌から血が溢れ出し、腕を伝う。

視線を手記に向け直し、その後の記述を見る。加賀治也への恐怖が延々と書き綴られていた。

そして、手記の最後には、事件の日付と、父さんの遺言らしきも

のが書いてあった

——これから、治也が私達を殺しに来る。残念ながら、私達は逃れる術を知らない。まもなく私達は殺されるだろう。

私はこの手記を、誰にも見つからないように不可視の呪術を掛けて隠しておく。

もし、私の掛けた呪術を破り、この文章を読んでいる者がいるならば——どうか、あなたがあの二人を止めてくれ。

……最後に、美輪へ。心から愛してる。

——香我美浩一郎。

私は手記を抱きしめて、父さん、と呟き、

「——殺してやる」

と、齒軋りしながら呪いの言葉を口にした。

——長年求めていた答えが、ようやく見つかった。

父さんと母さんを殺した人間の名は——。

「加賀治也、加賀智」

……憎しみが湧き上がり、体内の血が疼く。早く、二人を殺したいと身体が叫んでいる。

手記には、加賀治也と加賀智の住所が書かれてある。ここから車で三時間ほどの距離にある葉月市に、二人が住んでいる屋敷があるらしい。今でもその屋敷に住んでいるのだろうか——それは解らないが、確かめてみる価値はある。

……今すぐ彼らを殺しに行こうか。そう考えて、私はいや、駄目だと首を振る。

それはさすがに焦りすぎだろう。計画を練ってからの方が良い。

——だが。

悠長に待ってもいられない。

——早く、早く、と急かすように、体内の血が沸き立っている。

「殺してやる」

私は父さんの手記を握り締め、衝動に押し流されるように、家を飛び出した。

序章 2

――夜竹市から電車に乗ること、約三時間。私は葉月市に足を運んでいた。

私は今、葉月駅から徒歩三十分ほどの距離にある住宅街の中の、ある屋敷の門前に居る。

時刻はもう既に夕方を回っている。通りには、通行人が誰一人としておらず、しんと静まり返っていた。

私は門前で、インターホンを押そうか押すまいか躊躇していた。インターホンへと差し向けた指が、震えている。

――この屋敷の中に、父さんと母さんを殺した犯人がいる。そう考えるだけで、喜びと憎悪の感情が溢れ出し、先程から身体が震えてどうしようもない。

……呪術を行使して、屋敷の中の気配を探ってみる。現在、この屋敷には、一人の気配が感じられる。

この気配を持つ人間が、本当に私の両親の仇であったとしたら、私は躊躇なく殺しに掛かるつもりだ。もし仇ではなかった場合は、情報収集だけして一先ず撤退する。

――もし、殺し合いになった場合、果たして私は勝利できるだろうか。絶対に勝利できるという確信は、残念ながら私にはない。けれど、今まで『備え』は十分してきたはずだ。

……そう、この復讐の為に私はどれほどの時間を呪術の修練に費やしてきたことか。今なら、どんな呪術師が相手でも打ち負かす自信がある。

……ここに来て、さすがに事を急ぎすぎではないかという考えが頭を過ぎる。しかし、私はすぐにその考えを振り払う。

遅かれ早かれ、私は奴らに贖罪させ、その息の根を止めるつもりだ。ただ、その時期が少し早まったというだけの話。

――ごくろ。

唾を飲み干し、腹に力を込め、私は思い切ってインターホンを押した。

……心臓の鼓動が激しい。落ち着け、という私の心とは裏腹に、心臓はますます飛び跳ねるように暴れだす。

門の先からがらがらと戸が開く音がし、「はい」と明るい女性の声が響いた。私と同じくらいの歳の少女がしっかりと足取りでこちらに歩いてくる。少女は制服を着ていて、どうやら私と同じ中学生のようだ。

私は、想像と随分かけ離れた風貌の人物が出てきたので少し面食らったが、すぐに顔を引き締めて心の中で警戒する。

「あの、どちらさまでしょうか」

門の前に立った少女が、私に笑みを向けて言った。

少女の長い髪が、風で微かに揺れる。その艶やかな黒髪は夕日に照らされて輝き、私はこんな状況下にもかかわらず、見惚れてしまった。

それだけならまだしも、とんでもなく綺麗な顔で笑いかけられるものだから、こちらとしては、たまったものじゃない。

「私は、香我美といいます……」

「はい。香我美さんですね」

少女を見ると、声が震え、次第に頬が熱くなるのを感じる。女の私でも、どくと胸が鳴ってしまふ様な満面の笑顔。

……とにかく、落ち着かなければ。

私は深く息を吸って呼吸を整え、口を開いた。

「加賀治也さんと智さんは、ご在宅でしょうか」

私の言葉を聞くと、少女は、え？と一瞬困惑の表情を浮かべた。しかし、すぐに笑顔に戻り、口を開いた。

「……失礼ですが、あなたと二人の関係は？」

「二人は私の親戚です」

私の両親を殺した二人と私は、血が繋がっている。これは、残念ながら紛れもない事実だった。怨敵である加賀治也と加賀智の二人

は、私の遠い親戚に当たるのだ。

その事実を認識すると、吐き気がするほどの嫌悪が出てくるが、私は顔に出すまいと必死にそれを抑えた。

……とりあえず、頭の中で状況を整理する。

今、この屋敷には、一人分の気配しかない。つまり、その気配は眼前の少女のものであって、二人のものではない。結果的に言えば、この屋敷には二人はいない。

したがって、残念だが、今日のところは二人の命を奪うのは諦めざるを得ない。

——即座に、目的を情報収集へと変える。

「……今、二人はこの屋敷にはいません」

予想通り、少女は首を振ってそう言った。

「何時頃戻られますか？」

私がそう追求すると、少女は俯いて表情を翳らせる。

「……二人はおそらく、当分の間戻ってこないと思います」

少女の声音が、先程の明るいものから、悲しみを含んだ暗いものへと変わる。

「それは、どういう……？」

私が疑問の声を上げようとしたとき、少女の言葉がそれを遮った。「ですが、きっといつか戻ってくると思います……いえ、必ず戻ってきます」

少女はまるで自分自身に言い聞かせるように、そう言った。

少女の深刻な問題を抱えているような様子から、私は徐々に事態が飲み込めて来たような気がした。

「二人は、どこへ？」

私は逸る気持を抑え、できるだけ優しい調子で、少女に問う。

「二人は今……行方不明に」

「なっ……」

……心のどこかで、そんな予感はしていた。だが、少女の口から直接その事実を告げられた途端、危うく膝が崩れかけた。

……行方不明？ 私の両親を殺した後、二人は逃げたとでもいうのか。

「具体的に、いつ頃からですか？」

私は、震えた声で聞いた。

「確か、今から六年前ぐらいに」

——六年前。私の両親が死んだ時期だ。

目の前がだんだん暗くなる。しかし、私は必死に意識を押し戻して、眼前の少女を見据えた。

……ここで心が折れてどうする。逃げたというのなら、地の果てまで追いかけて殺すまでだ。

「そうですか……そんなことになっているなんて」

私は悔しさに顔を伏せながら、呟いた。

……二人が行方不明であるというのなら、子供の方はどうなのだろう。手記によると、加賀治也と加賀智の間には、私と同じ年の息子が一人いるはずだ。

「……二人のご子息はどうしてますか」

私がそう聞くと、少女は一瞬ご子息？と首を傾げ、

「ああ、智也のことですか。智也なら、今出かけてます。もう少ししたら、帰ってくると思いますけど」

話題がその少年へ移った途端、少女の顔が明るくなった。

私は、胸の中で微かな戸惑いを覚えた。

——加賀智也。加賀治也と加賀智の子供。

……彼は、復讐の対象に入るのだろうか。二人の子供と言うだけで、彼自身は何も悪くはない。しかし——彼はおそらく、二人から呪術を教えられているはずだ。呪術師の血筋が途絶えることのないように、親は子が幼い頃から、呪術を教える。

もしも、加賀智也が両親のように人殺しを平気でするような人間だったとしたら。私は彼を殺さなければならぬ。

「智也も、こうして親戚の人が訪ねてきてくれた事を知ったら、とても喜ぶと思います」

少女が、本当に嬉しそうに笑った。

私は彼女の笑顔を見ると、自然と自分の強張った表情が柔らかくなっているのを感じた。

彼女にこんな笑顔をさせる彼は、一体どんな人間なのだろうか。どうしてか、彼女の笑顔を見てみると、彼が悪い人間であるとは、とても想像できない。

「失礼ですが、あなたは？」

と、私は口を開く。

「私は、この屋敷の隣に住んでる水西です。智也にちょっと留守番を頼まれてて……」

私はそれを聞き、内心驚く。私の心中を悟ったのか、少女は苦笑しながら、

「他人に自分の家を任せるなんて、無用心だとは思いますが……私達にとつては、当たり前のことなんですよ」

「……智也さんとは、随分親しくされているんですね」

「ええ。ちっちゃい頃からよく一緒に遊んで……智也とは、長い付き合いになりますね」

彼女の言っていることに嘘偽りはないか、瞳の奥をじつと見る。

私は『読心術』を備えている。相手の顔の筋肉の緊張や緩みなど、表情の微妙な変化や、動作・声質の変化、さらには心音の変化などを察知することによって、相手の心を読む、という術を私は会得しているのだ。

ここで言う『読心術』とは、呪術師として様々な修行で呪術の基礎を学んだ上で会得した技であるから、常人には真似出来ない技だ。……彼女が話していることは、どうやらすべて真実らしい。読心術なんて、使わなくてもそれは解る——彼女の笑顔が、偽りであるとは思えないし、そうでないと私は信じたい。

「二人が行方不明ということは、現在、この屋敷には、智也さんが一人で住んでいるんですか？」

少女は、そうです、とどこか寂しげに頷く。

「智也は二人が行方不明になってから、叔母さんに引き取られてこの家で暮らすようになったらしいんです。けど、その叔母さんはすぐに智也をほったらかしにして、どこか遠くに行ってしまった……」

水酉さんの声には、怒りが含まれていた。

皮肉なことに、加賀智也の境遇と私の境遇は似ていた。彼と私で違っていたことは、私には引き取ってくれた今の両親が居たけど、彼には家族と呼べる存在がいなかったことだ。私だったら、ずっと一人で生きていくなんて絶対に耐えられない。

「良かった……智也にも、親戚が居たんだ……」

不意に、少女が安心した表情を浮かべてそう呟き、吐息をついた。

「智也さんは親族の方と今まで付き合ってたんですか？」

「そうみたいです。智也と出会ってこの方、あなたのように、親戚の人がこの屋敷を訪ねてくるなんて一度もなかったと思います」

父さんの手記には、加賀家は親族に疎遠されていると書かれていた。それは、そうだ。人殺しを平気でするような奴らだったんだから、軽蔑されても仕方がない。加賀家は、呪術への執着心が非常に強く、家の者は生涯をその研究に捧げていたという。本家である加賀家を残して、分家が次々と呪術を投げ出していく中で、加賀家は周りのことなどお構いなしに、黙々と呪術の研究を進めていたという。

だから、加賀家が孤立していたのは、十分に解る。けれど、加賀智と加賀治也が行方不明になり（どこかに隠れている可能性も否定できないが）、その息子の加賀智也は本当に一人ぼっちになってしまった。親戚中に見放され、一人でこの屋敷に取り残されてしまった。

両親が行方不明になった当時、加賀智也は私と同じ、まだ小学二年生だった。幼い彼にとって、その運命は、あまりにも厳しすぎたのではないだろうか。

「智也は頭が良いから、なんでも一人でこなせちゃうんです。けど、この広い屋敷に一人だけで暮らしていくなんて、あまりにも寂しす

ぎるじゃないですか。だから、私は無理を言ってもこの家には上がりこんで、智也をあまり一人にさせないようにしてます。智也は……私の家族なんです」

彼女の言葉に、私の心は強く揺れ動く。

……そうか。彼は決して一人ぼっちだった訳ではなかった。他でもない、目の前の彼女が居たから、彼は今まで生きてこれたのではないか。

「智也、遅いなあ……。せっかく親戚の人が来てくれてるのにな。

推薦に受かったからって、この頃毎日ぶらぶら遊んでいるんだから」水西さんが、遠い目で赤く染まりつつある空を見つめながら、呟いた。

私は黙って、その横顔を見つめる。

私は、加賀智也に会ってみたいと思い始めていた。彼が親の二の舞にならないか、その人格を確かめたい為でもあるし、純粹に自分の境遇に似ている彼に興味が湧いたからでもある。

「加賀美さんって、今何歳なんですか？」

突然、水西さんが私に柔らかな視線を向けて、言った。

「15歳です。私も今年、受験なんですよ」

「そうなんですか？じゃあ、私達と同じ学年なんですね」

水西さんが、胸の前で手の平を合わせながら、笑う。その仕草がとても可愛らしくて、私は頬が緩むのを感じた。

「ちよつと驚きです。私より年上なのかと思ってました。香我美さんの話し方、すごく丁寧なんです」

彼女の言葉は意外だった。私は、そうでしょうかと首を傾げる。

「香我美さんって、どことなく智也に似ている気がします」

「智也さんに？」

「私と同じ年のはずなのにどこか大人びているところとか……」

水西さんはそう言うってから、慌てて、悪い意味じゃなくてです、と付け加える。

「確かに友達からそう言われることはよくあります。……智也さん

は、どこの高校に決まったんですか？」

私が聞くと、

「ここからわりと近くにある木陽高校というところなんですけど、すごく偏差値高いんです。私の志望校もそこです。私は必死で勉強しているのに、智也はさっさと自分だけ推薦で合格しちゃったんですよ」

どうやら、加賀智也は勉強が良くできるらしい。

……木陽高校か。名前は聞いたことがある。

と、その時、十メートルくらい離れたところから、こちらに近づいてくる気配を感じた。その気配の持ち主の意識は、この屋敷に向いている。

この気配はおそらく加賀智也だ、と私は察し、ごくりと唾を飲む。

……どうしよう。会ってみようか。

そう考えたが、すぐに私はその考えを否定する。

……いや、駄目だ。加賀智と加賀治也の二人が、どこかに隠れている可能性も否定できない。

二人がこの屋敷以外のどこかに身を潜めていたとしたら、定期的に息子である智也と連絡を取っているはずだ。

加賀智也に私の存在を知られれば、二人にも自ずと私の素性がバレてしまう。そうすると、私は圧倒的に不利な立場に追い込まれる。

……だから、今はおとなしく退散するしかない。

「どうしましたか？」

私が急に黙ったからか、水西さんが不安げな視線を私に送る。

「あなたのお名前を――下の名前を含めて、もう一度教えてもらっても宜しいですか」

「え……ええ。水西綾華です」

「水西綾華さん、ですね。覚えておきます」

私は、彼女に微笑んだ。そして、ゆっくりと深呼吸し、彼女を正視した。

「私と会ったことは、すべて忘れてください」

私に告げられた瞬間、彼女は息を止め、硬直した。

彼女の身体が一瞬、ぶるりと震える。そして、彼女は無機質な声で、わかりました、と答えた。

それを確認すると、私は彼女に背を向けて、歩き出した。

後ろで、屋敷の玄関の扉が閉まる音がする。水西さんが、屋敷の中へ戻ったのだろう。

私は一瞬振り返り、屋敷の門を見つめた。しかし、私は名残惜しさを必死に振り払って、再び前に向き直った。

……彼女と友達になりたかった。だが、今は駄目だ。今は、我慢しなければならない。

「ケーキ買って帰ろうかな」

心に膨らんできた寂しさを覆い隠すように、訳もなくそんなことを呟く。

私と入れ替わるように、一人の人間の気配が屋敷へと近づいてくる。

私はそれを背中に感じながら、住宅街を後にした。

序章 3

私は自宅へ帰つてくると、先程買つて……いや、もらつてきたケーキを切つて皿に盛り付け、自室にそれを持ち込んで食べ始めた。食べながら、携帯電話で、実家——香我美家へと電話をかける。数十秒待つても出ないので、まだ帰ってきていないのかなと思い、電話を切ろうとしたとき、突如電話が繋がった。その瞬間に、

「お前、冷蔵庫にあったケーキ食つただろう！」

と怒鳴り声が聞こえてきて、私は反射的に携帯を耳から遠ざけた。

「……うん、食べたわよ」

——正確には、今食べているのだけれどね。

……加賀家から引き上げた後、私は一度実家に帰った。そして、胸に複雑な気持ちを抱えたまま、なんとなく家の中の冷蔵庫を開いてみたら。そこには――。

私は耳から離れた携帯を再び当てなおし、フォークで一口サイズに切ったケーキをぱくりと口の中に入れる。舌が蕩けるような甘さが口の中いっぱいに広がり、思わず唸ってしまった。

「食べたわつて、お前なあ。勝手に食うなよ、楽しみにしてたんだから。……ていうか何、今の唸り声は」

「なんでもないわ。……それより、どうして今日は家に居なかったのよ」

「ちよつと用事があったんだよ。鍵開けといたから、入れただろ」

「無用心にも程があるわよ。ポストに鍵置いとけばいいじゃない」

「急いでたんだから、仕方ないだろ。……何で俺を待たずに帰ったんだ」

「同じく、急用ができたから」

「置手紙ぐらいしろよ。携帯にも繋がらないし、一体何やってたんだ？」

「家庭訪問よ」

そう答えた時、調度ケーキを食べ終わり、私はごちそうさま、とフォークを置いた。

「家庭訪問？何だそれ。……せつかく夕飯の買い物、二人分してきたのによ」

「夕飯の買い物？……もしかして、今帰ってきたところなの？」

「そうだよ」

従兄弟がそう言った後に突然、「あれ……？」と何かに気づいたように声を上げた。数秒の後、「あー！」と物凄い悲鳴が電話越しに聞こえてきた。

「なんだ、これ！壁に穴開いてる！」

私は気づかれたか、と小さく舌打ちをする。

「お母さんが呼んでるからもう電話切るね。それと、今度からちゃんと鍵掛けなさいよ。……またね」

「おい、ちよつと待て……！」

従兄弟の引き留める声を無視し、私はそのまま電話を切った。

携帯電話を机の上にぽんと投げ出し、頭の中で、今日は貴重な収穫があったな、などと考える。従兄弟に会えなかったのは少し残念だけど、また暇を見つけて会いに行けば良いのだからそれほど問題ではない。

……今度行くときは、壁に穴開けたお詫びに、ケーキを持って行ってあげようかしら。

そんなことを考えながら、ケーキの皿を持って立ち上がると、私はお母さんの手伝いをしに台所に向かった。

夕食を食べ終わった後、私は食器を洗いながら、後ろで机を拭いているお母さんに向かって口を開いた。

「あのさ、私、志望校変えることに決めた」

後ろで、お母さんが目を丸くしてこちらに振り向くのが解る。

「そんなこと言っただってお前、今から変えて平気なのかい」

「大丈夫よ。今よりちよつとだけ上のランクの高校にするだけだから」

お母さんは呆れた様に肩を竦め、困ったようにテレビの前で新聞を読んでいるお父さんに視線を向けた。

「良いじゃねえの、母さん。美輪の好きなようにしてやれ」

「それで落っこつたらどうする気よ」

「この子に限って、そんなことがあるとは思えんよ。好きなようにしてやれ」

「……ありがとう、お父さん」

私がお父さんに笑顔を向けてそう言っていると、お父さんは嬉しそうに笑みを返しながら、おうと片手を上げた。そんなお父さんの様子を見たお母さんが、

「全く。甘いんだからね、もう」

と呟きながら、肩を竦めた。

「で、どこにするんだい」

「それがね……私、葉月市の木陽高校に通いたいんだ」

お母さんが、啞然とした表情で私を見る。

「葉月市って言ったら、かなり遠いでしょう。ここからじゃ通えないじゃないの」

「だからね、その……一人暮らしさせて欲しいんだけど」

先程まで上機嫌だったお父さんが、一人暮らしと聞いた途端、いきなり顔を蒼白にさせて、こちらに振り向き、「絶対に駄目だ！」と叫んだ。

私はその後、週末には実家に帰ってくることを理由にして二人を説得し、何とかお母さんの了解を得る状態にまで漕ぎ付けた。断固反対していたお父さんも、最後には、肩を落としながら、まあ仕方がないと渋々了承してくれた。

……こうして、私は木陽高校を受験することになった。志望校のラ

ンクが上がったことにより、今までより多くの時間を勉強に割かざるを得なくなった。

受験勉強の最中、加賀智也が一体どんな人物なのか、あれこれ想像することが度々あった。

勉強が忙しい時には、加賀智也は推薦で合格してるから、今頃は綾華さんと一緒に楽しく過ごしているんだろうなあと訳もなく想像を巡らし、無性に彼が羨ましく思えてくるのだった。

季節は春になり、私は無事に木陽高校に合格することができた。お母さんはあらまあと笑いながら、喜んでくれた。お父さんはいうと、少しがっかりしてたみたいだけど、おめでとうと合格を祝ってくれた。

私は木陽高校に入学し、そこから割りと近くに位置するマンションで、一人暮らしをすることになった。入学式当日、クラスが発表され、私は掲示板の前で自分の名前と、加賀智也の名前を探した。私はC組で、加賀智也がD組。綾華さんの名前も見つけた。彼女はF組だった。

新学期が始まり、晴れて私の高校生活がスタートした。生活自体は中学とあまり変わらないような印象を受けたが、前より幾分かマシになったのも事実だと思う。学食があること、物品の持込の規制が緩くなったことなど、色々挙げられるが、何より友達が増えたことが、一番の良き変化と言えるだろう。ただ、高校になってから、男子に頻繁に声を掛けられるのはどうしたものか。もしかしたら、この高校の男子生徒は、人懐っこい性格の持ち主が多いのかもしれない。

——日々は忙しく進んでいき、新学期が始まってから、早くも一ヶ月が過ぎた。私は個性豊かな友人達に囲まれて、それなりに高校生活というものを楽しんでいた。そんなある日の放課後、図書館へ行くと、窓際の席で静かに本を読んでいる男子生徒の姿を見つけた。

私の胸が、どくと鳴る。

ややウェーブの掛かった長い髪が、窓の隙間から入ってきた微風に吹かれて、さらさらと柔らかく揺れている。その横顔を見るとなかなか整った顔立ちをしていて、美男子と呼べなくもない。

今までずっと見ていただけで、話しかけたことはなかった。けれど、いずれ話しかけようとも思っていた。

……今、話しかけてみようか。

そう思った途端、もう一度どくと胸が跳ね上がった。

——復讐。

そんな、学校生活には似合うことのない言葉が、私の頭に浮かんだ。

私は震える腕を押さえて、ゆっくり彼へと近づいていった。彼はこちらに気づいていないのか、黙々と本を読んでいる。私は、彼の前に立った。

すると、ようやく彼は本から顔を上げた。そして、私を訝しげに見据えた。

私は小さく息を吸う。そして、思い切って口を開いた——。

第一章

どんだん、と遠くから扉を叩く音が聞こえてきて、俺は目を覚ました。掛け布団を跳ね除け、すぐさま起き上がる。そして、枕元に置いてある目覚まし時計を見やった。

――六時五分。

……いつもより少しばかり遅く起きたみたいだ。俺は布団を畳み、制服に着替える。依然として、玄関の方から激しく扉を叩く音が聞こえてくるが、別段気にならない。

着替えが終わると、俺は自室を出て、ゆっくりとした歩調で廊下を歩く。

窓から眩しい朝の光が、板張りの廊下に、差し込んでいる。透明なガラス窓の向こうに、広い庭が広がっていて、その外観は日本の静かな朝にぴたりだった。この庭の景色は、日頃から俺の心を満喫させた。広い日本屋敷に一人暮らしというのは、掃除の手間ばかり掛かってしまつて、非常に効率が悪い。しかし、このような広い庭を独り占めできることを考えれば、そんな不都合も些細なことのように思えてくるのだった。

玄関に近づくにつれ、だんだん例の音が大きくなつていく。長い廊下を歩き、ようやくのことで玄関に辿り着くと、俺は扉の向こうに居るであろう人物に声をかける。

「今開けるから、待ってるよ。朝から五月蠅いぞ、綾華」

「だって、早くしないと遅刻しちゃうじゃない！」

甲高い悲鳴が、返ってくる。俺は眉をしかめながら、扉を開けた。そこには、焦った表情をした綾華の姿があった。

「遅刻つて、お前。……今は何時か解つてて言ってるのか」

俺は呆れながら、そう問う。

「七時でしょう！？早くしないと遅刻だよ、もう！」

綾華がずんずんと屋敷の中へ入っていく。俺は、綾華が横を通り

過ぎる際、悪戯っぽく笑いながら、口を開く。

「残念だったな、まだ六時十五分でした」

「え、嘘……」

綾華が、啞然とした表情で、こちらに振り向く。

「確か、綾華の部屋にある目覚まし時計、狂ってただろ。こないだ買い換えろって言ったのに」

俺は笑いを噛み殺しながら、そう言った。

「そうだった……すっかり忘れてた」

今まで焦っていた自分が馬鹿らしく思えたのか、綾華が大きく肩を落とす。

——眼前の少女、水西綾華とは長い付き合いで、彼女は俺の幼馴染であり、また俺の親友でもあった。俺が小学二年生の時、俺の両親が死に、その後すぐに、水西家がこの屋敷の隣へ引っ越してきた。その時の俺は、大切なものを失った悲しみで心を固く閉ざしていた。そんな俺を救ってくれたのは、他でもない綾華達だった。それ以来俺は水西家と本当の家族のように接してきて、綾華とは兄弟のように親しい仲になったのだ。

綾華は台所に入ると、さっそく朝食を作り始めた。今日の朝食当番は綾華だ。だから、俺は綾華が準備している間に、ゆつくりとコーヒーを飲みながら寛ぐことができる。

「そつえば、おばさんは？」

台所で淡々と作業している綾華の背中を見ながら、俺は聞いた。

「お母さんなら、まだ寝てるわよ。昨日遅くまで仕事だったから」

「そつか……おばさんも、頑張るなあ」

綾華のお母さんである和子さんは、パートに出ている、夜遅くに帰ってくることが多いのだ。大抵、次の日は昼まで起きてくることはない。

働き者のおばさんに感心しつつ、コーヒーを一口飲んだ時、スーッ姿のおじさんが居間に顔を出した。

「お早う、お父さん」

台所に居る綾華が手を休めて居間に振り返り、おじさんに笑いかけて言った。

「……おはよう、綾華」

とおじさんも綾華に微笑む。

「おはよう、おじさん。今日の朝は、ゆっくりしていけるみたいだな」

「この頃、毎日五時起きだったから、ゆっくり寛げるのは久しぶりだ」

おじさんはそう言って俺の正面の席につくと、手に持っていた新聞を広げた。

おばさんが居ないことを除いては、いつも通りの朝の風景だった。ここに居る二人は、俺の本当の家族ではないけど、単なる隣人という関係を越えて、俺達は家族のように親しく付き合ってきた。朝は、こうして俺の家に集まって朝食を摂る事になっている。だが、各自のスケジュールが忙しい為か、なかなか四人が揃うことはない。大抵食卓に着くのは俺と綾華の二人になることが多かった。

食事を共にする習慣が、一人身である俺への気遣いであることは良く解っている。幼い頃から一人ぼっちだった俺を、水西家の人は本当の家族のように慕ってくれた。その恩は一生尽きることがないだろう。

「智也、そう言えば期末試験はどうだったんだ？」

おじさんがふと、新聞から顔を上げて言った。

「期末試験？ああ、ぼちぼちできたよ」

「あれで、ぼちぼちなのか？」

綾華が台所から、俺を非難するように声を上げた。

「何だ、綾華はできなかったのか？」

おじさんが台所の方を見やって、顔を顰めた。

「できたわよ、それなりに。ただ、智也には敵わなかったけどね」
そう言った綾華は、心なしか、残念そうだ。

昨日の学校での出来事が思い起こされる。

四限目が終わり、休み時間になった時のことだ。

期末テストの全教科の結果が発表されて、教室がその話題で騒然となっている時、綾華が嬉しそうな表情をしながら俺の教室に駆け込んできた。

「どうした、綾華」

俺が怪訝な顔をしてそう聞くと、綾華は得意げに答案用紙を俺に差し出した。

「どう？」

「どうって、何が」

「……ほら。私、化学のテスト、八十五点取ったんだから」

「お……確かに」

答案用紙の右上の方に、八十五点と記され、その横にGREAT！と大きく文字が書かれてある。さらにその横に、さすが綾華ちゃんね、という先生のコメントが。

「綾華、今回はかなりできたな」

「うん。結構勉強したからね」

「偉いぞ、綾華」

俺が褒めると、綾華は照れくさそうに笑った。

「で、智也はどうだったの？」

綾華が興味深げに身を乗り出して、聞いてきた。

「あ、俺？九十四点だよ」

俺がそう言った瞬間、綾華の表情が固まった。

「そうなんだ。九十四点、か……」

綾華ががつくりと肩を落としながら教室を去っていく。俺は慌ててその後を追ったのだった。

「智也は頭が良いからな。……まあ、綾華も、それなりにできたなら良かったじゃないか」

と、おじさんは新聞に目を通しながら、可笑しそうに笑った、

「だけど、今回ばかりは、悔しかったわ」

台所から出てきた綾華が、そう言って肩を竦め、朝食の皿を机の上に並べ始めた。俺は席を立ち、綾華を手伝う。

朝食を済ませると、俺達三人は揃って屋敷を出た。

「それじゃ、おじさん。仕事、頑張って」

「精一杯やつてくるさ。……今日は、私も母さんも、帰りが遅くなりそうだから、夕飯は二人で適当に食べときなさい」

「わかったわ。行つてらっしゃい、父さん」

綾華がそう言つてにつこりと笑うと、おじさんがこれ以上ないくらい嬉しそうな表情を浮かべる。

「行つてくるよ」

おじさんは嬉しそうに笑いながら、折りたたみ自転車を快活に漕いで、遠ざかっていった。俺はその背中を見送りながら、苦笑した。おそらく、おじさんのあの笑顔は、会社に着いてもしばらくは消えることはないだろう。おじさんは普段から厳格で真面目な人だけど、綾華にだけはとことん甘い癖がある。そんなおじさんの様子を見ると、『家族』ってものが垣間見えて、俺は微笑ましく思ふのだつた。

俺達は、歩き出した。

夏の陽光が朝の住宅街に眩しく降り注ぐ。だが、幸いなことに、今の時間帯はそれほど暑くはない。朝の人通りの少ない町並みは、清々しささえ感じられる静謐な空間だった。

「夏休みの予定、決めた？」

綾華が、突然そんなことを聞いてきた。

「夏休み？」

俺は、自分が夏休みの計画をこれっぽっちも考えていなかったことに今更気づく。

そんな俺の様子に、綾華が呆れたように溜息を吐いた。

「健全な高校生が、夏休みを忘れるなんて」

「なら、綾華はもう考えたのか？」

「うん、一応ね。……今年の夏休みは、色々ありそうよ」

綾華がそう言って目を伏せた。何だか綾華の声音が、不安の色を帯びていたように感じられる。

「どうした？何か、嫌なことでもあるのか」

俺が綾華の表情を窺いながらそう言っていると、

「うつん……なんでもないわ」

と、綾華が笑いながら首を振った。綾華が無理をして笑顔を取り繕ったのは明白だったが、俺はそれ以上何も聞かなかった。綾華がなんでもないと言っのなら、あまり深く追求する必要はないだろう。無理に彼女の心の深くに踏み込むのは、躊躇われた。

「今年の夏休みも、どこかへ行くか？」

俺がそう言っていると、綾華の顔から取り繕った笑顔が消え、本来の明るさを取り戻す。

「そうねえ……今年は、二人でどっかへ行く？」

「二人か……それもいいな」

俺は、結構人見知りが激しい性質だ。今までに、友人を誘ってどこか遠いところへ出かけたり、旅行へ行ったりしたことなんて、数えるほどだ。だが、綾華みたいな、兄弟のように気の置けない相手となら、不思議といろんな所へ出かけてみたくなる。

「去年は九州で、その前が確か四国だったよな」

「今年は、沖縄辺りでどう？」

「沖縄か。それもいいな。……まあ、どこへ行くにしろ、早く予約入れないとな。今度、観光のパンフレットをもらって……」

「ねえ、智也……あれ！」

俺が最後まで言い終わらないうちに、綾華の声によって遮られる。綾華は突然俺の肩を掴むと、ぐいっと引き寄せて前方を指差した。

「何だ……？」

綾華が指差す方向に視線を向ける。

茂みの中から小さな蛇が顔を出して、こちらを凝視していた。

「……こっちを睨んでるよ」

綾華が怯えた声を上げると共に、俺の肩を掴む綾華の手の力が一層強まる。

「大丈夫だ。蛇は瞬きをしないから、睨んでいるように見えるんだよ」

「そうなの？」

「……ゆっくりと横を通り過ぎれば、問題ないさ」

俺がそう言って歩き出そうとした時、蛇が突然茂みから抜け出した。

綾華が短い悲鳴を上げる。

蛇はアスファルトの上を這って、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「……こっちに来るよ！」

綾華が、俺の腕を引いて後ずさろうとする。

「大丈夫だ。問題ない」

俺は、綾華の手を腕からそっと振り解き、前方の蛇を見る。

蛇の目を見つめながら、俺は心の中で呟く。

——行け。

蛇が一瞬びくりと身体を震わせて、動きを止めた。

そして、硬直したまま、こちらをじっと見つめる。

だが、数秒の後に蛇は身を翻して、元の茂みへと戻って行った。

「……びっくりした」

蛇が去っていった方向を見つめながら、綾華が大きく息を吐いた。

「ここら辺、蛇がやたらと多いのよね。今週になってから、何度見たかしら」

「まあ、それほど凶暴な奴は居ないし、こっちから手を出さない分には平気だろ。用心に越したことはないけどな」

俺達は気を取り直して、再び歩き出した。話題を旅行へ戻し、あれこれ二人で提案しあっていると、あっという間に大通りへと差し掛かった。生徒達がぞろぞろと学校の方へ歩いていき、俺達もそ

の中に加わった。

周囲では生徒達の澆刺とした声が飛び交っていて、俺達の何を何人もの生徒が通り過ぎていく。ふざけあう男子の集団、おしゃべりに花を咲かせる女子達、中には仲良く手を繋ぎながら歩くカップルの姿もある。

どれもこれも、幸せな風景だった。

その風景の中に俺自身が混じっていることを知ると、胸に微かな幸福感を覚える。

「綾華ちゃん、おはよう」

正門の近くまで来て、突然後ろから声が掛かった。振り向くと、一人の女子生徒が綾華に手を振りながら走ってきて、俺達の横に並んだ。

「坂山さん、おはよう。剣道部の朝練？」

綾華が女子生徒に笑みを返して、言った。

「そうなのよ。毎朝、早く起きなくちゃいけないから、きついんだよね、ホント。……智也君も、おはよう。期末試験、凄かったらしいね。私、びっくりしちゃった」

話しかけられるとは思っていなかった俺は、返答に少し戸惑った。
「……あ、うん」

……自分でもそっけない返事だと思うが、特に言すべき言葉が見つかからない。

一瞬、場に気まずい沈黙が流れる。

「……じゃあ、綾華ちゃん。朝練、頑張ってね」

「うん、坂山さんも、頑張って」

女子生徒は軽く手を振ると、体育館へと走って行ってしまった。

「——智也」

綾華が、怒ったような表情でこちらに振り向く。

「何よ、今の」

「……仕方ないだろ。俺に社交性を求めても無駄だよ。こういう性質なんだから」

「また、そんな捻くれた事を言つて……！」

「そんなに捻くれてるかな、俺は。……俺は綾華とが一番喋りやすいんだよ」

「……ん」

俺の言葉に、綾華が口籠る。

「何、赤くなつてるんだよ。そこは、照れるところじゃないだろ」

「……もう良いわ、朝練行つて来る」

「ああ。行つてらっしゃい」

綾華は俺の顔を見ながら呆れたように一つ溜息を吐くと、部室棟へと歩いていった。

俺はその背中を見送ると、そのまま校舎へと向かった。

綾華と俺は、正反対のタイプの人間だ。綾華は明るい性格をしていて、人望も厚い。俺は寡黙で、人付き合いがとことん悪い。そんな俺達がどうして親友の間柄になれたのか。自然の成り行きもあるかもしれない。だが、おそらく、根本的な部分で俺達は似たもの同士だからだ。表面上の性格は全く正反対だけど、お互いにどこか似た面を持ち合わせている。……とはいっても、その”似た面”が一体何なのか、俺自身未だに解らないのだけだ。

第一章 二

放課後の図書室。俺は窓際の席に一人腰を下ろしている。

窓から夕日の光が差し込み、手元にある本が、自分の手の平が、オレンジ色に染まっている。息を吸えば、図書室に立ち込める本の独特な匂いが鼻を刺激した。

ここで過ごす時間はゆったりとしていて、どんな些細なことでも感じ取れる余裕を俺に与えてくれた。

だから、俺はこの場所が好きだった。

静謐な空間に居ると、普段、雑踏の中では耳にすることのない己の心の声が、聞こえてくる。

その内容は様々だ。

死んだ両親に対する想い、人生の回想、綾華のこと、おじさんのこと、お婆さんのこと――。

言ってしまうえば、考え事をするのに向いているのだ、この場所は「こんな所でずっと本読んで、よく飽きないわね、あなたも」

聞き慣れた、落ち着いた女子生徒の声がした。俺は本に目を落とすまま、口を開く。

「飽きる、飽きないの問題じゃないだろ。俺は静かな所が好きなんだ」

「ふうん……ねえ、何読んでるの？」

「ちよつと、おい――」

抵抗する間もないまま、読んでいた本を取り上げられる。俺はようやく顔を上げ、前方に立っている女子生徒を見据えた。小柄な身体に、茶色に染めたショートヘアの髪。その容姿は、一年の頃から、何ら変わっていない。

「『兵法者を語る』、ねえ。あなたも、こんなの読むんだ」

「特に読みたいのがなかっただけさ。他のおすすめ図書は、読み尽くしたし」

手持ちぶたさになった俺は、窓の外の景色に視線を移した。

「おすすめ図書って、確か、図書委員の人が紹介するアレよね。こないだ恋愛小説読んでたのはそういう訳か」

「あれは半分くらい読んでやめたよ」

俺がその小説を読んでいる時、同じ机に座っていた女子生徒三人組が、しきりにこちらを見ながらくすくす笑っていたのだ。それで、気分が悪くなつて読むのをやめた。

「……そうそう、期末の成績、良かったらしいじゃない」

「香我美だって、かなり良かったんだろ」

俺は勉強自体は好きでも嫌いでもないが、割りと興味があることも確かだ。だけど、他人との成績の比較についてはこれっぽっちも関心がなかった。

「……あなたって、全然見栄を張らないのね」

香我美は、可笑しそうにくすくす笑った。

「話変わるけど、夏休みはどうするの？綾華さんとどっか行ったりする？」

「まあな。だけど、あまり出かける余裕はないかもしれない。……

今年の夏休みはやることあるから」

俺は窓の外をぼうつと見ながら、そんな言葉を口にした。

「やることって、何よ。ボランティアでもやるの？」

「……そういうのは嫌いじゃないけど、残念ながらやる予定はないな。俺がやるうとしている事は、もっと義務的なもので、挑戦を強いるものだ」

「……義務的で挑戦を強いるもの、ねえ。聞いている分には、格好良いけど。……回答を期待せずに聞くわ、その『やる事』って何なのよ」

「秘密だ」

「……ふーん」

香我美は面白いものを見るような目で俺の顔を眺めた後、

「まあ、いいや。頑張ってるね」

と、ぼんと俺の手元に『兵法者を語る』を置き、くると背を向けた。そして、そのまま颯爽と図書室を去っていった。

「何しに来たんだ、あいつ」

俺は彼女が去っていった方向を見つめながら、首を傾げるのだった。

今日は、綾華の部活が終わるのが遅くなりそうだった。何せ、綾華が所属するのは水泳部だ。真夏が舞台であると言ってもいい。これから夏休みに入るから、綾華も随分忙しくなるだろう。俺は綾華との待ち合わせを諦め、図書室が閉まると、すぐに学校を後にした。帰り道にスーパーに寄って買い物を済ませてから帰宅すると、さっそく夕飯の仕度に取り掛かる。

今日の献立はカレー。簡単かつ美味なので、俺のお気に入りの料理だ。

八時ごろになって、やっと綾華が帰ってきた。その頃には、俺の手作りカレーはすっかり出来上がっていた。

「良い匂いね。今日はカレーかぁ」

玄関から綾華の澀刺とした声が聞こえてくる。俺はカレーを皿へよそり、冷蔵庫から冷えたサラダを取り出して、それらをお盆に載せる。そして、お盆を持って居間の隣にある和室へと向かうと、調度綾華が居間に入ってくる。

「今日は、和室で食べるの？」

「座敷の方が、寛げるからな。飯にするから、早く来いよ。お前も、泳ぎまくって腹が空いてるだろ」

そう言っ、座敷に上がる。「はいはい。すぐ行きますよ」と綾華が快活な声を上げる。洗面所へ走っていく綾華の足音を耳にしつつ、俺はお膳の上に、淡々と皿を並べていく。

皿を並べ終わると、俺はそのまま座布団に座り、コップにお茶を注いでそれを口にする。目の前には、匂いを吸うだけでも唾液が出る、特製大盛りカレーがある。綾華が和室に入ってきてそれを目に

し、おおつと声を上げる。

「美味しそう。でも……太りそう」

「大丈夫だ。お前がそう言うだろうと思って、二皿分しか作ってない。お代わりはなしだ」

「それはありがたいけど、ちょっと残念ね」

綾華が、俺と向かい合わせに座る。俺はそれを一瞥した後、両手を合わせて「頂きます」と言って、さっそくカレーに手を掛けた。綾華もそれに倣って、女子とは思えないようなスピードと食べっぷりでカレーを平らげていった。

「……なあ、綾華」

俺は一つ思い浮かぶことがあって、スプーンを持つ手を止めた。

「……何？」

綾華がスプーンを銜えながら、上目遣いに俺を見る。

「俺の知り合いに、香我美って奴が居るんだけどさ」

「香我美さん？ああ、知ってる知ってる。頭の良い子でしょ」

「そうだ。お前、あいつと知り合いなのか」

「ううん。話しかけたことなんて、ないわよ」

「そうか。あいつ、会う度に綾華のことを聞いてくるんだよな」

「そうなの？私、知り合いが多いからなあ。たぶんその子も、友達から私の事聞いたんだと思うよ」

「やっぱりそうかな。でもあいつ、友達はそんなに居ないような……」

「…」

俺が、どうしたものかと考えていると、ふと、綾華がじつところを覗き込んでいる事に気づく。

「何だよ」

「智也、その子と友達になりなよ」

綾華が身を乗り出し、輝くような明るい表情を見せて言った。俺はそんな綾華の様子を見て、苦笑しながら肩を竦める。

「俺にとって香我美は、もう友人の部類に入ってると思うけど」

「そうじゃないでしょ。もっと親交を深めてみたらどう？って意味

よ」

「これ以上、その『親交』とやらが深まるかどうか。……俺が言えた事じゃないが、あいつ、結構変わってるから」

「でも、智也に話しかけてくるってことは、智也に興味があるってことじゃない」

綾華の言うとおり、俺に興味を持つてるのは確かだ。——ただ。

まるで実験材料を探し当てた科学者のような目で、香我美は俺を見ってくるのだ。面白がっていると云っても良い。だけど、不思議と俺はあいつが嫌いではない。

「仲良くなつて、今度私に紹介するのよ。……約束だからね」

「……約束はしない、とだけ言っておく」

俺はさっさと話を切り上げ綾華の詰問から逃れようと思い、スプーンを握り直して食事に没頭することにした。

夕食を終えて、九時頃まで居間で綾華とテレビを見ていたが、綾華の家から車の停車音が聞こえると、綾華はおやすみと屋敷を出て行った。どうやら、おじさんが帰宅したらしい。

「……さてと」

俺はテレビを消して、ソファーから腰を上げる。

綾華が居なくなり、屋敷は途端に静まり返る。まるで、この屋敷だけが外界から隔離されて、時間を止められているかのようだ。

夜になると、この屋敷はゆっくりと闇の性質を帯び始め、屋敷内の空気が変わる。それは常人には気づくことのできない僅かな変化だ。こうして闇の住処となった屋敷の中に居ると、俺自身にも変化が訪れる。徐々に血が疼き始め、平凡な男子学生である『俺』は影を潜めて、”呪術師”としての『俺』が顔を出す。それは、知られざる俺の一面だ。

——加賀家には、代々『呪術』が伝えられてきた。

ここでいう『呪術』とは、超古代から伝えられてきた超常の力のことを指す。簡単に言えば、超能力だ。

一般に知られている『呪術師』の種類は、極めて広範囲に渡る。例えば、“シャーマン”だ。霊的な存在を自らの身体に宿らせて、超常の力を発揮することができる——神のお告げがその典型だ。また、自らの魂を肉体から離脱させて霊的存在と接触するという、脱魂の術を使える者もある。

もう一つ、著名な例を挙げると、それは“雨司”だ。雨司とは、“雨乞い”を行う呪術師のことを指す。雨乞いとは、人が水不足に陥った時、呪術的な方法によって雨を降らすことを言うが、この雨乞いの呪術は種類が非常に豊富で、代表的なものに、歌や踊りなどの儀式がある。

これら、著名な呪術と、加賀家に伝わる呪術とはその性質上、種類が全く異なっている。加賀家の呪術は、闇の要素が強い。そのほとんども、人に攻撃を加える、最悪の呪術と言っても良い。人を呪い殺したり、病気を煩わせたりするのだ。

俺の祖先は危険な呪術を生み出し、それを代々伝えてきた。何の為に、こんなものを作る必要があったのか、呪術師である俺にさえはつきりとは解らない。

俺は生まれたときから、呪術師としてあるべく、両親に育てられた。三歳までは、おとぎばなしを聞かされる感覚で、加賀家にまつわるエピソードを毎日聞かされた。夜、寝る前には、絵本——おそらくそれも呪術に関する内容だったろう——を母親に読まされた。苦痛を感じたことはなかった。

神秘的で、ワクワクする毎日だった。

——だが。

俺が四歳になった時のことだ。ある日、俺は両親に腕を引かれ、地下室に連れて行かれた。地下室は、この屋敷の中に隠されていて、誰かに発見されることのないように呪術が施されている。地下室には明りがなく、真っ暗だった。入り口に入ると、俺は両親に手を引かれ、暗くて足元が見えない中、階段を下りていった。

そして——地下室の光景を目の当たりにし、俺は恐怖で真っ青に

なった。

地面の上に、何百もの蛇が這いずり回っていた。まさにそれは、蛇の海だった。

俺はすぐに悲鳴を上げて逃げようとするが、非情にも両親は俺の背中を押して、突き落とした。俺はその海へと落下した。

俺は絶叫して、必死で足掻くが、身体には次々と無数の蛇が巻きついてくる。

頭が噛まれ、腕が噛まれ、足が噛まれた。そして、数時間、数日、酷い時には数ヶ月、両親は俺をその地下室に閉じ込めて、蛇の海の中で溺れさせた。

俺の心が壊れるのは、あっという間だった。俺は全てに対し無関心になり、蛇に身体を噛まれようが、首を絞められようが、ただされるがままになった。

永遠と地獄のような日々が繰り返され——俺は五歳になった。すると、両親の態度が急変した。

”もう地下室には行かなくて良い。その代わり、次は他の訓練に励みなさい”

両親は平然と言った。

つまり——地獄といえるあの拷問の日々が、両親にとっては、ただの『訓練』でしかなかったのだ。

俺は、空っぽになった心で、ぼんやりとその事を不思議に思った。何故、二人は、自分の子供にあんなことを平気でしたのか。

自分の息子をいじめて楽しんでいるのか、と考える。だが、二人の顔をじっと観察してみるが、どうもそうは見えない。むしろ、訓練について語る両親の顔は、とても幸せそうだった。

そして、俺はその小さな頭で理解した。

——父さんと母さんは、壊れているんだ。

それを理解した時、俺は何とも言えない感情を抱いた。それはきつと、両親を哀れに思う気持ちだったのだと思う。

皮肉なことに、その時から、壊れたはずの俺の心は、再び人とし

ての感情を取り戻し始めた。

淡々と両親から呪術の訓練を施され、それを当然のように俺は受け入れる。そんな日々が続いていた。

だが――。俺が、小学二年生になった時のことだ。

ある日の夕方、俺は屋敷に一人で留守番をしていて、両親が帰るのを待っていた。

血のように真っ赤な空が印象的で、俺は窓からずっとそれを眺めていた。そんなとき、裏口の扉を誰かが叩く音が聞こえた。

俺は廊下を忍び足で歩き、裏口の扉に近づいた。すりガラスに、二つの人影が映っている。俺は誰、と呟く。すると、智也か、と父親の声がした。いつもと変わらない無機質な声。俺は恐る恐る戸を開ける。

そこに、立っていたのは――血みどろになった父さんと母さんの姿だった。

そこから先はよく覚えていない。

覚えているのは、二人がそのまま裏口の玄関で倒れて絶命したということと、最期に俺の頬を撫でて死んでいった母さんの冷たい手の感触。そして、二人の死骸を前にして、俺はずっと泣き続けたということだ。

俺は悲しくて悲しくて、涙が枯れるまで泣き続けた。

憎い存在が消えたのだから、嬉しいはずなのに、俺はどうしてそんなに涙したのだろうか。

――そう。俺は愛していたのだ、二人のことを。

自分でも気づかなかった。失ってみて、初めて気づいた。

二人は狂った精神の持ち主で、俺はそれが堪らなく憎かった。だけど、俺はそんな彼らを心の奥底では、愛していた。

泣き疲れた俺は、ぼんやりと目の前の死骸を見る。そして、決心した。

――二人を殺した人間を、絶対に殺してやる。その家族もろとも。それは、二人の遺言でもあった。

” 私達の仇を討て”

最後に、両親はそう言い残して逝った。

俺は、喜んでその望みを受け入れようと思った。大切なものを失って、俺の心はぼつかりと空洞ができた。その空洞に流れ込むようにして、新たな憎しみが俺の心に広がった。

……それが、両親が死んだ今でも、俺が呪術師をやっている理由だ。いつか来る復讐の時までに、俺は力を蓄え続け、策を練り続ける。

俺は居間から出て、裏口に向かった。

裏口は、ひっそりと夜の闇に隠れていた。窓から差し込む月明かりが、玄関を薄つすらと照らしている。

玄関の前でしゃがみ込み、二人の死骸があつた床の上を手でゆっくりとさする。

血は綺麗さっぱり拭き取られて、消されている。死骸はとうに処分されている。

——ただ。

一つだけ、依然として消されていないものがあつた。

俺はゆつくりと目を閉じる。

——母さんの悲痛の叫びが。

——父さんの悔恨の嘆きが。

……この耳に、聞こえてくる。

俺はゆつくりと目を開けた。

この場所には、二人の強烈な思念が残っている。二人が唯一残っていたのは、この、想いの欠片だ。

俺はそれを大事に胸に抱え、しばらくその場を動かなかった。

第一章 三

石段を一段下りる度、地下室に足音が大きく木霊する。薄暗くて足元が見えない。しかし、一段一段の間隔を脚が覚えていて、決して足を踏み外すことはない。

——外界と切り離された、閉鎖的な空間。そこに漂う甘い空気が、意識を法悦へと誘う。だが、俺の意識は、押し寄せる快感をいとも容易く退け、極めてクリアな状態を保っている。

階段を下り切ると、狭い地下室が壁掛けのランプの光によってぼんやり浮かび上がっていた。俺は部屋の隅の暗がりには視線を向けて、「おいで」

と声をかけた。縄を石畳に擦り付けるような音が地下室に響き、細長い影が壁に浮かび上がる。俺が両腕を広げると、それはするすると近づいてきて、俺の片腕に絡み付いた。

「……良い子だ」

まるで我が子を抱いているような愛しさが胸に広がる。そんな俺の感情に呼応するかのように、白蛇が嬉しそうに身をくねらせる。

「さあ……そこに座って」

人を相手にするように、そっと優しく声を掛けると、白蛇は大人しく俺の腕から長い身体を解き、地面へトグロを巻いて座った。

俺は白蛇と向かい合って、座禅する。ひんやりとした地面の感触が尻を撫でる。

俺は一つ深呼吸した後、目を瞑り、意識を内界へと集中させた。だんだん意識が深い闇へと沈んでいき、やがて完全に音が消こえなくなった。

一通り訓練を終えると、俺は目を開いた。いつもながら、堪えるな、と思う。精神を過剰に集中させたせいか、身体は汗だくだ。

俺は額に滲む汗を腕で拭う。

「……お疲れ。もう下がって良いぞ。今日の日課は終了だ」

俺は息を切らせながら、眼前の蛇に微笑みかける。すると、白蛇が俺に近寄ってきて、再び俺の身体に絡み付いた。

「ん？……どうした」

蛇の身体は冷たくて心地良く、高まった体温が次第に冷めていった。

「気を遣ってくれてるのか。ありがとな」

俺が微笑みながらそう言うと、蛇は首をこちらへ擡げてシューと口から音を立てた。俺がよしよし、もう行って良いぞと身体を撫でると、嬉しそうに身をくねらせながら俺の身体から離れ、暗がりへと戻っていった。

今日の日課はこれでお仕舞いだ。

こうして自主的に呪術の鍛錬は続けている訳だが、鍛錬の厳しさは、両親が生きていた時の半分にも満たない。それは、単に呪術が身に付くようになって、それほど苦痛を伴うことがなくなったからかもしれない。だが、当時俺が両親から強制された訓練は、やはり凄まじいものだった。今でも、その記憶を思い出す度に、俺は恐怖に戦慄する。

毎日夜になると、この地下室で俺は呪術の鍛錬を一時間程度行うことにしている。この屋敷に馴染んでいる綾華でさえ、まさか、地下室があるなんて思っても居ないだろう。発見される心配は皆無に等しい。人目につかぬよう、地下室には厳重に呪術が施されている。ただし、発見される恐れがないのは、通常の人間であればの話。呪術師なら発見することは不可能ではない。

だが、呪術師がこの屋敷に侵入してくることはまずないと思ってい。俺が呪術師であることは、俺以外に誰も知らないからだ。

復讐を成し遂げるため、俺はこうして密かに呪術師として日々鍛

鍊を続け、復讐の準備を淡々と進めているが、未だに犯人の正体は判明しておらず、その手がかりらしきものは何も残っていないかった。一つだけ手がかりらしきものがあるとすれば、両親が息を引き取った際の記憶だった。

——しかし。

その時の記憶がどういう訳か曖昧で、年月が経つことにますます薄くなっていく。

どうにかならないか——と俺は首を捻って考えた。そして、ある考えを思いついた。

俺はある霊能者に、依頼を持ちかけた。

今日の深夜零時に、その霊能者が家に来る手筈になっている。

今日は訓練を早めに切り上げることにして、地下室の隅に向かって「またな」と一声掛けた後、俺は石段を登った。

登っていくと、階段は途中でぶつ切り切れて、その先は行き止まりになっている。天井は低く、俺は中腰の姿勢で立つ。そして、天井を手で押す。すると、ぽっかりと蓋が取れて、俺はその隙間から外へ出た。

外に出ると、そこは俺の部屋だった。地下室の澱んだ空気から開放され、俺は大きく深呼吸しながら背伸びをした。俺の部屋の畳の下には、地下室への入り口が隠されているのだ。入り口を念入りに施錠した後、俺はその上に元のように畳を敷いた。

第一章 四

——時計が真夜中の零時を回った頃、裏口の扉が叩かれる音が廊下に響いた。

「来たか」

客室にいた俺は腰を上げ、廊下へ出た。薄暗い中を慎重に歩いていき、裏口まで来るとそつと戸を開けた。

そこには、スーツ姿の女性が、立っていた。歳は二十代後半といったところか。前髪を左右に分け、そこから覗く顔は凜々しい。ぱりつとしたスーツを長身の身体に纏い、まさに仕事に生きる女性、という言葉がしっくりくる。

女性が、ゆっくりと頭を下げる。

「天宮 菜月さんですね？」

俺が小声でそう囁くと、女性がはいと頷いた。俺は「どうぞ」と、中に入るよう促した。天宮さんは軽く頭を下げ、屋敷の中へと入る。彼女が中に入ると、俺はそつと静かに戸を閉めた。

「こつちです。暗いので、気をつけて」

俺が薄暗い廊下を先導して歩き始めると、後ろに続いていた天宮さんが突然ぴたりと足を止めて、玄關に振り返った。

「どうしましたか……」

俺がそう言つて振り返ると、天宮さんは「いえ、お気になさらずに」と苦笑しながら再び前を向いた。

「そうですか。……行きましょう」

俺がそう言つと、彼女は無言で頷き俺の後に続いた。廊下の角を曲がると、奥の方で客間の一室だけが煌々と明りを点らせている。俺は客間の前まで来て、戸を開けた。俺が手仕草で入るように促すと、彼女は失礼します、と座敷に上がる。

「どうぞ、座ってください」

俺がそう言つと、彼女は座布団の上に座った。俺は彼女と向かい

合わせに座り、予め用意しておいたコップにお茶を注いで手渡した。ありがとう、と天宮さんがコップを受け取る。喉が乾いていたのか、彼女は一気に飲み干した。そして、コップを口から離すと、ふうと小さく息を吐き、俺を正面に見据えた。俺は彼女を見返し、口を開く。

「屋敷に入ってから、この部屋に来るまでに、どこかに異常がありませんでしたか？もう既にお気づきだとは思いますが」

「……ええ。ありました」

天宮さんは小さく頷き、とん、とお膳の上にコップを置いた。

「先程私が入ってきた裏口のことですね。あの場所に、膨大な負の思念が溜まっていました。霊能者でなくても、敏感な人なら誰でもあの場所の異常に気づくでしょう」

「……ええ。俺が依頼したいのは、あそこに溜まっている負の思念について、です」

天宮さんが真剣な瞳で、俺を射抜くように、じつと見た。

さっき裏口から彼女を屋敷に入れたのは、人目につかないようにする為だけでなく、果たして彼女が、”裏口の異常”に気づくかどうかを試す為でもあった。裏口でさっき、彼女が一瞬後ろに振り返ったのは、異常を察知したからだ。もし彼女が気づかなかったのであれば、彼女は霊能者ではなく単なる詐欺師であるということになる。そうなれば、当然俺はこの依頼を取り止めにしただろう。

「あそこで——裏口で、以前誰かがお亡くなりになられたのですか？」

「ええ、そうです。……ここからの話、誰にも口外しないと約束できますか？」

「……勿論です。誰にも口外しないとお約束します」

「信じましょう。——昔、」

俺の父と母が、あそこで死にました。

その俺の言葉に、天宮さんが息を飲むのが解る。

「無粋なことをお聞きしますが……あなたの両親は、殺害されたの

ですか？」

「……ええ。だから、あんなに強い負の思念が依然としてあの場所に残っているんです」

人が非業の死を遂げたりすると、その時に味わった憎しみや悲しみなどの負の感情が、その場所に強く残ることがある。いわゆる残留思念、というものだ。この屋敷の裏口に残っているものは、まさにそれだ。

「……二人が死んだのは八年前、俺が九歳の時でした。ある日の夕方、俺は一人で屋敷の留守番をしていました。そんな時、裏口の戸を誰かが激しく叩きました。戸を開けてみると、両親が血みどろになって立っていて、二人はそのまま地面に倒れました。彼らはもう既に手遅れの状態で、すぐに息を引き取りました」

俺の話聞いた途端、彼女の表情が強張った。これが、御被いや供養などという、ただの依頼ではないことを悟ったのだろう。……大体、依頼の指定の時間からしてみても、あまりに突飛しすぎているから、彼女ももう既にそんな予感はしていたと思うけれども。

「ならば、今回の依頼はあの場所で亡くなった二人の魂を供養する、ということではないのですか？」

「違います。俺が頼みたいのは……かなり専門的になりますが、あの場所に溜まっている残留思念をビジョンとして捉えて貰いたいです」

「つまり、それは……二人が息を引き取る際、目にした光景を見ろ、ということですか。……いや、違いますね。つまり、あなたは、私に、過去を見ると言っているんですね」

「お察しが早くて助かります。裏口に溜まっている残留思念をビジョンで捉えることによって、過去にあそこで何が起きたかを、明確に視て欲しいんです」

ビジョンで捉える、ということはその名の通り、映像でそれを視るということだ。

残留思念は、通常、霊能者によって様々な形に表現される。

——耳に見知らぬ人の声が聞こえてくる、他人の感情が流れ込んでくる、過去の情景を見る……。

その形態は、極めて広範囲に渡る。

俺は、その中の一つである、『過去の情景を見る』という方法を彼女に依頼したい訳だ。

「……あなたは、霊的なものへの知識があるとお見受けしますが」

「はい。俺の生まれた家系がそういったものに深く関わっていて、俺はその影響を少なからず受けました」

「……なるほど。そうですか」

天宮さんが顎に手を当てて、少し考える仕草をした。

「できないことはないと思いますが……難しいかもしれませんが。何しろ、思念をビジョンとして捉えると、その映像はあやふやなものになりやすいから」

「……でしょうね」

俺は頷き、さらに問題を難しくするようですが……、と話を進めた。

「あなたが感じ取った思念を、俺の頭に直接送り込むことは可能ですか？」

俺のその質問に、彼女は眼を丸くした。

自分が感じ取った思念を他の人の頭に送り込む、ということは、例えるなら、自分の携帯で撮った動画を、他の人の携帯にメールで送るようなものだ。この場合、『携帯』が『人間の脳』にあたり、『動画』がその人が感じ取った『思念』にあたる。他人の携帯（他人の脳）に、動画（思念）を送信することによって、同じものを見せることができる、ということだ。

彼女が視た過去の情景をそのまま俺の脳に送り、俺もその過去の情景を見ることができるようになる。それが俺の依頼だった。

「不可能ではないけれど、そういったものへの耐性や経験がないと、危険を伴います」

「大丈夫です。自分で言うのも何ですが、俺は霊能力者のようなも

のですから」

「……確かに、そのようですね」

天宮さんは、俺の目を探るようにじっと見た。俺は目を逸らさず、その視線を受け止める。数秒見つめあった後、天宮さんが口を開いた。

「……わかりました。依頼を受けましょう」

「ありがとうございます」

「ただ、私が危険だと判断したら、すぐに中止します。よろしいですね？」

「ええ」

「実行は明日にしましょう。体調に気をつけるのは勿論のこと、できるだけ、甘いものや肉類などを口にするのは控えるように」

「わかりました。では、明日の夜、午前零時にまた来て下さい」

「承知しました」

天宮さんが、立ち上がった。

「ちょっと待って下さい。前金の支払いは……」

俺が言い終わる前に、彼女は手の平を差し向けて制した。

「いえ、結構です。支払いは、依頼が成功した後で構いません」

……それほど、この依頼を成功させるのは難しい、ということだろうか。

俺は軽く頷くと立ち上がり、再び天宮さんを裏口まで案内した。

「では、今日はこれで失礼させていただきます」

「……ええ」

天宮さんは丁寧にお辞儀をすると、颯爽と屋敷を後にした。

「……ふう」

俺は彼女の背中が見えなくなると同時に、大きく息を吐いた。

一気に緊張が抜けて、思わず戸口の壁に背中を付けて寄りかかる。

「……たいしたもんだ」

そう言っ苦笑い、俺は夜空を仰ぎながら、肩を竦めた。

天宮さんは、どんな難題を吹っ掛けられても、顔色一つ変えずに

了承してしまった。真つ当な霊能者なら、こんな依頼断るに決まっている。……それだけ、あの人は己の持つ力と知識に自信があるということだろう。ああいった人はなかなか見つからないと思う。探すのに苦労したかいがあったもんだ、と俺はほっと息をつく。

その場でしばらく俺は動かずに、夜空を見上げていた。星がよく見える。星の輝きは、どこか虚しげに見えた。

俺は後ろに振り向き、そつと裏口を見やった。

……ここで、俺の両親は死んだ。両親が死んだ時の記憶が、俺にはわずかしが残っていない。八年経てば、記憶が薄れてくるのは当たり前だが、だからといって、この記憶が思い出せなければ、犯人の手がかりを掴むことができない。

だから、俺は霊能者の力を借りて、あの時の記憶を蘇らせようとしている。あの時、何があったのかを知り、それを手がかりに犯人を追う。そして……犯人に、復讐するのだ。

——しかし。

復讐への一歩が踏み出せそうなのに、俺は別に嬉しくなかった。何故なら。

犯人に対する憎しみがいつの間にか消え失せてしまっていた。復讐に必要なのは、憎しみの感情に他ならないのに、今の俺にはそれが無い。犯人の手がかりを掴めそうだとしても、そもそも犯人に対する憎しみがなくなってしまったのだから、特に何も感じない。

思えば、今まで復讐の準備がうまく進んでこなかったのも、復讐に必要な肝心の原動力が底を尽きてしまっていたからかもしれない。

俺がそうなった原因は、自分でもよく解っている。この八年間が、俺の憎しみをすべて癒してしまうほど楽しかったからだ。

目を閉じれば思い浮かぶのは、綾華や小父さん、小母さんと過ごした日々。そして、彼らの笑顔。

彼らが、復讐なんてしなくても幸福な人生を歩んでいけることを俺に教えてしまったのだ。

——だが。

それでも、俺は止まらない。俺は元より復讐する為に生きてきた。この生き方が俺の心にあまりに染み付いて、止まれぬ所まで来てしまったのだ。

止まる方法が唯一あるとすれば、それは、この復讐を終わらせることだ。

すべてを終わらせた後に待つのは、平凡な日常。それは一見ありきたりだが幸福な宝物で、俺がこの世で唯一、欲して止まないものだった。

第一章 五

廊下に響くインターホンの音で、俺は目を覚ました。顔を上げて周りを見渡すと、客室だった。

どうやら、天宮さんが帰った後、客室で考え事をしているうちに、いつの間にか寝入ってしまったらしい。俺は起き上がり、大きく背伸びをした。そして、眠気を払おうと、ぱんぱんと頬を叩いた。

気合を入れた後に、客室を出て廊下を足早に歩く。玄関まで来ると、サンダルを足に突っ掛けて外に飛び出す。すると、門の前に立っていた綾華がこちらに振り向き、おはようと声を上げる。

俺は門へと走っていき、おはようと言葉を返した。未だ眠気が取れていないせいか、弱い弱い声になってしまった。

「夜更かしでもしたの？」

綾華が俺の顔をじつと覗き込んでくる。

「……平気だ。気にするな」

俺はズボンのポケットから鍵を取り出して、門の錠を外した。

綾華が門扉を通りながら呟く。

「平気ってねえ。そんな眠そうな顔で学校に行けるの？しかも、まだ制服にさえ着替えていないじゃない」

綾華にそう言われて、改めて自分の格好を見ると、Ｔシャツに半ズボンという寝巻き姿のままだった。

「……やべ、着替えるのすっかり忘れてた。綾華、悪いが今日の朝飯はお前が作ってくれないか？」

綾華は一瞬顔を顰めたが、わかったわよと溜息交じりに頷いた。制服に着替えて、冷水で顔を洗い眠気を完全に吹っ飛ばした頃には、既に朝食の仕度は整っていた。

「悪いな、綾華。今日の夕飯は俺が作るから」

俺がそう言っただけで席につくと、向かい側の席に座っていた綾華が、心底呆れたような表情を浮かべた。

「何だよ。なんか俺、変なこと言ったか？」

「言ったわよ。……今日は、終業式でしょ。これが何を意味するか、解る？」

……何故だか解らないが、綾華は不機嫌そうだ。

「……今日で学校は終わり、明日から晴れて夏休み、ってことだろ？」

「違うわよ。終業式が終わった後、クラスの打ち上げがあるでしょー！だから、今日は夕飯なんて作る必要はないの」

「……ああ、そうだったな。俺は、どうせ行かないけどね」

「また、そんなことを言って！行きなさい、智也。たまには、人と触れ合いなさい！」

綾華に凄い剣幕で捲くし立てられ、俺は一瞬たじろぐが、すぐにやれやれと肩を竦めて大きく息を吐いた。

「いいよ、俺は。綾華が打ち上げに行くって言うんなら、俺は一人で外で食ってくるから」

俺はそう言ってお茶碗を綾華に差し出す。しかし、綾華はそれを受け取ってくれず、代わりに自分のお茶碗を手にとってご飯をよそった。

「打ち上げに行かないなら、ご飯抜きね」

「何だよ、その仕打ちは。……仕方ないなあ。わかったよ。誰か、友達誘って食いに行つて来るよ。それならいいだろ？」

綾華は、うーんと首を捻りながら、唸った。

「……そうねえ。智也の友達つて皆、優等生で寡黙な、まさに智也タイプの男子生徒しか居ないんだよね。もう少しジャンルを広げてもみなくちゃ……」

そう言つて、綾華はさらに考え込む。

綾華が一向にご飯をくれないので、俺はとりあえず手元にあった味噌汁を啜ることにする。

「そうねえ……坂山さんなんて誘つてみたらどうか？」

いきなり突拍子もない提案をされて、俺は味噌汁を危つく口から

零しそうになる。

「なんで、ろくに喋ったこともない相手と二人きりで、食事する必要があるんだよ」

俺は一瞬彼女と食事している場面を想像し、さぞかし腹の溜まらない食事になるだろうなと、苦笑いする。

「別に、二人だけでとは言ってないじゃない。他に友達を何人が引き連れていけば？」

「あいつらは、俺同様、親しい知人以外とは全く付き合おうとはしない奴らだ。誘っても、絶対来ない」

駄目だ駄目だと俺は左右に手を振る。

「あ、そうだ」

綾華が、突然ぼんと手を打った。

「智也、香我美さんを誘いなよ」

「……香我美か」

俺は一瞬の間、香我美との食事を想像する。

「それで良い。あいつの世間話は奥が深いから、結構為になるんだよな。あいつとなら、問題ない」

「……やけに乗り気ね。智也にしては、珍しい」

綾華は不思議そうな顔で俺を見つめながら、俺の茶碗をようやく受け取った。その時、

「なにになに？何の話してるの？」

突然、背後から声がした。それが、久しぶりに聞く声だったので、俺は反射的に居間に入ってきた人物へと振り返る。

「小母さん、お早う」

俺に続いて、綾華もお早う、お母さんと声を上げる。

「お早う。智ちゃんとは一日ぶりになるわね」

小母さんが、軽快な声で言葉を返しながら、席につく。

……小母さんは、昔から俺のことを「智ちゃん」と呼ぶ。「智ちゃん」じゃ、まるで女だ。小さい頃はその呼び名でも別段気にすることとはなかったが、この歳になってもそう呼ばれるものだから、たま

ったものじゃない。外でその呼び名で呼ばれた日には、恥ずかしくて居たたまれなくなる。呼ばれるこっちの身にも、なって欲しいものだ。

そんなことを頭の隅で考えながら、俺は口を開く。

「……小母さん、疲れは取れたの？」

「うん、一晩ぐっすり寝たら取れたわ。今日は仕事がないから、のんびりしてられるわね」

小母さんの顔を見る。確かに顔に疲れの色はないようだ。俺はそれを確認して安心すると同時に、いつもの癖で、小母さんの顔と綾華の顔を見比べてしまう。やはり、親子だけあって、凄く似ていると思う。小母さんが髪型を今のショートヘアから綾華と同じストレートのロングヘアに変えたら、まさに二十年後の綾華の姿になるだろう。

小母さんは、コップに麦茶を満杯に注ぐと、一気にそれを飲み干した。思わず、小母さんの豪快な飲みっぷりに目を奪われる。

「で、何の話してたのよ」

空になったコップをとん、とテーブルに置いて、小母さんが言った。

「智也が、打ち上げ行かないんだって。人付き合いも大事なのに」綾華は昔から、俺の社交性のなさを気にしていて、それを言及してくる癖がある。

「良いじゃないの。人それぞれなんだから。智ちゃんは、今の智ちゃんのままで十分良いわよ」

綾華が否定的なのに対して、小母さんは、個性があつてよろし、と俺の性分を受け入れてくれる。俺の話題になると、大体二人は正反対の意見を主張して、言い合いを始める。

「良くないわよ。普段口数が少ないから皆には知られていないけど、智也のする話って、案外面白いのよ。それを披露する機会を増やしてあげるべきでしょうに」

「智ちゃんは、口数こそ少ないけど、自分の主張は、はっきりと言

う子よ。心配することないわ。……ねえ、智ちゃん」

小母さんは食パンを齧りながら、綾華を鼻で笑うかのようにそう言った。俺は特に返す言葉が見つからず、黙々と食事を続ける。

「どこまで樂觀的なんだか。とにかく、それだけの度胸があるんなら尚更社交的になるべきじゃないの？」

俺は食卓で永遠と議論し続けるであろう二人を残して、ごちそうさまと席を立つと、さっさと食器を洗い始めた。

綾華は今日も相変わらず朝練があつて、早めに登校しなければならず、議論なんてしてる場合じゃないことに気づくと大急ぎで家を飛び出していった。俺はというと、小母さんとの会話をのんびり楽しんでから、家を出た。

「智ちゃん。今夜、お母さんとお父さんは、久しぶりに二人だけで外食してくるから」

門の前で小母さんが、嬉しそうに笑いながら言った。小母さんはいつもより上機嫌だ。娘と久しぶりに話を沢山することができて、嬉しかったのだろう。その顔は、とても三十七歳とは思えないような若々しい笑顔だった。

「解った。俺は友達と外で食ってくるから」

「……そう。あんまり夜遅くならないようにね」

「うん」

俺が頷くと、小母さんは顔を近づけて小声で囁いた。

「さっきの話題のことなんだけどね、綾華は別に悪気があつて、あんなこと言ってるわけじゃないのよ。智ちゃんにも、楽しく過ごしてもらいたいっていう、綾華なりの気遣いの」

「わかってるよ、小母さん。俺は別に気を悪くなんてしてないよ。

……綾華は世話好きな優しい奴だ。昔からこれっぽっちも変わってない」

それに、と俺は言葉を続ける。

「……俺はこう見えても、もう十分楽しく過ごしてる。無理してま

で、これ以上を望もうとは思ってないさ」

「……そう。さすが智ちゃん、綾華のこと、よく理解してくれてる。お母さん、嬉しいわ」

そう言って、小母さんはぽんぽんと俺の背中を叩いて笑った。

「……そろそろ行くよ」

腕時計を見ると、既に七時四十五分を回っていた。

「行つてらっしゃい、智也」

と小母さんは微笑みながら、手を振った。

そう言った小母さんの瞳には微かな期待が籠められていて、俺は一瞬、どう答えれば良いのかと戸惑う。

今、小母さんは俺のことを「智ちゃん」ではなく、「智也」と呼んだ。

……俺にとって、小母さんは、例えば血が繋がらなくとも、母親に違いなかった。そして、小母さんも、俺の母親になることを望んでいる。

ならば、俺が返すべき言葉は、一つしかないはずだ。だが——その言葉を言うことは、俺にはできない。

俺は断腸の思いで、迷いを振り払い、口を開く。

「……行つてきます、小母さん」

俺のその返答に、小母さんは一瞬、残念そうに、そして寂しそうに、顔を歪めた。

「……小母さん、か」

そんな小さな呟きが聞こえた。

だが、俺は気づかないふりをして、小母さんに背を向けた。

言つてやりたかった。……お母さん、と。

だが、俺にはそれがどうしてもできなかった。

「……車に気をつけてね」

背中に掛かる小母さんの声はどこか寂しげだった。小母さんの声に答えられない自分が腹立たしくて、何より小母さんに申し訳なくて、俺の心は針を刺すようにちくちくと痛んだ。

第一章 六

学校に着くと、俺はすぐに体育館に向かった。終業式が始まると、寝不足だった所為か、うとうととまどろみ始め、仕舞いにはすっかり寝入ってしまった。目を覚ます頃には、式は終わっていた。周りを見ると、生徒達がそろそろと列を成して体育館を出て行くところで、俺は慌ててその中に加わった。

教室に戻りホームルームを済ませると、放課となった。生徒達は夏休みの予定を口々に話しながら教室を出て行き、馴染みの教室にしばしの別れを告げるのだった。

今日の午後の予定は、やはり図書室で読書になるだろう。そこでふと、今朝、綾華に言われたことを思い出す。

…… そうだ。香我美を誘うんだっけ。

今、直接香我美のクラスを訪ねて誘えば良いんだろうが、それはちょっと気が引けた。香我美と会話するのは、いつも図書室で会う時だけで、他の場所では顔を見かけても挨拶すらしないのだ。会話は何度も交わしたことがあるのだが、どういう訳か、俺たちには図書室以外では喋らないという、奇妙な習慣があった。

…… 図書室であいつが顔を出すのを待ってれば良いかもしれない。だけど、もし現れなかったら…… まあ、その時はとっと諦めて、他の奴を誘えば良いか。

考えが纏まった所で、一先ず腹ごしらえをしようと席を立つ。今日は終業式なので、購買部と学食は休みだ。だから、昼食は一度学校の外に出てから、近くのコンビニで買うことになる。

俺がコンビニに買い物に行くため、教室を出ようとしたとき、廊下で立ち話をしていた数人の生徒達から声が掛かった。

「ねえ、今日クラスの打ち上げあるんだけどさ。加賀君も、良かったら来ない？」

「ほら、駅前に新しく焼肉屋がきただろ？あそこでやろうかと思

ってるんだ」

彼らが楽しそうに喋るのに釣られて、思わず口を開きかけた。だが、寸前の所で口を噤み、言葉を押し留めた。

「……実は、今夜は用事があつて、ちよつと行けないんだ」

苦笑いをしながら、ごめん、と謝る。

「あ、そうなんだ。それは残念」

「じゃあないな。今度やる時は来いよ」

生徒達は俺に興味を失つたようで、すぐに去っていった。俺は遠ざかっていく生徒達の背中を、しばらく立ち尽くしたままじつと見つめていた。だが、ふと我に返ると、軽く息を吐き、昇降口へと向かった。

昼食を済ませ、図書室で漫然と窓の外を見てみると、不意に眠気が差してきて、だんだんと意識がまどろみの中へ沈んでいった。

昨日、明け方まで依頼のことで忙しかった所為だろう。身体に溜まった疲労は大きかった。俺が目覚める頃には、既に時刻は四時過ぎだった。

俺は背伸びをすると、図書室をぐるりと見渡した。この時間になつても、生徒の姿はちらほら見える。大方、夏休み中に読む本でも探しているのだろう。

と、奥の書棚から三人の女子生徒がこちらに近づいてきた。三人とも、知らない顔だ。同じ学年だろうか。

「加賀君」

真ん中に立っていた女子生徒が、にやにや笑いながらそう言った。他の二人も、何故だかわからないが、くすくすと可笑しそうに笑っている。

「何？」

俺は、なるべく不快の色が顔に出ないようにしながら、答えた。

「あのさ、香我美さんのことなんだけど」

「……香我美がどうした？」

何で香我美の話が出るんだろう、と訝しげに思いながら聞くと、

「香我美さんと加賀君って、付き合ってるの？」

と興味津々といった様子で身を乗り出して聞いてきた。他の二人も、俺へ視線を集中させる。

「……付き合ってないよ。それが、どうかした？」

俺はそう答えて、一層訝しげな視線を彼女達に送る。

「いつもここで二人が仲良く話してるところを見かけるから、てっきりそうかと思って」

女子生徒の言葉に、うんうんと他の二人も頷く。

「それに香我美さん、今日の終業式の時だって、ずっと加賀君のこ
と見てたんだよ。合同授業の時だって……」

「きつと香我美さん、加賀君のこと好きなんだよ」

女子生徒達は口々に勝手なことを言っては、楽しそうにはしゃいでいる。俺は呆れたように肩を竦めると、彼女達へ言ってやった。

「俺も人の事は言えないが、あいつはそういった事に物凄く疎いぞ。
おそろく、それはない」

俺がきっぱりとそう言い切ると、女子生徒たちは不満げな表情を浮かべ、反論しようと口を開きかけた。だが、調度その時、図書室の入り口から、本人が入ってきたので、女子生徒達は渋々引き下がった。

「……じゃあね、加賀君」

「バイバイ」

「香我美さんを宜しくね」

女子生徒達は俺をからかう様にそう言つと、くすくすと笑いながら図書室を出て行った。

入れ替わるように、香我美が俺の元にやって来る。

「何、あの子達」

香我美は後ろに振り返って、去っていく三人の背中を視線で追っている。

「俺にもわからない。名前すら名乗らなかったから」

「すれ違う時、頑張ってたねって訳もなく囁かれたんだけど……どうい

う意味かしら」

「あいつら、お前が俺のことを好きだって思ってるみたいだぞ」

俺の言葉を聞くと、香我美は目を白黒させた。

「何よ、それ。どこからそんな発想が出てくる訳？」

「知らないよ、そんなの。香我美はそういうことに関しては物凄い疎い奴だから、絶対にそれはないって一応弁解しといてやったぞ」

「そうやって簡単に否定されるのも、何だかム力つくわね」

香我美はそう言って苦笑いを浮かべた。

「とりあえず、座れよ」

俺は正面の席を指差す。すると、香我美は意外そうに俺を見た。

「……どうした？」

「いや、あなたがそんなことを言い出すなんてって思ったの。いつも立ち話しかしたことなかったから、ちよつと驚いた……」

香我美は俺の顔を不思議そうに見ながら、椅子に座った。

俺はこほんと咳払いを一つして、香我美を見据えた。

「香我美」

「何よ。そんな真剣な表情で」

香我美は少しうろたえながら、俺に問いかける。

俺は、単刀直入に本題に入った。

「今夜、一緒に飯食いに行こう」

俺のその言葉に、香我美はは？と咂然と口を開けて驚いている。

「……本当に今日はどうしたの？寝惚けてるんじゃないの？」

「寝惚けてなんかいない。そんなに俺の言ってる事は変か？」

「変よ。あなたからそんな誘いをされるなんて考えもつかなかった」

気のせいかな、香我美の顔が微かに上気しているように見える。俺はどうして、そんなにうろたえる必要があるのか、理解しかねた。

「私は、別に良いけど……でも」

香我美の焦点の定まらない瞳が、大きな動揺を示している。俺は首を傾げながら、

「何だよ、ただ飯食いに行くだけだろう？お前となら話の馬が合う

かと思つて誘つてみたんだけど」

俺がそう言つと、香我美は一瞬無言で俺の顔を凝視した。そして、額を手で押さえて、はあと大きな溜息を吐くと、呆れた様子で言つた。

「……何よ、びっくりするじゃない。始めから、そうとはつきり言いなさいよ」

「俺は飯食いに行こうと言つただけだぞ」

「例え、あなたがそう思つていたとしてもね、食事の誘いなんてされたら、世の女性は皆、そういう意味だと勘違いするわよ。まあ、付き合いが長かったり、時と場合によつては、それだけで通るかもしれないけど。……でも、そうじゃない場合は、最初から誤解のないように、はっきり言つて欲しいわ。驚いて損した」

「意味の解らない奴だな。何をそんなに慌てたり、怒つたり……。香我美こそ今日はおかしいんじゃないか？」

俺がそう言つと、香我美は突然身体の動きを止めた。

「……そうかもしれない。何考えてるんだろう、私。こんなこと考えに来てる訳じゃないのに」

「香我美？」

香我美は床の一点にぼんやりと焦点を当て、何か考えているようだった。

「どうした？本当におかしいぞ、お前」

「……そうね。この頃、色々思うことがあつて、疲れてるのかもしれないわ」

香我美は抑揚のない声で呟いた。香我美のそんな覇氣のない様子に、俺は肩を竦めて、言つた。

「旨い飯食えば、沈んだ気分も消飛ぶだろうよ」

「……うん、あなたの言う通りかもね。じゃあ、せつかくだから、付き合つわ」

香我美はそう言つて、僅かに微笑んだ。

第一章 七

香我美と一緒に学校を出た。とりあえず、どこに行こうかと話し合う。打ち上げが沢山行われる今日のような日に駅前に行けば、知り合いに沢山会いそうなので、葉月川を越えてすぐにある商店街へ行くことに決まった。

商店街に向かう途中、俺も香我美も沈黙が苦でない性質な為にお互いに無理に会話をしようとはしなかった。ただ、時々交わされる会話は、普段よりどこか楽しげで、穏やかなものだった。

橋を渡って商店街が見えてくる頃には日はすっかり沈み、道上に並ぶ街灯は爛々と輝いていた。

俺は『美都瀬商店街』と大きく描かれた門の前まで来ると、口を開いた。

「……誘つていて何なんだが、ここら辺で旨い店って知ってるか？」

香我美は首を横に振り、

「知らない。外食なんてほとんどしないから」

と淡泊な声で答えた。

「……外で食うときはいつも駅前に行ってたから、ここら辺は俺も良く知らないんだ」

香我美の返事はなかった。隣を見てみると、香我美は商店街に立ち並ぶ店を物珍しげに眺めている。俺も香我美の視線を追って、店の列に注目した。若者受けしそうな派手な店が通りの左右を占めていた。

「興味があるのか？」

「……まあね。あんまりこういう店があるところには来ないから」

「インドアなタイプなのか、香我美は」

「そうでもないと思うけど。良く旅行に行ったりするし」

「じゃあ、香我美は……遊園地とか映画館とかにあんまり行っ事ないんじゃないか？」

「正解。私、自分でも呆れるほど、流行に疎いのよ」

「友達に、渋いって言われるだろ。俺もよく言われた」

「それも、正解。仲間が居て、嬉しいわ」

俺と香我美はしばらく無言で色取り取りの光で飾られた商店街を見て回った。商店街は平日なのに人通りが多い。通り過ぎる通行人は、やはり若者が多かった。もうすぐ夏休み、もしくはもう既に夏休みに入っている学生達だろう。

「結局、どこにするの？」

香我美がこちらに振り向いて、言った。

「……ラーメン屋、定食屋、中華料理店。結構種類あるんだな」

時間が経つにつれ、商店街はますます賑わいを見せるようになっていく。立ち止まる俺達の横をぞろぞろと沢山の人々が通っていく。

「あそこはどう？私さ、生まれてこの方、数回しか入ったことないのよね」

香我美の指差す先には、ファーストフード店があった。

「俺もあまり入らないよ。普通の人なら、ここまで来てファーストフード店かよ、って思うんだろうけど、俺達の場合は少々特別だからな。良いよ、あそこにしよう」

俺達は人込みに流されるように歩きながら、なんとか店の前まで来ると、少々戸惑いながらもその中にそっと足を踏み入れたのだった。

俺達は二階の窓際の席に座り、夜の商店街の景色を眺めている。

「人が多いのね。駅前ほどじゃないけど」

「こんなに多いんじゃない、うちの学校の連中も来てるかもな。……ほら、あの集団なんか、同じ学年の奴らだ」

俺は中華料理店の前で屯している若い連中を指差す。

「よく知ってるじゃない。あの中に、顔見知りが居るの？」

「……よく見てみるよ。すぐに解るさ」

そう言って、俺が手で促すジェスチャーをすると、香我美は目を細めながら、通りに屯する集団をまじまじと見た。

「……図書室に居た三人組じゃないの。なんでこんなところに居るのよ」

「駅前の方が学校から断然近いから、商店街は意外に穴場なんじゃないかと思ったんだが……どうやらそうでもないらしいな」

「こうして二人で一緒に居るところ見られたら、どうなる？」

「十中八九、学校で噂される」

「……でしょうね。まあ、私はそんなこと端から気にしてないから別に良いけどね」

ポテトを摘みながら、香我美は平然とそう言った。

「そう言えば、香我美ってどこに住んでるんだ？」

「学校の近くのマンションで一人暮らしよ」

「そっか。……奇遇だな。俺も一人暮らしだ」

お互いに淡々と食事を進めながら、時折会話を交わす。ただ、視線は外の景色へと注がれていた。

眼下で、沢山の人が通りを往来している。こうして上から眺めていると、通行人一人一人の表情や仕草によって、色々な人間像が見えてきて、成る程面白いなあと思う。そうして商店街の景色に見入っていると、ふと横を見れば、いつの間にか、香我美が俺の顔をじっと見つめていた。

「……あのさ、加賀君」

その声には真剣さが込められていた。俺は黙って香我美の方に身体ごと向き直ると、正面に彼女を見据えた。

「加賀君の両親って、何の仕事してるの？」

聞いている内容はありきたりだが、その声音は異常なまでに真剣な色を帯びている。その真剣さが何を意味するのかはわからない。しかし、ありのままの事実を述べることで俺はそれに精一杯答えようと思った。

「俺の両親はもう他界してるんだ」

香我美の口から、驚きの声が漏れる。

「……そうなんだ。ごめんね、そうとは知らずに聞いちゃって……」
香我美は抑揚のない声で謝った。そして、俯いて、焦点の定まらない目を地面へと向けた。

「香我美……？」

……何故、そんな驚愕の表情を浮かべているのか。

「どうした……？」

と俺が香我美の肩に手を置いてその顔を覗きこむと、香我美はぼそりと呟いた。

「私もね、親を亡くしてるのよ」

香我美の目には、薄っすらと涙が滲んでいた。

「ごめん……」

香我美はそう言っただけ俺の手を肩から解くと、目を閉じて肩を大きく上下させて、ゆっくりと深呼吸をした。しばらくの間、香我美は目を閉じたまま、何かを考えているように黙っていた。そして、目を開いて顔を上げると、ゆっくりと俺を見据えた。香我美は落ち着いた表情を取り戻していた。

「大丈夫か、お前」

「大丈夫よ……。両親について考えたら、少し悲しいこと思い出しちゃってね」

今まで一度も見なかったことのない香我美の表情に、戸惑いを覚える。

「……俺もだよ、香我美。両親についてはひどい思い出しか残っていないんだ」

俺は、自嘲気味にそう言っただけ目を伏せる。

「……あなたも、そうなのね」

「幼い頃両親を失った人は、大体つらい思い出を抱えてるよ。俺の場合は、悪夢としてそれが現れることがある。……今となってはもう、それにも慣れたけどな」

俺は遠い目で窓の外を見た。

「両親を失って、悲しかった？」

「……悲しかったさ」

両親が死んだ時の悲しみが再び胸に蘇り、俺は顔を手で覆って嘆息した。

「失ってから大切なものに気づくのは、云わば人間の理なのかもしれないな。何もかもが終わってから、初めて人間は気がつくものなんだよ」

俺の口から、訳もなくそんな言葉が零れ出た。

「あなたは、彼らを愛してなかったの？」

「……愛してたさ。ただ、それに気づいたのが、彼らが死んだ後だったってことだよ。幼い頃の俺にとって、両親はそれはもう、憎らしくて恐ろしい存在だったさ。日々、俺は怯えて生きていたよ。事実、俺の両親は、とてもじゃないが、真つ当な人間とは言い難かった」

香我美は、じつと真剣な表情で俺の話に耳を傾けている。

「幼い俺から見ても、彼らが異常であることは明らかだったよ。そんな異常な両親に酷い目に合わされる度、俺は彼らを哀れに思うことで、現実から必死に逃れようとした。そう考えなければ、とてもじゃないが、俺は生きていけなかった」

「虐待……を、受けてたの？」

と香我美が、恐る恐る口を開く。

「そうだ、あれは虐待としか言いようがない。……だけどな、困ったことに、当の本人達は、虐待をしてることにさえ気づいてないんだから。困ったものさ、全く」

「それは、どういうこと？」

香我美の声が、震えている。普通、常人がこんな話を聞いて、良い想像なんてできはしない。香我美の震えが、悪夢のような現実への怯えであることは見て取れた。

俺は額に手を当てて、喋りすぎたかと呟いた。

「俺の両親の話なんか聞いても、何の為にも成らないぞ。無理に、

悩みの種を増やす必要はない」

「私は平気よ。……続けて」

「俺には全然平気そうに見えないんだけどな。……お前は、俺のことを自分と重ねているんじゃないか？」

俺の言葉に、香我美は大きく目を見開いた。

「そんなことは……！」

反論しようとする香我美の肩を、押さえる。

「例えそうでなくとも、俺はお前にこんな話をしたくない。俺の両親の話はここまでにしよう。悪いな、中途半端に話を切るようです。……」

俺は香我美から視線を外し、それきり喋らなくなった。すると、突然、香我美が「聞かせて」と小さな震えた声で言った。

「……聞かせて。私は、どんなに残酷な現実でも、ありのままを知りたいの。だから、聞かせて」

香我美は身体を震わせながら、俺の腕を強く握った。握られた腕がきしきしと痛む。

「香我美……」

香我美の手からは、震えが伝わってくる。俺は、大きく溜息を吐いた。

「わかったよ。気分が悪くなって飯を食えなくなっても、俺は知らないからな」

俺がそう言うと、香我美は微笑みを見せて、うん、と頷いた。

俺は両親がどんな人間だったのか、また、その両親から受けたことや、当時の俺の心境を、詳しい内情は話すことができないから、掻い摘んで説明した。香我美はそれでも十分理解したようだった。ただ、話していくうちに、彼女の顔は怒りに歪んでいった。

「両親が死んだのは突然のことだったよ。俺が小学校二年生の時だ。二人は、俺の目の前で息を引き取った」

香我美は拳を強く握りながら、俺の話を陰しい顔で聞いている。「憎い存在が居なくなっただけだから、俺は嬉しいはずだ。嬉しいは

ずなのに……何故か、俺は泣いていたんだ。悲しかった。心にぽかりと空洞ができて、それが悲しかった。大切なものを失ってしまったんだと、そこで初めて気づいたんだ」

「どうして？ そんな狂った人間達のことを、本当に大切だったの？」

「……ああ」

俺は静かに頷いた。

「嘘よ！ 二人は、散々あなたを苦しめてきたんじゃない！」

香我美は怒りで肩を震わせながら、大きな声で怒鳴った。周囲の視線が、俺達に集まる。

俺達はお互いをじっと見つめながら、口を閉じた。しばらく経つと、周囲は何事もなかったように俺達から視線を外した。

「どうしてそう思うのかは、自分でもわからない。俺は、もしかしたら狂っているのかもしれない……血は争えないからな。……けどな、どんなに憎かろうが恐ろしかろうが、俺にとっては彼らも大切な存在だったんだ。唯一の肉親だったから」

「私は、あなたが理解できないわ」

そう言って香我美は俯いた。

「香我美の両親は、普通の、優しい人間だったんだな」

「そうよ。優しくかった……大好きだった」

「じゃあ、亡くなった時は、凄く悲しかっただろ」

「うん。悲しくて悲しくて……」

何かに逃げずに居られなかった、と香我美は言った。

「俺も一緒だ。悲しくて、その感情を何かに注ぎ込まなければ耐え切れなかった」

悲しみを憎しみに変え、復讐を誓うことで、俺はなんとか耐えようとした。

そりゃあ、復讐を誓う、なんて行為は、決して正しいはずがないだろう。だけど、あの時、それに逃げなければ、俺の心は立ち直れないほどに壊れてしまったかもしれないも事実だ。

「私は今になって、あの時の選択が間違っていたことにやっと気づ

いた。だって、父さんと母さんはきつと、私に幸福に生きて欲しいって願ったに違いないもの。その願いを棒に振って、私は今まで何をしてきたんだろう……」

「例え今更でも、気づけた香我美は凄いと思うよ。俺の場合は、気づくのが遅すぎて、もう戻れないところまで来ちゃったから。気づけた香我美が正直羨ましいな」

「……遅くなんてないわよ。望めば、人は変わることができると私は思う」

「だろうな。だけど、人は変わるにはたぶん、勇気と忍耐が必要なんだよ。俺には、酷い仕打ちに耐える忍耐があっても——変わるための勇気がないんだ」

俺はそう言うと、我知らず自嘲に似た笑いを浮かべた。香我美は目を伏せ、そう、と少し寂しそうに呟いた。

沈黙が、俺達の間流れる。少し興奮しながら話した為か、疲れを感じ、俺は椅子にもたれ掛った。

すると、香我美が沈黙を破った。

「……なんだか、スッキリした」

と 香我美は息を吐いて、俺と同じように椅子に寄りかかり、宙を見上げた。

「お前が覇気がなさそうにしてた原因は、これだったんだな」

「うん。加賀君と話したら、随分楽になったわ」

香我美が大きく背伸びをして、俺に微笑んだ。

「俺も香我美と話せて良かったよ。こんなこと、綾華以外に話したのは初めてだと思う」

「話し相手になってくれて、ありがと」

香我美はそう言って、嬉しそうに微笑んだ。その表情が、今まで見たことのないような明るい笑顔だったので、俺は思わず香我美の顔に目が釘付けになった。

「それと、加賀君が、見かけに寄らず優しい人なんだって解って良かったわ。また機会があれば、一緒にご飯食べましょ」

「あ……ああ」

俺はろくな返答もできずに、香我美の顔に見入っていた。それに気づいた香我美が、どうしたのと俺を見返したので、慌てて俺は視線を逸らしたのだった。

それから、すっかり冷めきったハンバーガーをお互いに苦笑しながら食べて、俺達は店を後にした。

腕時計を見ると、七時ジャストだった。

「香我美は、どこか寄り道してくのか？」

「ううん。私は、もう帰るわ。人が多いところは苦手でね、ちょっと疲れちゃった」

「そうか。なら、俺ももう帰ろうかな」

俺達は、なんとなく清々しい気持で元来た道を引き返し始めた。すると、調度その時、携帯電話が鳴った。

携帯を開きメールを見てみると、知らないアドレスが表示された。

「誰からだ……」

メールを開きその内容を見て、俺は眉をひそめた。

「……何してんだ、あいつ」

「どうしたの？」

「綾華が、打ち上げの会場にまだ来てないらしい」

「連絡してみたら？」

「……ああ。そうする」

だが、綾華の携帯に電話をかけてみても繋がらず、俺は舌打ちをした。

「確か、綾華さんは同じクラスの坂山さんと仲良かったはずよ。一緒に居ることは考えられない？」

「そうだな。連絡してみるか」

俺はそう言つて、携帯のアドレス帳を開く。

「って、坂山さんに連絡つくの？」

香我美が目丸くしながら、聞いた。

「……それが、つくんだよ。何故だか知らないが、アドレス帳に彼女のアドレスが登録されてる。大方、綾華が何か企んで、俺に気づかれないように勝手に登録したんだと思うけど」

俺は急いで坂山さんのアドレスにメールを送った。すると、すぐに電話が掛かってきた。知らない番号だ。

「もしもし……？」

俺が反射的に電話を取ると、

「助けて、加賀君……！」

と、甲高い悲鳴が電話の向こうから聞こえてきた。

「坂山さんか……？」

「綾華ちゃんが、絡まれて……！」

その言葉を聞いた瞬間、どくと心臓が大きく跳ね上がった。

「綾華が絡まれてる？……おい、今どこに居る！？」

俺は思わず大声で聞き返した。

「美都瀬商店街の、Bマートの前……！」

「今行く……！」

電話は切らずに、そのまま受話器を耳に押し当てながら、俺はBマート目指して走り出した。

「ちよつと、加賀君！どこに行くの！？」

後ろから香我美の呼ぶ声がするが、そんなことは後回しだ。今は、早く、綾華の元へ……！

人込みを押し退け、一刻も早く綾華の元へ辿り着こうと躍起になって走った。身体は火達磨になったかのように熱い。

頭の中はぐちゃぐちゃになり、上手く思考を繋ぎとめることができない。

冷静になるのも忘れ、俺はただ一心にアスファルトの上を走り続ける。

途中何度も通行人にぶつかるが、俺は構わずに走り続ける。一刻も早く綾華の元へ行くには、目の前の――走り回る子供が、立ち止まる老人が、手を繋ぐ男女が――邪魔だ。俺はそれらの障害を躊躇

なく突き飛ばし、綾華の元へと向かう。

胸に、以前大切なものを失くした時の、あの喪失感が再び蘇る。あんな想いをするのは、嫌だ。今度こそ俺は守り通す。前のように、失うのは絶対に嫌だ。

通りを右に折れると、Bマートが前方遠くに見えた。俺は半ば足をもつれさせながら、走る。膝ががくがくと震えて躓きそうになる。悲鳴を上げる身体を、精神の綱で無理やり引っ張っていく。

Bマートの前まで来ると、俺は倒れるように地面に膝をついた。息を切らせながら、周りを見渡す。先程の大通りとは違い、この狭い通りは通行人がまばらで、ひっそりと静まり返っている。遠くの方で、大通りの賑やかな音が聞こえてくる。

Bマートの前には誰も居ない。ガラス越しに店内を覗くが、客は一人だけで、それも見知らぬ中年の男だ。

助けを求めた坂山さんの姿はなく、綾華の姿も、怪しい人間の姿もない。

そこで、Bマートの横の路地裏に目が留まる。俺はゆっくりと立ち上がると、その路地裏へと近づいていく。緊張が身体を縛る。俺は思わず息を止めて路地裏の奥へと目を凝らす。

路地裏は暗かった。ビルに挟まれた狭い空間に、数人の影が立っている。一番手前の小さな影は、見覚えがある——坂山さんだ。顔を蒼白にして、路地裏の奥を見つめている。恐怖からか、身体が震えている。坂山さんの横に立つ二つの長い影、さらにその奥に立つ四つの長い影は、全く見覚えがない。しかし——。

しかし、路地裏の一番奥、ちょうど行き止まりに当たる部分。そこに一つ、見覚えのある影が蹲っている。

その影に、じつと焦点を当てる。身に纏ったワイシャツは無残にも裂け、ほぼ半裸の姿の少女が蹲っている。

長い髪はくしゃくしゃに乱れ、少女は焦点の合わない目で地面を見つめている。

「あやか——？」

——彼女の変わり果てたその姿を見た瞬間。ぐしゃり、と俺の中の大事な何かが砕け散った。

「何だ、お前」

低い男の声がし、坂山さんの隣の一つの影がこちらに振り向いた。続いて、一斉に五つの影がこちらに振り向く。

「てめえ、何見てんだよ」

「おい。聞いてんのか？」

口々に罵言を吐きながら、影が近づいてくる。近づくにつれ、通りから差し込む光で、男達の姿が浮かび上がる。だが、俺の目は彼らを一瞬捉えただけで、すぐに綾華に釘付けになった。

——綾華。

俺の喉から、掠れた声が出る。

「てめえ——」

襟元を掴まれ、力任せに引き寄せられる。

「お前、あいつの知り合いか？」

男は凄んだ声で、俺を威圧しようとする。

「なんとか言いやがれ！」

——黙れ。

「……今何つった、お前」

男の言葉と共に、首筋がきつく締め付けられる。

「黙れ、と言った」

俺は、襟元を掴んだ男の腕を握り、静かに言った。男の腕から軋りと奇妙な音がして、男の口から短い悲鳴が漏れる。俺は男の腕を握り締めながら、首から引き剥がす。

「黙れと言ったんだ。解らないか？——そうか。なら、俺が教えてやるよ」

「腕を——離せ！」

暴れだす男の腕をさらにきつく握り締めながら、俺は男の目を見つめた。

男の瞳の奥で、微弱な炎がゆらゆらと揺らいでいる。その炎はどす黒い色をしており、男の精神状態を良く物語っている。

快活で素直な性格の持ち主なら、瞳の炎は明るく澄んだ色をしている。

対して、物事に否定的で、不平が絶える事のない者が持つ炎は、どんよりと黒ずんでいる。

男の炎は、禍々しいほど黒ずんでいた。俺は、その黒ずんだ炎に『油』を注ぐ。

どくどくと小気味良い音を立てて、それは注がれる。すると、男の炎は瞬時に大きく燃え上がった。

——これで、準備は完了。後は、この炎に『意思』を投げ入れるだけで良い。

「命令する。——黙れ」

俺がそう呟くと、悲鳴を上げていた男が急にしんと静かになった。

「ほら。お前らも、黙れ」

俺は、他の五人の目を見つめ、同じように命令した。すると、五人の口から言葉が吐き出されることはなくなった。

「——どうだ。黙る、ということがどんなことが、ようやく理解できたか？」

俺は、くくく、とくぐもった笑い声を上げる。

これこそ、加賀家に伝わる呪術の一つ、『蛇眼』。相手の目を睨むことで、強制的に命令に従わせることができる。『蛇眼』で睨まれた者は皆、術者の傀儡となり、どんな命令でも従うようになる。

「なんだ。黙ったと思ったら、今度は暴れだしたか。仕方がないな

——」

俺は、掴みかかってきた男達に、さらなる命令を下すのだった。

第一章 八

六人の男達は皆、地面に倒れて気絶していた。その横で、坂山さんが怯えたように縮こまっている。

俺は彼女の横を通り過ぎて、ゆっくりと路地裏の奥へと歩いていく。

「――綾華」

蹲っている綾華の前で屈み、彼女の顔を覗きこんだ。

「……智也」

綾華が顔を上げる。泣きそうな顔をしていた。

「怪我はないか？」

「――ないよ。だけど、服がびりびりに破かれちゃった」

涙声でそう言って、綾華が自分の服を見下ろす。

「大丈夫だ。俺がすぐに着替えを買ってきてやる」

「うん。そうして……」

綾華は力なく頷いた。俺は綾華の生気の籠っていないその目を見ると、胸が締め付けられた。

「綾華、俺を見る」

綾華は言われるままに、俺を見た。

「――元気を出せ」

綾華の目をじっと見ながら、そう言う。蛇眼は使っていない。だが、蛇眼よりも、もっと力がある言葉だと信じたい。

綾華はじっと俺の目を見つめた後に、頷いた。表情が少しだけ明るくなった気がする。

俺はそれを確認すると、手を引いて綾華を立ち上がらせた。

「早くここから離れよう」

俺は制服の上着を脱ぎ、綾華の背中にそれを掛けながら、言った。綾華がその言葉に頷く。

それから俺は、縮こまっている坂山さんの元へ行き、彼女の腕を

取って立ち上がらせた。

「大丈夫か？」

幸い、彼女には怪我はないようだ。坂山さんは俺の言葉にゆっくりと頷く。

俺達は、路地裏から出ると、狭い通りをしばらくの間走った。商店街の外れまで来ると、やっと足を止めた。

人気のない通りにある、既に店閉まいをしたパン屋の駐車場で、俺達はしばらく息を切らせて無言で立っていた。

だが突然、

「ごめんなさい！」

坂山さんがそう叫び、頭を下げた。

「こんなことになったのは、全部私の所為なの」

頭を下げたまま、ごめんなさい、ともう一度叫ぶ。

「……どういうことだ」

俺は、坂山さんに視線を向けて、無機質な声でそう言う。

「さっきの不良の一人は、前から綾華ちゃんに気があったの。あいっは私が綾華ちゃんと仲良いことを知っていた。だから私に、会わせろ、と迫ってきたの。私、断れなくて——何も言わずに、綾華ちゃんをあそこに連れていったの。そしたら——まさか、こんなことになるなんて」

そう言って坂山さんは、顔を手で覆った。

俺は静かに息を吐いて、顔を覆った彼女の両手を取った。

「それは、本当なのか」

坂山さんは俺に両手を取られ、泣き顔を晒しながら頷いた。

「そうか——」

俺はぽつりと呟く。そして——。

「ふざけるな」

と、彼女の両腕を強く握り締めた。

「ごめんなさいで、許されると思っているのか！」

俺が声を張り上げると、彼女は悲鳴を上げて後ろへ退き、近くに

停めてあつた車へと背中を勢い良く打ち付けた。

「もし、綾華に何かあつたら——俺は、お前を——！」

「やめて！」

綾華の叫びに、俺は声を止め、思わず彼女の腕を離す。

「やめて、智也。坂山さんは、悪くないの」

「どうして、悪くないと言えるんだ？」

俺は依然、目の前の女を睨みつけながら、そう言った。

「坂山さんのお兄さんはね、あの男達の仲間なの。坂山さんは、今まで散々お兄さんに苛められてきた。今回も、きつと脅されて、無理やりその約束をさせられたのよ」

そうでしょう？と綾華が坂山さんに声を掛ける。坂山さんは、黙って頷いた。

俺は二人を交互に見比べた。そして、

「……ごめん、取り乱した」

と手で顔を覆い、息を吐いた。坂山さんに、頭を下げる。

「気が動転してたんだ。考えてみれば、別に坂山さんは悪くないよな。脅迫されていたことは明白だったのに、俺は謝っている君に対して、怒りをぶつけてしまった。本当に、すまない」

俺は頭を深く下げる。

「いいよ、顔を上げて。智也君」

「……痛かっただろう？腕、見せて」

俺は彼女の両腕を取って、その状態を見た。肌が真っ赤になっていた。

改めて、自分が何をしたかを実感する。俺は、よりによって女性に手を上げてしまった。自分はなんて最低な男だと、呆れて声が出ない。

「背中は——」

俺は彼女の肩に手を回し、後ろに向けさせようとするが、坂山さんに黙ってその手を押さえられた。

「平気だから、心配しないで。もうそんなに痛くないから」

「でも——」

俺が言い掛けたとき、綾華が「智也」と遮った。

「女の子の背中を見るつもりなの？」

「だって、怪我をしてたら大変だろうが——」

「智也がそんなことをしたら、ますます大変なことになるじゃないの。いいよ、私がやる」

綾華が立ち上がり、坂山さんに近づいて、背中に回った。俺が呆然とそれを見つめていると、

「ほら。とつとと、着替え買ってきなさい」

と綾華に半睨みされて、俺はああ、と頷くと急いでその場を離れた。

俺は商店街の洋服店で着替えを買うつと、すぐに駐車場に戻ってきた。綾華は着替え終わると、急がないと打ち上げが始まっちゃう、と言い出した。こんなことがあった後なのに、と俺は反対したが、綾華は言っても聞かないので、俺は二人を打ち上げの会場まで送っていくことにした。再び商店街の人込みの中を歩きながら、綾華が口を開く。

「智也は何で、私の元にあんなに早く駆けつけて来れたの？」

「俺も商店街に居たんだよ。飯食って帰ろうとしたら、綾華が来ないうって、クラスの人達からメールが来てさ。——というか、何でお前、俺のアドレスを他の人に勝手に教えてんだよ」

「良いじゃないの、別に。智也の携帯のアドレス帳、あまりにも寂しすぎるじゃない？だから、私がいろんな人に了解を取って、アドレスを登録しといてあげたのよ」

綾華が可笑しそうに笑う。さっきの騒動から早くも立ち直り、今は明るい表情を見せていた。その横で歩く坂山さんは、さっきからあまり口を開いていない。

「坂山さん、大丈夫か？まだ、痛むか？」

「うつん、身体の方はもう平気だから心配しないで」

——ただ、と坂山さんは俯いた。

「兄さん、このことを知ったら怒るだろうな……」

顔を蒼白にさせて、そう呟く。すると、

「大丈夫、私がついてるから」

綾華が、坂山さんの手を取った。

「いじめられたら、すぐ私に言いなさい。例えお兄さんであろうが、坂山さんをいじめる奴は、許さないんだから」

「兄さん達はまた綾華さんを狙うかもしれないんだよ？」

「大丈夫よ。その為に、この朴念仁がいるんだから」

綾華はぼんぽんと、傍らにいる俺の肩を叩いて言った。

「随分な言い方だな。俺は体育会系じゃないし、喧嘩は苦手なんだぞ」

「嘘ついちゃって。なら、何でさっきはあんなに強かったのさ」

「あれは……」

別に、俺は喧嘩が強い訳ではない。

俺はあの不良達に蛇眼を使って口を封じた後、さらに動きを封じて抵抗できなくさせた。激昂していた俺は、奴らを力の限り殴りまくり、全員を気絶させた。綾華はそれを見て、俺が奴らを素手で倒したのだと勘違いしたのだろう。

勿論、奴らが気絶する寸前に、蛇眼を使って一人一人の記憶を消失させることも忘れていない。奴らには騒動の記憶がないのだから、目を覚ました後に復讐に燃えて、俺達を狙うのも当然ない。

俺は、自分の赤く腫れた手の甲を擦りながら、

「とにかく、今度変な奴に絡まれたら、すぐに逃げるんだぞ。歯向かったりするからこんなことになるんだ」

「仕方ないじゃないの。あのアホ達が、坂山さんをいじめるところを見たら、居ても立ってもいられなくなつて——」

「だからって、告白してきた男を逆上させる必要はあるのか？その結果、あの男達に暴行されそうになつたんだぞ——綾華は浅慮すぎ

る。その男がお前に気があったのなら、慎重に言葉を選んで断つてれば、手荒に扱われることはなかっただろうに。隙を見て、坂山さんを連れて逃げればよかったんだ」

「もう終わったことなんだから、言っても仕方ないでしょう。皆無事だったんだから、別に良いじゃないの」

「良くない」

俺は、首を振る。

「もし手遅れになっていたら、俺は一体どうすれば……」

本音を言つと、俺は今この瞬間だって心配でどうしようもないのだ。手遅れになった時のことを考えると、ぞつとする。

俺が深く嘆息すると、綾華がごめん、と言った。

「心配させちゃって、ごめん。今度からは、智也の言う通り、すぐに逃げるから」

「そうしてくれ」

俺が綾華に頷くと、

「綾華ちゃんと智也君って、本当の兄弟みたいだね」

と傍らにいた坂山さんが呟いた。

「二人を見てると、心があつたかくなるのよ」

俺と綾華は、きょとんとした表情で、彼女を見る、

「何だか、羨ましいな」

と坂山さんは寂しそうに目を伏せた。おそらく、自分の兄のことを考えているのだろう——俺達は何も言えず、そんな彼女をじっと見ているだけだった。

その時、前方に香我美の姿が見えた。こちらに近づいてくる。俺は、自分が今まで香我美を放っていたことに、ようやく気づいた。

香我美は不機嫌そうだった。それはそうだろう。綾華に何かトラブルが起きたことを知っているはずだから、今までこの商店街を必死に探し回っていたに違いない。

「香我美……」

少したじろきながら、俺は声を上げる。

「香我美さん？」

綾華もきよとした表情で前の彼女を見つめる。

香我美が「加賀君」と、俺を手招きする。俺は小走りで彼女に近寄った。

「綾華さんは、大丈夫だったの？」

香我美は俺の頭越しに、綾華を見る。

「…… なんとか。ごめんな、随分探しただろ」

「当たり前でしょう。それ以外のことで、大変だったんだから。」

加賀君、綾華さんの元に向かった時、往来に居た子供や、お年寄りに躊躇なくぶつかって走って行ったから」

「何だつて——？」

「やっぱり気がついてなかったんだ。子供は足を擦り剥いて泣き喚くわ、お爺さんは腰を強く打って立てなくなるわで、大変だったんだから」

声こそ小さかったものの、表情からして、香我美はかなり怒っているらしかった。怖いほどに冷静な顔、見る者を怯ませる厳しい目—— 香我美の怒った顔は、冗談抜きで恐ろしかった。

「綾華の件で頭がいっぱいになっていたから、そんなことをしていると、自分でも気づかなかった。…… 香我美が、俺の代わりにその人達に謝ってくれたんだな。本当に——ごめん」

俺は深く頭を下げた。すると、香我美は慌てて俺の頭を上げさせた。

「何やってるの。別に、頭を下げて欲しいなんて言っていないじゃない。あの時は、緊急事態だったから、仕方なかった。加賀君を責めようとは思っていないわ」

「いや——今日の俺は、どうかしてる。普段なら冷静に判断して対処できるものが、今日は全くと言っていいほどできない……」

俺は唇を引き結び、視線を下げる。

「私も、驚いた。あなたがあんなに取り乱すところ、初めて見たわ」
香我美がそう言った時、綾華がこちらに近づいてきた。

「香我美さん、こんばんわ」

綾華が人懐っこい笑みを香我美に向ける。香我美の顔が赤くなつたのは、気のせいだろうか。

「こんばんわ」

香我美の声音が、俺のときのものと百八十度変わった。まるで清楚なお嬢様であるかのような、優しい口調になる。俺は訝しげに香我美の横顔を見る。

「香我美さんのことは、智也からよく聞いてます。ずっと、話してみたいなあって思ってたんですよ」

綾華が物を言う度に、香我美は人が良さそうに笑いながら、相槌を打つ。

香我美は一見、いつも通り、落ち着いているように見える。しかし、一年の間付き合ってきた俺には解る——香我美は明らかに、拳動不審だ。

「よく、この商店街に来るんですか？」

綾華がそう聞くと、香我美は俺に視線を送る。

「実はな……」

俺は、綾華に香我美がここに居る訳を話した。綾華は話を聞くとやたらと嬉しそうな顔を浮かべる。そして、俺を置いて、三人で楽しそうに話を始めた。商店街を出たところで、香我美はその輪から抜け、

「じゃあ、私はこれで」

香我美は、丁寧にお辞儀をして、挨拶した。綾華と坂山さんは、バイバイと香我美に手を振る。先程からずっと眉をしかめて黙っていた俺は、皮肉っぽい口調で、

「お前、随分と演技がうまいんだな」

と言つてやった。すると、香我美がむっと——一瞬間の間、ほんのわずかに——表情を変えた。香我美は、はぐらかすように「そうかなあ」と笑つと、さようなら、と嫌味なほど優しい声で言葉を残し、歩き去って行った。

香我美の背中が見えなくなった途端、

「良い子じゃない!」

と、綾華に力一杯背中を叩かれる。俺はいてえな、と咳き込みながら、

「どこが『良い子』なんだ」

と、言った。

「私の見込んだとおりの女の子だったわ。おしとやかで優しい、素直な子じゃないの」

「……全く正反对だ。毒舌でいじっぱりの、独特な性格の持ち主じゃないか」

俺が可笑しそうにそう言つと、またも力一杯脛を蹴られる。

「一体どう考えたら、そんなこと言えるの?」

「綾華ちゃんの言う通りだよ。とてもじゃないけどそんな人には見えない」

綾華と坂山さんは、「ねえ」とお互いに顔を見合わせる。俺は嘆息しながら、

「勝手に騙されてる」

と呆れて呟いた。

打ち上げの会場に二人を送り届けると、俺は足早に帰路に着いた。今夜も天宮さんが訪ねてくることになっている。だから、家に帰ったら早々に準備を始めなければならない。

俺は暗い夜道を歩きながら、ぽつぽつと星が見える空を仰ぐ。そして、ぼんやりと思考を巡らした。

——今夜、俺は全てを思い出せる。

両親が死んだ時の記憶を思い出せば、それは犯人を見つける上での重大なヒントとなる。……すべては、今夜に掛かっているのだ。

——しかし。

忘れかけていたつらい記憶を思い出すということは、どれほどの苦痛を伴うのだろうか。苦痛は測り知れず、十分な覚悟を持って望

まなければならぬ。

——本当に、俺は復讐を成し遂げようと思っているのか。

改めて、そう自問する。そして、即座に、その問いに肯定する。

——復讐することに、迷いはない。

俺は、もう決意したのだ。復讐という心の鎖に縛られることなく、平凡な日常を謳歌するために——俺は犯人を見つけ出して抹殺しなければならぬ。¥

第一章 九

夜。午前一時を過ぎた頃。

約束通り、天宮さんが屋敷を訪れた。客間で依頼についての打ち合わせを行った後、一緒に裏口へ向かった。

裏口の窓を月光がすり抜けて、辺り一面に降り注いでいた。ブルーに染まったその空間は、静寂に包まれ、どこか神秘的だった。青い闇の中で、しばらく俺達は無言で佇んだ。

「それでは、始めましょうか」

沈黙を破ったのは、天宮さんだった。俺は、ゆっくりと頷いた。

「では、私から離れてください」

天宮さんは手仕草で、俺に後ろに下がるよう指示する。俺は言われるまま、彼女から離れた。

「始めます」

彼女の凜とした声に、静まり返った空間が一瞬震えた。天宮さんは、ゆっくりと目を閉じ、精神を集中し始めた。

俺も彼女に倣い、目を閉じて、精神を研ぎ澄ませる。心を空にし、意識を闇の中に溶かしていく。

精神を集中させるにつれ、徐々に『俺』が消えていく。意識はまるで深海に浮かぶように、ゆらゆらと漂い始める。

少しでも気を抜けば、自分というものを忘れそうになる。このまま、快楽に身を任せ、自我を消してしまいたい衝動に駆られる——だが、それは駄目だ。俺には、やらなくてはならないことがある。寸前のところで、俺は自我を繋ぎとめる。自由奔走に飛び立とうとするそれを、手綱で拘束し手中から離れさせないようにする。

「もう良いですよ」

天宮さんの声がした。俺は、目を開ける。前方の少し離れたところに、天宮さんの背中がある。天宮さんは目を閉じたまま、俺を手

で招いた。俺は精神を集中させたまま、彼女に近づいた。

すると、天宮さんがくりとこちらに身体を向けた。そして、俺に歩み寄り、俺の顔を両手で掴み、自分の顔へと引き寄せた。顎が柔らかい手の感触で包まれる。俺は抵抗せず、されるがままに、顔を前へと引き寄せられる。

徐々に天宮さんの顔が近づいてくる。彼女は目を閉じている。

顔と顔が触れ合いそうになる。そこで、彼女は目を開いた。そして、自身の額と俺の額をこつんと接触させた。

その瞬間、俺の頭に彼女の思考が入ってきた。

『……聞こえる？ 加賀さん』

『聞こえています』

『過去を視ることに成功しました。これからあなたの脳にこの映像を送るけど……覚悟は良いですか？』

『……はい』

『多少、ノイズが混じっているけど、視ることに問題はないと思います』

その声を合図に、俺の頭の中で突然、過去の情景が広がった。

窓の外は、赤い世界だった。まるで、世界が血で染まったかのようだ。半分に欠けた太陽が、山の向こうで轟々と燃えている。

俺は窓際に立ち尽くし、じっと外を見つめていた。

すると突然、裏口の方から、扉を叩く音が聞こえ、俺はびくりと小さな身体を震わせた。

「誰？」

音を立てないように、ゆっくりと廊下を歩く。裏口に行くと、扉のガラス越しに、人影が見えた。すりガラスの為に、その姿ははっきりとは見えない。

「智也。私だ」

聞き慣れた無機質な声がした。それは、紛れもなく、父さんのものだった。俺は扉に近寄る。そして、鍵を解き、ゆっくりと扉を開く。

父さんと、母さんが立っていた。

俺は、二人の姿を見て、目を見開いた。

「智也」

母さんが、血に濡れた唇を曲げ、薄笑いを浮かべた。いつもと全く変わらない、氷のように冷たい笑顔だ。だが、その姿はいつもと明らかに違っていた。

父さんは、母さんの肩に寄りかかるようにして立っていた。父さんは中へ入ろうと、右足を前へ踏み出した。だが、その足は身体を支えきれず、父さんは母さんを巻き込んで玄関の中へ倒れ込んだ。

父さんは呻き声を上げ、倒れたまま顔を上げて俺を見た。

「智也」

地面を這い、俺へ近づいてくる。腹から滲み出た血が地面の上でじわじわと弧を描いて広がっていく。

「閉めて」

倒れ伏した母さんが父さんの傍らで、声を上げた。

俺はすぐに、言われた通り扉を閉めた。

足元で、二人が苦痛に顔を歪め、呻いている。玄関には大きな血溜りが出来ていた。俺は啞然と立ち尽くしていたが、不意に我に返り、すぐに救急車を呼ぼうと電話へと走る。が、背中から「智也！」と母さんの厳しい声が掛かり、俺は足を止めた。後ろに振り返る。

「私達は、もう助かりません。その行動は無意味です」

母さんは、鋭い眼光で俺を射抜いた。身動きが出来ない。

「智也。こっちへ来い」

父さんが腕を伸ばして、言った。俺は、父さんへと近づいた。すると、腕を強く掴まれる。

「いいか、智也。奴らに復讐しろ！」

父さんは、怒りで顔を歪ませて叫んだ。

「奴らを殺せ。家族もろとも、殺せ！」

腕を握り締められ、痛みが走った。

父さんの目の奥で憎しみの炎が激しく燃えていた。その瞳の炎の強烈な光に、俺の目は焼けてしまいそうになる。

「復讐しろ！」

父さんは、俺の目を食い入るようにじっと睨み、叫んだ。父さんの口から、絶叫と共に血が零れ出て、それが俺の胸に掛かる。

「復讐……しろ」

父さんの目の焦点が俺の顔から外れ、虚空を当てもなく彷徨い始める。

「父さん……」

俺の目から熱いものが込み上げ、次第に視界がぼやけていく。そして、ずっと頬の上を雫が滑り落ちた。

「復讐だ……復讐するんだ」

父さんはそう呟きながら俺の腕から手を離す。何を掴もうとしているのか、その手を宙へと伸ばした。

父さんは、復讐だ、と呟き続ける。俺は何度もそれに頷いた。宙へ伸ばされた父さんの腕は徐々に下がっていき、声も消え入るようになくなっていく。

「智也……復讐だ」

その言葉と共に、父さんの腕が地面へと落ちた。そして、父さんの身体は動かなくなった。

父さんは、目を見開いて前方を直視したまま死んでいた。俺は嗚咽を漏らしながら、その顔を見つめる。

「智也……」

父さんの亡骸の横で、母さんが弱弱しい声を上げる。

俺は、母さんへと振り向く。

「父さんの言ったことは解ったわね？」

母さんのその言葉に、黙って頷く。

「私達を死に至らしめた奴らに、復讐するのよ。いい？」

俺は、もう一度深く頷く。頷いた瞬間、目から溢れた涙が、ぽちやんと音を立てて血溜りに落ちる。

母さんの手が俺の頬にずっと触れる。そして、優しく撫でた。「智也」

母さんは、今まで一度も見せたことのない、穏やかな微笑みを俺に向けた。そして、目を細めたまま、母さんは動かなくなった。母さんの手が頬を滑り落ちた。

「母さん……」

俺はその手を握り、泣き続けた。血の湖に涙が落ちて、絶え間なく波紋が広がる。

こんなにも悲しいのは何故なのか、今やっと気づいた。

……二人は、俺の家族だった。この世界で、俺が唯一家族と呼べる人達だった。

憎くても、大切な存在だった。

二人なんか居なければいいのに、と何度も思った。

だけど、今は、二人が居てくれさえすればいいのに、としか思えない。

……取り戻そうとしても、もう遅い。二人は、もうこの世にはいないのだから。

自分の心は、空っぽだと思っていた。だけど、違った。隠れていだけで、大切なものはちゃんと存在していた。失うまで、隠れているそれを見ようとしなかったんだ。だから、こんなにも悲しい結末になってしまった。もし、もっと早く気づいていたなら、失わずに済んだかもしれないのに。

……今度こそ、本当に、心が空っぽになってしまった。もう、この心には何も残っていない。

……だから、誓わなくちゃ。父さんと母さんを殺した人間に復讐する、と。その誓いは、自分に大切なものがあつたという証だ。その証があれば、二人は一生俺の心の中に残り続けるだろう。

「復讐する——」

俺は泣きながら、何度もそう呟いた——まるで心に刻みつけるように。

——刻め、刻め。消えないように。

……復讐する。俺は、復讐する——。

一体どれくらい泣いていたのだろう、涙が枯れ果てた頃、ふと顔を上げた。すると、扉のガラスに人影が映っていた。

「誰」

俺は震える声を絞り出した。

影は長くて、大きい。男だとすぐにわかる。

……血が逆流し始めた。目の前に立っているこの男は、父さんと母さんを殺した奴なのではないか？

「お前が殺したのか！」

俺は戸を勢い良く開けた。すると、そこに立っていたのは、黒いスーツを着た男だった。髪は肩を覆うくらい長い。その男の目が、俺を捉える。俺は男を、睨みつける。

——俺はすぐに、先手を打った。『蛇眼』を使い、男の身動きを封じようとする。だが、男は、『蛇眼』の効果がある俺の視線を受けながら、何事もないかのように、ふつと笑った。

「その歳で、魔眼が使えるのか。これは驚いた」

男が、口を曲げて可笑しそうに笑う。蛇眼が効かない、と悟った俺は、すぐに男から離れた。

「機転もよく利いている。瞬時に、魔眼が効かないと理解し、他の呪術の準備に入ってたか」

……見抜かれている。

額に汗が滲む。目の前にいる男は、並みの呪術師ではないと直感が告げる。……この呪術でも、敵うかどうか。

俺は、白蛇を懷から出した。蛇が俺の首に絡みつき、目の前の男

を威嚇する。

「その呪術を使われると、少々やつかいなことになりそうだ。今は、大人しくしてもらおう」

男はそう言つて、一步前へ進み出た。

俺は、目の前の男へ構える。

男は不敵な笑いを浮かべて、口を開いた。

「いいか。魔眼というものは、こつやつてやるんだ」

この男は、魔眼が使える——そう気づいた時には遅かった。俺は、男の魔眼に目を奪われ、全身が凍りついたように動かなくなった。

男は俺に嘲笑を向ける。

「魔眼への耐性はいまいちだったようだな」

罵声を浴びせてやりたいのに、口が固まって動かない。

「君には、この二人が死んだという記憶を、忘れてもらう。君の中で、この事件は元からなかったことになる」

この男は、俺の記憶を消そうとしている。それは、何故か。考えるまでもない、証拠を隠滅するためだ。

俺は必死で足掻こうとする。白蛇に男を襲えと命令を送るが、反応がない。首に絡み付いたまま、じつとしている。

「無駄だよ。呪術を使えないようにした」

男は、俺の意図を見透かしたのか、嘲笑を顔に張り付かせたまま、そう言つた。

「君は私と会つたことを忘れるだろう。そして、両親が死んだこと。君は次に目を覚ました時、新たな人生の幕開けを迎えるだろう。良かったな、この二人からようやく解放されて」

男は、足元の二つの死骸を眺めながら、可笑しそうに笑う。

——お前に何が解る。

俺は心の中で、男に憎しみをぶつける。

「……その通り、何も解らないさ」

と、男は俺の心の内がわかったのか、そう言つた。

「お休み。もう二度と会うことはないだろう」

そう言って、男は俺の記憶を忘失させた。
その瞬間、視界が消え、思考が消え——意識が消えた。

第一章 十

全てを思い出した。二人が死ぬ前に残した言葉、俺の前に現れた謎の男――細部まで、全てを思い出した。

事件の記憶が曖昧だった理由も、わかった。あの長身の男に、俺は記憶を消されたのだ。

だが、記憶の全てが消えることはなかった。それが幸いした。

両親が殺されたという記憶と、犯人に復讐しなければならぬという記憶だけは、ちゃんと残っていた。

――それは何故か。

母さんは死ぬ寸前に、最後に俺の頬を撫でていった。あれは、記憶がなくならないようにと、俺の身体に呪術を掛けるためだったのだろう。

母さんの呪術によって、俺は記憶を全て消されるのを免れたのだ。俺は、地面に膝をついた。身体が重い。まるで肩に重石が乗っているようだ。

汗が、額を伝って、床の上に落ちる。

「無事に、成功しましたね」

天宮さんが俺の横に立ち、言った。彼女も、汗まみれになっていた。濡れた髪が、頬に張り付いている。

「どうでした？俺の過去を視た感想は？」

俺は、訳もなくそんなことを聞いた。

「正直言うと、非常に怖い体験でした。今まで色んな人間の死に関わってきたけれど、人があんな風に死んでいくのは初めて見ました」「こんな依頼を持ちかけて、すみませんでした。あなたはこれからしばらくの間、悪夢を見るようになるでしょうね」

「どうか、お気になさらずに。依頼を引き受けたのは、私自身ですから」

天宮さんは、青白い顔色のまま笑った。

「疲れたでしょう。過去を視るといっても、昔の出来事を追体験するのと同じですから、身体にすごく負担が掛かったはずですよ」

そう言った天宮さんに、大丈夫ですよ、と答え、俺は立ち上がろうとした。しかし、足に力が入らず、思わず倒れそうになる。俺は壁に手をついて慌てて身体を支えた。

「休んでください」

天宮さんが、真剣な声でそう言った。

「このくらいの疲れなら、少し経てば治りますよ。支払いのこともありますし、客室で話をしましょう」

俺はそう言つて、重い身体を引きずって廊下を歩こうとするが、天宮さんは俺の前に立ち塞がる。

「私は、あなたの身体のことを言っているではありません」

天宮さんは、俺の頬に触れた。

「気づいてないんですか」

と、天宮さんは指を離れた。

俺は自分の頬に触れた。冷たい感触がした。手の平を見てみると濡れていた。

「あまり無理をなさらないで下さい。自分の感情を抑える必要はないんですよ」

つらいでしょう、と天宮さんが悲しそうな視線を俺に向けた。

彼女の、憂いを含んだその目を見た途端、俺の心の糸が切れた。

五時になると、天宮さんは屋敷を去っていった。

一人になると、何もすることがなくなり、俺は客室で襖を開けてぼんやりと窓の外を見つめていた。

恥ずかしいところを見られてしまったな、と苦笑する。あんなに泣いたのは一体何年ぶりだろう。

空がだんだん明るくなっていく。夜が終わり、朝が到来する。

時間と共に世界は変化していく。それは、人間も同じだ。時間が経てば、人は変わる。人は、昔の自分の殻を脱ぎ捨てて、絶えず変化していく。蛇が生きていくために脱皮を繰り返さなくてはならないのと同じだ。

俺も、変わった。昔の俺は復讐が人生の全てだった。だが、今は違う。自分にとって大切な、他のものを見つけた。

と、インターホンが鳴った。

夏休みになったというのに、相変わらず馬鹿に早起きだ。俺は首を振り、玄関に向かった。

扉を開けると、「おはよう」と綾華が顔を出した。朝にもかかわらず、不思議なほど元気な声だった。俺はその声に、ただ「ああ」と頷いただけだった。

「どうしたの。元気ないね」

「何でもないよ」

俺は、首を振る。綾華は俺の顔をじっと見つめた。

「いいわ。朝は私が作るから、智也はテレビでも見てなさい」

そう言って、綾華は台所に入ってしまった。

おそらく、綾華は俺の泣き腫らした目にも気づいただろう。けど、そのことには触れなかった。俺は、綾華に心の中で感謝した。しばらくすると、玄関の扉が開く音がし、小母さんが居間に入ってきた。三人で食卓につき、たわいのない話をする。

——目の前で、平凡な日常が展開していた。

俺にとって、それは宝物だった。過去に、生き地獄を体験したからこそ、俺はこの平凡な日常が大切だと気づいた。

今すべきことは復讐なんだ、と改めて自分に言い聞かせる。復讐を終わらせない限り、俺は一生闇雲に走り続けるだろう。そして、走り続けるうちに、この平凡な日常をいつか失ってしまうかもしれない。奔走する身体を止まらせるには、すべてを終わらせるしかない。大切なものを失う前に、すべてを終わらせなければならない。幸福な一時を噛み締めながら、俺は何度も強くそう思った。

第一章 残

早朝だけあって、葉月駅の構内は人気がなかった。たまに、ちらほらとサラリーマンを見かけるだけだ。しかし、数時間も経てば、構内は通勤ラッシュで大勢の人で埋め尽くされるだろう。この人気のなさは、嵐の前の静けさと言っている。

通路の壁に、「ようこそ、葉月市へ」と若い綺麗な女性が笑顔で立っているポスターが貼られている。私はそれを漫然と眺めながら、改札口へ向かう。

静まり返った狭い通路に、自分の足音が響き渡る。

おそらく今後、この葉月市を訪れる機会は、依頼の用件以外ではないだろう。勿論、この駅に降りることもない。

少年の顔が、ふと頭に浮かんだ。

——今回の依頼主だった加賀智也は、霊能力者だった。しかも、彼は霊力の強い血筋に生まれた。おそらく彼の家系は、昔から、シヤーマンなどの呪術師をたくさん生み出してきたのだろう。

加賀智也の両親は、ある日、何者かによって殺された。殺人という大きな負を引き寄せたということは、彼の血筋に伝わる呪術は、おそらく負の要素が強いのだろう。負の要素が強いということは、その呪術は人間に害をもたらす可能性が高いということになる。

——つまり、加賀智也は危険人物だ、ということだ。人間に害を及ぼすような凶器を、彼は持っているのだ。

私は、ごくりと唾を飲んだ。背筋を冷たいものがすつと撫でる。

——このまま、見過ごして良いのだろうか。

私は彼に、『過去を視る』という難度の高い依頼を頼まれ、それを成功させた。少年は過去に立ち返り、両親が死ぬ瞬間を再び目の当たりにした。

けれど、それは彼にとって本当に良かったのだろうか。

両親が息絶えるのを見ることが一体何に成ると言うのだろうか。両親

親を殺した者への憎しみが一層膨らむだけではないのか。

そして、その憎しみは、彼に凶器を使わせる原動力と成りはしないだろうか。

「私は、どうすれば……」

目を閉じ、軽く目頭を押さえる。

目を閉じれば、すぐにあの光景が浮かんでくる。少年の言った通り、しばらくの間、夢に見そうだ。と、その時、

「君」

と突然、後ろから声が掛かった。男の声だ。どこか聞き覚えのあるその声に、私は後ろに振り向いた。

そこに立っていたのは、眼鏡を掛けた長身のサラリーマンだった。男は痩せていて、その顔はこつこつしており、無表情だった。しかし、彼の周りを漂う空気が、どこか威厳を感じさせた。

私はすぐに誰か解った。昔と変わっていない容貌に、懐かしさを覚える。

「修兄さん」

「やっぱり菜月か。……八年ぶりか？」

無表情だった顔が、人の良さそうな笑顔へと変わる。目の前にいるのは、間違いようもなく、従兄弟の水西修一郎だった。修兄さんは、一見頑固で気難しそうに見える人だが、実際は穏やかな気性をしている。その点で、昔から人に誤解されがちだった。

「八年も経ったにしては、昔と全然変わっていないわね」

「変わったさ。この頃は、事あるごとに身体の節々が痛くなつて困つてる」

修兄さんは、苦笑を浮かべた。

「今から仕事？……まだ朝の五時半よ。随分早いよね」

「会社が遠いものでね。菜月も、仕事か？」

「もう終わつて、帰るところよ」

「大変だな、霊能者の仕事は」

「確かに大変だけど、私は今の仕事に満足してる。当分の間は、や

っていけそうだわ」

「そうか。それは良かった」

兄さんは、安心したように息を吐いた。私は心がほんわかと暖かくなるのを感じた。昔から、兄さんは従姉妹の私のことを何かと心配してくれた。それが今も続いていると思うと、安心感と嬉しさに胸が一杯になる。

「仕事、頑張れよ。つらくなったら、いつでも家に遊びに来ると良い」

「そうねえ……大きくなった綾華ちゃんを見たいのは山々だけど、今のところ仕事が忙しくて行けそうにないわ。暇が取れたら伺うかもしれないから、修兄さん、その時はよろしくね」

「わかった。……身体に気をつけてな」

修兄さんは、また会おう、と手を振りながら、他の通路へと去っていった。

私は、兄さんが去った後、密かに溜息を吐いた。

妙な偶然があるものだ、と改めて思う。よりによって、兄さんの自宅のすぐ隣で依頼を行うことになるとは。あながち偶然とも思えなかった。何か、匂うような気がする。

霊力の強い加賀家の隣に、“あの”兄さんが住んでいる、という事実が、さらに問題を複雑かつ深刻にしているような気がする。

私は、胸に漠然とした不安を感じながら、葉月市を後にしたのだった。

第二章 一

水酉家の大掃除を手伝うことになった。

今日は休日でおじさんは仕事がなく、溜まった疲れもあって自室から出てこない。

とりあえず、三人で掃除を始めることになった。

俺と綾華は、おばさんに二階を任せられ、掃除用具を持って向かう。幅の広い階段を上り切ると、一直線上に伸びた廊下に着く。

俺が廊下と物置部屋、綾華が自室と客室を担当することになった。

「さっさと終わらせるぞ」

そう言っ、眠気を払うように、頬を叩く。すると、

「また寝不足？ 隈ができてる」

と、綾華が俺の顔をじつと見て言う。

「この頃、毎日夜更かししてるのね。何してるの？」

怪訝そうに見つめてくる綾華に対し、俺は、

「別にいいだろ」

と、昨日の朝と同様、はぐらかし、「それより」とつぶやく。

「昨日はちゃんと眠れたか？」

俺が訊くと、綾華の表情が翳った。

眠れなかったんだな、とすぐに理解した。

今朝、綾華は、心配をかけたくないのか、おばさんに昨夜のことを一切話さずに、明るくふるまっていた。

……綾華は確かに強い心を持っている。

だが、それは歳相応のものでしかない。

心の中では、まだ傷跡が痛んでいるに違いない。

今まで、あんな経験は一度もしたことがなかったはずだ。見ず知らずの男達に乱暴されそうになる、なんてことは。

「——くそ」

再び湧き上がる怒りに、拳を震わせる。

俺のそんな心が解ったのか、綾華は、
「心配しないで。もう気にしてないから」と、微笑んでみせる。

弱弱しい姿を見せまいとしたのだろう。けれど、その笑顔はあまりにも歪んでいた。

「無理するな」

俺は、綾華の腕をそつと掴んで言う。

「おばさん達に相談できなければ、俺に言ってくれ」

「……心強いよ」

綾華は腕を掴む俺の手に、手を重ね、安心したように表情を和らげた。

俺は微笑み、頷いてみせる。

「それじゃあ、始めるか」

腕をまくり、さつそく掃除に取りかかった。

自室のドアを閉めると、私は背中をドアにつけて寄りかかった。
視線を天井に向け、大きく息を吸う。

……智也が居てくれて、良かった。

本当に、そう思う。

一人なら耐えられないけれど、智也がいるなら立ち直れる。

昨日、あの出来事の後、私は智也を説得して、打ち上げの会場に向かった。

けれど、打ち上げの最中に気分が悪くなり、坂山さんに付き添ってもらって帰宅した。

幸い、家には誰も帰ってきていなかったから、ベッドにそのままもぐり込み、大声で泣きながら眠りについた。

朝になっても、落ち着かないまま、食欲はなく、食べ物を口にするだけでも吐き気がした。

気にしないように。そう自分に言い聞かせた。

しかし、平静を取り繕うだけでも精一杯だった。

——けれど。

智也といると、不思議と心が落ち着いていった。

しつこく私を取り巻いていた恐怖が、嘘のように引いていったのだ。

……思ってみれば、智也といるときは、いつも素直でいられる。

八歳の時から、九年間、付き合ってきたけど、どんな友達よりも親しく接してきたと思う。

「——智也」

人知れず微笑みながら、そっとドアから離れた。

そして、本棚に近づき、「確か、この辺に」と、その奥に手を伸ばす。

「あつた……」

それを取り出し、床の上に広げた。アルバムだった。

そのアルバムには、小学生の頃の懐かしい写真が、学年順に貼られていた。

一年生までは、私が一人で写っている写真しかない。けれど、二年生になると、私の隣に、智也が並ぶようになった。

出会った頃の写真だろうか、私が智也の手を引いて歩いている写真がある。

智也は戸惑いながらも、無邪気に前を歩く私の後に続いている。

いつに撮った写真かな。

この中の私達は、どうやらこの家の一階の廊下を歩いているみたいだけど、何故こんな写真があるのだろうか。

「もしかして、この写真——」

出会つてすぐに、智也をこの家に招待したことがあつた。その時に撮ったのかもしれない。

「そっか。あの時の……」

アルバムから写真を取り出すと、顔に近づけてまじまじと見た。

写真を見つめていると、その時の記憶が蘇ってくる。

あの時私は、無口で笑わない智也を、無理やり引っ張ってこの部屋に連れてきた。

その様子を、お父さんかお母さんのどちらかが撮ったのだろう。

私は智也を部屋に連れてくると、おもちゃを取って床に並べ、智也そっちのけで一人で遊び出した。

智也は最初、私の正面に腰を下ろしたまま、無言で私が遊ぶ様を見つめていた。

しばらく経って、そんな智也に気づいた私は、「あなたも遊びなさいよ」と、お姉さん気取りで、おもちゃ箱から適当に熊の人形を選んで押しつけた。

智也は無言でそれを両手に抱えると、じっと熊の目を見据え、睨みあいを始めた。

私はそれを見て納得したように大きく頷くと、再び遊びに熱中した。

そんな中、私はふと、数ある中から一つのパズルを取り出した。

それは、お父さんに買って貰ったもので、それで遊んだことはまだなかった。

私はそれをやり始めたが、しばらく経っても、ほんの一部分しかピースは埋まらなかった。

唸りながら、どうにか完成させようと、いろんな形のピースを何度も手に取ってみたが、駄目だった。

しまいには、いらだたしげにパズルの枠を蹴飛ばした。

すると、それを傍で見ていた智也が、突然私の横に座り、「少しやらせて」とピースを手を取った。

そして、黙々とやり始め、あっという間に完成させた。

私は愚図るのもやめ、啞然として見守っていたが、完成すると、「すごい、智也君」と目を丸くして言った。

すると、そこで智也は初めて、にこりと、はにかんだように笑った。

当時、私は、自分ができない事をすんなりとやってのけてしまう
智也を、年上の友達のように思ったものだ。

「智也って、なんでもできるんだね」

智也が同じ年とは思えないような知能ぶりを発揮する度に、私は
口癖のようにそう言った。

そして、そんな智也が友達であることが、自慢だった。

——けれど。

中学生になって、智也が何か深い問題を抱えていることに気づい
た。

智也の心の奥深くにあるものを見ようとせず、智也への憧れだけ
を膨らませてきたそれまでの自分を、情けなく思った。

智也が時折見せる、空虚な、ぞっとするほど冷たい表情。それが、
頭の隅にいつも引つ掛かっていた。

どうして悩みを言わないの。

いつもそう思った。

——しかし。

私は矛盾していた。

他ならぬ私自身も、自分の問題を智也に打ち明けていなかった。
お父さんとお母さんに相談しても、不安はなくならなかった。

自分でも、どうしたら良いのかわからない。

きつと智也なら、この問題を真剣に考えてくれて、私にとって最
高の助言者になってくれると思う。

けれど、私は打ち明ける勇気がない。今まで散々迷ってきたが、
何もできないままにいる。

「……言ったら、智也は離れていくのかな」

そもそも私の話を信じてくれるかも、怪しい。

——だけど。

昨日、智也が私を救ってくれた時、私は決心したはずだ。

智也が、私にとって大切な、無二の親友だからこそ、打ち明けて

みようと思う。

例え、智也が私から離れていったとしても、それは智也の意思なのだから……。

私は、いつの間にか止めていた、ページを掴んだ指を、再び動かして、アルバムをめくり始め、智也との思い出に耽ろうとした。

しかし、頭の中は、打ち明けることへの不安でいっぱい、ページをめくる手はすぐに動きを止めた。

……智也がもし、私の前から居なくなったら、私は――。

想像するだけで、頭が真っ白になり、恐怖で身体が凍りつく。

「やっぱり……嫌だよ」

どうしても、智也と一緒にいたい。

俺は最初からペースを上げ、一時間程で物置部屋の掃除を終えた。一方、綾華は、未だに自室から出て来ない。明らかに、おかしい……何、サボってんだか。

呆れながら、綾華、とドアをノックした。

すると、「何？」とかすかに声が返ってきた。

入るぞ、とドアを開ける。

綾華の、至ってシンプルなデザインの部屋が、目に飛び込んでくる。

部屋の隅に、勉強机や本棚などが置かれていて、ベッドは窓際に配置されている。

いずれの家具も、特に女の子らしい飾りつけはされていない。

中央には、板張りの床にカーペットが敷かれている。

綾華はそこに腰を下ろし、アルバムを広げていた。床の上に、何冊か積み上げられている。

綾華の肩に手を置いて、横からアルバムを覗き込む。

そして、ふと一つの写真に目が留まった。

小学校の運動会に撮ったものだろうか。体操着姿の俺と綾華が並んで写っている。

綾華は子供らしい無邪気な笑みでカメラを見つめているが、隣に並んでいる俺は子供らしからぬ冷めた表情で、綾華に腕を取られながらカメラに視線を向けている。

呆れながら、「これ、俺か？」と写真の中の自分に見入った。

「当たり前じゃない。智也以外に誰がいるって言うのよ」

「まるで無表情。俺はこんな可愛げのない小学生だったんだな」

俺が言つと、綾華は首を傾げる。

「別に無表情じゃないでしょう。良く見てみなさい」

綾華からアルバムを受け取って、その写真をじつと見る。

「……やっぱり無表情にしか見えない」

アルバムを綾華に返して首を振ると、綾華はそうかなあ、と写真をじつと見る。

「私は微笑んでいるように見えるんだけどな」

その時、ちょうどおばさんが、部屋に入ってきて、

「随分懐かしいもの見てるじゃない」

と、俺と綾華の頭の間から首を出し、アルバムを興味深げに覗き込んだ。

「これ、運動会の時の写真？ 二人とも、可愛いわね」

「お母さん、この写真の智也、笑ってるよね？」

綾華が後ろにいるおばさんを見やって訊く。

おばさんは、頬に手を当てて、そうねえ、と写真を見つめ、

「笑ってるわね」

と、意味ありげに言った。

「だよね」

綾華は、嬉しそうに頷きながら写真に見入った。

「どう見ても生意気なガキにしか見えない。どこが、笑ってるんだよ」

「笑ってるわよ、智ちゃん。第一、綾華がそう言ってるんだから、

間違いないでしょう。無表情なのは確かだけど、心の中ではちゃんと笑ってるのが私にはわかるわ」

俺は「意味がわからない」と首を振って、立ち上がる。

「綾華、サボってないでさっさと掃除しろ。昼までに終わらないだろ」

「もう、わかってるよ。今、始めるってば」

綾華はアルバムに目を落としたまま、そう言った。

部屋を出た。ドアを後ろ手で閉めるとき、背後から、「もしかして、照れちゃったのかしら」とお婆さんのからかうような声が聞こえたが、気にしないことにした。

一通り終わる頃には、とっくに昼は過ぎていた。

ようやく自室から出てきたおじさんを加えて、四人で遅い昼食を摂った。

昼食の後、綾華は自室に戻っていった。

お婆さんは洗い物をしていて、リビングには、俺とお婆さんの二人だけが残り、食後のコーヒーを飲んでいた。

電気を点けていないため、部屋はどこか薄暗い。

しかし、窓から眩しい夏の陽光が差し込んできて、それがカーテンの間を突き抜け、照明の代わりに、辺りを照らし出していた。

俺はソファアーに、おじさんは昼食の時のままテーブルについて、ゴルフ番組を漫然と見ている。

お互いに無言で過ごしていたが、おじさんがふと、「智也」と口を開いた。

「何、おじさん」

そう返すと、おじさんは俺の顔を見ながら、コーヒーを一口飲み、静かにカップをテーブルに置いた。

「綾華から、聞いたか？」

おじさんは、突然そう訊く。

俺は何の事が解らずに、無言で見返す。

「聞かされてないのか。……すまない。今のは忘れてくれ」

おじさんは前に向き直り、視線をテレビに戻した。

気になったが、俺は何も言わなかった。

再びリビングには、テレビのリポーターの声だけが響くようになった。

無言でテレビを見据えるおじさんの横顔を見ながら、おじさんについて考える。

普段、おじさんはあまり表情を変えないため、堅物な印象を受けるが、その人柄は思いやりがあつて優しい。

俺も、出会った当初は、快活なおばさんと比較し、怖い人だな、と敬遠していた。

ただでさえ、人見知りだった俺が、距離を置こうとしたのだ。

だが、おじさんは、俺のその失礼な態度を寛容に受け止め、気さくに接してきてくれたのだった。

そんな穏やかさを持ったおじさんだが、眼鏡の奥の瞳には、何か強い意志が感じられた。

それは、長年付き合ってきた俺の直感だった。

寡黙なおじさんが、心の内では何を考えているのか——それが、気になっていた。

おじさんの過去を聞かされたことは、数えるほどしかない。

昔、今とは種類の違う仕事に就いていた、ということだけは聞いている。

だが、そのことを訊かれると、おじさんは嫌悪の表情さえ見せていた。

よっぽど性に合わない、つまらない仕事だったのかと思って、おじさんにもこっそり訊いてみたが、笑ってはぐらかされた。

「おじさんは、なんで今の仕事に就こうと思ったんだ？」

気づいてみれば、おじさんの横顔に、その言葉を投げかけていた。

おじさんは振り向く。不快の表情は浮かべていない。

おじさんは、「そうだな」と少し考える素振りを見せてから、口を開いた。

「……言ってしまった、成り行きだな。職を変える必然性が出てきて、素直にそれを受け入れた。そんなところだ」

「それは……家族の為？」

つぶやくようにそう訊くと、おじさんが俺の顔を直視する。

「……ああ、和子や綾華の為だ」

「そう……なんだ」

おじさんは意味ありげに俺をじっと見つめた後、視線を外した。台所から、蛇口から吹き出る水の音が聞こえる。

その音に混じって、鼻歌が聞こえてくる。おじさんの好きな、クラシックの曲。

後ろに振り向き、台所で洗い物をしているおばさんの背中を見つめる。

おばさんは今でこそ明るいが、昔、鬱病にかかっていたらしい。

おじさんが以前の仕事を断念したのにも関係していると思う。

俺と出会う頃に、精神状態が徐々に安定していったらしく、俺と交流を始めると、すっかり元気な状態へと戻ったらしい。

俺が出会った頃は、まだ二十代後半の、子供らしさが残る人で——今でも残っている気がするが——明るくて一緒にいるだけで楽しい人だった。

おばさん達は、俺が小学二年生の時に北海道から引っ越してきて、俺と家族のように一緒に過ごすようになったが——中学生になった頃だろうか。おばさんが珍しく真面目な顔で、俺に、話があると言ってきた。

俺は、一体何の話だろう、と胸をドキドキさせておばさんの口が開くのを待った。

——私達の、本当の子供になってみない？

おばさんは、そう言った。

俺は、思いも寄らない言葉に驚き、啞然とした。

おばさんとおじさんの養子になる——それは、俺にとって何を意味するのか。

水酉家の本当の一員になることは、俺が今までずっと求めて止まないことだった。

この誘いに頷けば、それで俺は本当の家族になることができる。この幸せな日々を、確かにすることができ——。

しかし、それは、俺が正式に加賀家の者ではなくなるということだ。

……俺には、大切な家族がいた。それを、絶対に忘れてはならない。俺の両親は、死んだ二人だけだ。

俺は「ごめん、おばさん」と、静かに首を振った。すると、
「良いのよ、別に。気にしないで」

おばさんは笑ってみせた。しかし、その目は悲しそうで、俺はまともに顔を見ていられず、堪らなくなつてその場から駆け去つたのだつた。

思い出すと、胸が締め付けられる。

おじさんとおばさんは、俺をまるで自分の子供のように、想つてくれている。二人は俺の育ての親とも言つていい。

そんな二人の、期待を込めた誘いを、俺は。
と、突然、リビングが明るくなった。

見れば、廊下から入ってきた綾華が、壁のスイッチを押していた。綾華は無言でソファーに近付いてきて、隣に座った。

そして、俺へ身体を向けてじっと見る。真剣な表情をしている。
「……何だよ」

戸惑いながら声を上げると、
「智也、話があるの」

普段の綾華では考えられない、低い、真剣さを帯びた声だった。
「ごくり、と唾を飲む」

一瞬、おばさんが以前見せた真剣な表情と、眼前の綾華の表情が、重なった。

二階へ向かい、綾華の自室に入ると、後ろに続く綾華が静かにドアを閉め、俺に向き直った。

「何だよ。話って」

鼓動が速くなる。

「座って」

綾華が、隅にある机の下、椅子を指差す。

その言葉に従い、椅子を引き出して、それを反対の向きに座った。椅子の背の上で組んだ両腕に顎を乗せて、綾華を見る。そして、
「話してみる」

優しい口調でそう言った。

綾華は、ベッドに腰を下ろした。視線を下に向け、

「智也にね、黙っていたことがあるの」

と、言う。いつもの明るさは、微塵もない。

「何だ？ 気にしないから、言ってみろ」

「私は……」

口を開きかけたが、綾華はすぐに首を振った。そして、「やっぱり、駄目」と小さくつぶやき、そのまま黙る。

「どうした？ 綾華……」

心配になって、立ち上がろうとすると、

「私の実家が北海道にあるの、知ってるよね」

綾華は、静かにそう訊いた。

「知ってる。それがどうした？」

「私の親戚にはね、神主さんとか、巫女さんとか……そういう人達がたくさんいるの」

「そう……なんだ。初耳だな」

驚きはなかった。綾華の霊感が強いことは、長い付き合いで、十分に理解していたから。

例えば、幼い頃、二人で俺の屋敷の裏口を見たことがあったが、

綾華はそこで強い残留思念を無意識に感じ取ったのか、そこには全く近づかなくなった。

それに、小三の時に旅行に行つて、過去に大勢の死人が出た史跡を訪れた時。慰霊碑の側で、人の声が聞こえる、と突然騒ぎ出した。慰霊碑から離れさせると、突然ぴたりと騒ぐのをやめた。

そういつた出来事から、霊感が強いのは、明白だった。親戚の多くが神職者というのも、うなずける。

しかし、そうになると、おじさんの以前の仕事は、そういった類のものだったのかもしれない。

「夏休み中に、北海道の実家に帰る予定なの」

「いつ頃なんだ？」

「それが、来週。言うの遅れちゃった」

「……そうか。せっかく北海道まで行くんだから、楽しんで来いよ」
そう言つと、綾華はベッドから突然立ち上がる。

「一緒に来て欲しいの」

綾華は、必死に懇願するように、見つめてくる。その強い視線を受け止めて、静かに口を開いた。

「……わかった。一緒に行こう。だけど、なんで今になつて？」

「実家から呼ばれたのよ。親戚で話し合いがあるの。それに参加しなくちゃいけないって」

「……勿論、おばさんやおじさんも行くんだろ？」

「ううん。二人は行かないわ」

「だって、おばさんの実家なんだろ。おばさんだけでも行くはずだ」

俺の指摘に、綾華は黙って再び腰を下ろし、視線を下げて、「実は」と、話し始める。

「ここに引っ越してくる前、お母さんは実家との関係が悪くなって、縁を切つたのよ。それで、ね」

「それも、初耳だな……」

「智也には話さないようにって、今まで二人に——特にお母さんに、言われてきたの」

「おばさんに？」

綾華は、気遣うように俺を見ながら、うん、とうなずいた。

……何故話してくれなかった。俺は、二人にとって、信頼の置ける存在ではなかったということか。

——いや、違う。

二人は複雑な事情を抱えていたんだ。だから、俺に話さなかったんだ。それは、当然、仕方のないことだ。仕方のないこと。

自分に言い聞かせるように、そう考えた。

「心配させたくなかったんだと思うよ」

綾華は立ち上がった近づき、背もたれに乗った俺の両腕に、片手を優しく置いて、そう言った。

「お母さん、ああ見えて、繊細だから。きっと気を遣ったのよ」
そうだな、とうなずく。

「そんな暗くならないでよ」

俺の両腕に乗せた手を、ぽんぽんと叩き、綾華は苦笑する。

「元から根暗なんだ」

悪いか？ と、俺は顔を上げて綾華に笑いを向け、

「じゃあ、今年の旅行は、北海道ってことになるのか。……だけど、水泳部の方はどうするんだよ。平気なのか」

「大丈夫。部員には、早めに言っておいたから。それに、大会は、帰ってきた後だしね」

綾華は、楽しそうにそう語る。

その顔からは、いつの間に、深刻そうな表情は消えていた。

「話って、このことか。てっきり、もっと複雑かと思った。昨日のこと、あるから」

そう言つと、綾華の表情が一瞬曇ったのがわかる。だが、すぐに元の明るい表情へと戻り、

「本当は、もっと大事な話があったんだけど、それはまた今度で。それより、予定を考えたんだけど——」

綾華はすぐに話題を変え、立ち上がると、本棚から観光ガイドを

持ってきて、開いて見せた。

気になったが、何も言わなかった。綾華が楽しそうに話すことに、ただ集中した。

第二章 二

夜になるまで、ずっとこの家で過ごした。そして、久しぶりに四人で夕食を共にした。

昼食の時と同様、リビング中央のテーブルを囲む。テーブルには、豪勢な料理が埋め尽くされている。

食卓は、賑やかだった。おじさんまでもが、笑い声を上げて、話に熱中した。例の旅行の話で持ちきりだった。

「あの屋敷、ホントに広くて。一日一回は必ず迷うの」

おばさんは、デザートのパフェをつつきつつ、そう言った。すると、おじさんが、

「長く暮らせば、家の構図ぐらい覚える。迷うのは単純に、和子が方向音痴で、物忘れが激しいから。……違うか？」

おばさんは、なによ、意地悪ね、と頬を膨らませた。

「冗談だ。そう怒るな。……綾華も、小学生になるまで、あの屋敷で暮らしていたんだ。覚えてるだろう？」

おじさんの言葉に、綾華はうなずき、

「……お母さんと違ってね。隅々まで覚えてるわ」

と、笑いながら、おばさんにわざと視線を送った。すると、おばさんは、パフェをスプーンでかき回して一層不貞腐れる。

「さすが、綾華。よく似ている」

おじさんは、眼鏡の奥で、嬉しそうに目を細めた。

おばさんが、「自分に、でしょ？ また始まったわ」と小声でつぶやき、嘆息する。

俺は会話に参加せず、黙々と食事を進めていたが、三人の会話が途切れたので、さりげなく口を開いた。

「綾華から聞いたんだけど、おばさんの親戚って、神職に就いてる人が多いの？」

おばさんが、持っていたスプーンを止め、表情を瞬時に固くする。
「……そうよ。神主とか、占い師とか。『そっち系』ばかりね。あ
あいった仕事には私、本当に向いていなくてね。素質はあったけど、
興味は全くなかった。だから、最終的に、私は家と縁を切ることに
したの」

「それで、関東に？」

「そういうことよ。……あの頃を思い出すと、今がどれだけ有り難
いか、身に沁みるわ」

そう言つて、「やだやだ」と、スプーンでパフェのグラスを叩い
た。続いて、おじさんが、

「……智也。そういう事情で、私達は行かない。お前はしっかりし
ているから、問題はないと思うが……綾華を頼むぞ」

どこか真剣な声に、俺は、わかつてる、とうなずく。

「だけど、俺なんかが行っても平気なのか？ 大事な親族会議なん
だろ？ いっそ、ついて行かないほうが……」

すると、綾華が突然、箸を、音を鳴らして強く置いた。そして、
怒った表情を浮かべて、

「智也がついていってくれないなら、私は行かないよ。……絶対に
！」

と、声を荒げた。俺は、

「何をそんなに怒ってるんだよ。今のは、ちょっと試みてみただけ
で、旅行にはちゃんと一緒に行くから」

そう言つと、綾華は、そう、と固い表情のままうなずき、

「なら、良いんだけど」

と、つぶやく。

綾華の左手が激しく震え、手元にある食器に当たってカタカタと
音を立てていた。

視線を上げると、綾華の、怯えた白い顔がそこにあった。

自分の屋敷に帰ってくる頃には、九時を回っていた。

どこか憂鬱で、すぐに布団に入ってしまった欲望に駆られたが、今日は呪術の鍛錬は勿論のこと、他の重要な仕事も片付けていない。しかし、残ったこの体力で、できるかというところ、明らかに無理だ。とりあえず重要な仕事だけ済ませて、とっとと寝ることにする。

自室に入り、中央の畳をどけ、地下室への扉を開く。その途端、地下室の生暖かい空気が顔に吹きかかり、むせて、後退さった。

地下室内の温度は、日増しに高くなる一方だ。さすがに、この蒸し風呂の中で、作業をする気にはならない。

台所に向かい、バケツに水を満たした。そのバケツを両手にぶら下げ、ペンライトを口にくわえて足元を照らしながら、地下室へと続く階段を慎重に降りた。

着いた頃には、息は切れ切れに、体は汗でびっしょりだった。

バケツを石の地面に置くと、若干間を空けて並べ、その間に腰を下ろした。そして、そのまま、左右のバケツの中に、それぞれ手を突っ込んだ。

思わず、うなる。体が痺れるほど、心地良い。

水の冷たさが、手から全身へと伝わり、暑さによって失われた集中力を次第に取り戻していく。

呼吸が安定し、気分が落ち着いたところで、両手を水から引き抜く。

ひんやりと濡れた手を、頬にこすりつける。そして、再び身悶え

した後、手を離した。

「始めるか」

静かに目をつむる。

闇が現われ、真つ黒な背景の上に、あの情景が浮き上がる。二つの死骸と、その前に立つ長身の男。

——この男は一体何者なのか。

見覚えはなく、事件の後の行方も全く見当がつかない。

両親を殺したのがこの男である可能性は、極めて高いものの、断言することはできない。ただ、事件に関係していることは間違いない。

つまり、この男が、事件の謎を解くカギになっている。正体を掴み、力ずくで真相を聞き出すことができれば。

そのために、これから呪術を使う。加賀家に伝わる、他人に害を与える為に作られた凶悪な呪術。

男に強力な魔眼を使われ、俺は記憶を失った。男の魔眼は、相手の心に直接介入するものだった。

通常、呪術を『かけた者』と『かけられた者』の間には、特殊な関係が築かれる。

呪術を使った際、お互いの精神を強く接触させると、相互間に一つの精神的な繋がりが形成される。その繋がりは、長きに渡って継続し、両者に、たびたび相互作用をもたらすことがある。

極端な例で言えば、片方がひどい火傷を負ったとしたら、もう片方が火災に遭う、といったところだ。

この原理を利用する。精神的なパスを通じ、男に対して、呪術で攻撃する。

だが、問題がある。あれだけ強力な魔眼を使った男だ、その能力はかなり高いものと予想される。

男の、呪術への耐性が高いために、俺がしかけた呪術の効果が、半減される恐れがある。悔しいが、認めざるを得ない。

しかし、その問題は、時間の経過が解決してくれるだろう。

呪術への耐性がどんなに高くとも、時間が経過すれば、必ず効果は現れる。効果が発現すると、それは対象の身体を蝕み始め、放って置くと死に直結する。

だから、呪術による害が放っておけないほどに強くなってくれば、男は自らの命を守るために、必ず行動を開始するだろう。

かけられた呪術を力ずくで解くか、それとも、俺に対して報復を始めるか。ひよっとしたら、俺の前に姿を現すかもしれない。

いずれにしろ、攻撃を仕掛けたら、後はただ、あの男が行動を開始するのを待っていればいい。獣を怒らせて罠まで誘い込むのと同じように。

男が行動を開始したその時、俺はようやく動き始める。そうしたら。

「——力ずくで、あの男をたぐりよせてみせる。そして、」

あの時の屈辱を、その身に刻みこんでやろう。

右のバケツを殴ると、水が散開した。あの時、地面に広がっていた血のように。

第二章 三

「俺、飛行機乗るの初めてだ」

朝からずっと、口数の少ない綾華の横顔に、できる限り明るい声で話しかけた。

綾華は、視線を前のシートの背に向けながら、「そうだったね」と、感情のこもらない声で言った。

俺は首をふって、シートの横のレバーを引いた。シートが後ろに倒され、体が後方に沈む。視界が揺らぎ、天井が顔の正面に来た。身体のを抜き、小さく息をつく。

「綾華」

訳もなく、そうつぶやき呼ぶ。当然返事はない。

俺の横を他の乗客が通り、楽しげに交わす声が耳に入ってきて、それは後ろへ過ぎ去っていく。

綾華の実家は、一体どんなところなんだろう。おばさんの話によれば、俺の屋敷の数倍はあり、使用人もたくさんいて、大きな旅館のようなイメージを湧かせるという。

おばさんの母親で、綾華の祖母にあたる水酉 翼と言うお婆さんが、数年前まで頭首をつとめていたらしいが、綾華達が関東に引越してきた後、すぐに他界した。

家と縁を切ったおばさんに代わり、今はおばさんの従弟が、頭首の役割を引き継いでいると言う。

今日の親族会議は、この、頭首に関する話し合いをする為に開かれるらしい。

手元にあったペットボトルの蓋を開いて、ぼんやりと考えこみながら、飲む。

すると、ふとした弾みで、口の端からこぼれ、それが隣の綾華の右手に落ちた。

「ごめん。すぐ拭くよ」

タオルを出して、綾華の濡れた手の甲を拭く。その手は、だらりと力なく垂れていた。

「ホント、どうしたんだよ。綾華」

その手の平を握って揺らしてみるのが、綾華は振り向かず、窓の外を無言で見つめている。

「久しぶりに帰るのに、嬉しくないみたいだな」

綾華は答えず、思い詰めたように、じっと考えている。

突然飛行機が動き出した。

窓から見える滑走路に引かれた白いラインが、滑るように後ろへ流れていく。離陸の準備に取りかかったらしい。

シートベルトを着用し、じっと待っていると、突然「智也」と、

綾華の不安そうな声がした。

身を起こして振り向くと、真っ青な顔の綾華が、かすかに涙を目にためて、俺を見ていた。

綾華に顔を寄せて、どうした、と小声で囁いた。

「怖い」

綾華は、耐えるように目を強くつむった。

「飛行機が苦手って訳じゃないよな。何が、怖いんだ」

綾華は、黙って首を振る。

綾華の恐れるもの——それは言わずとも知れている。

実家に帰るのを——いや、正確には、そこで待ち受けているものを恐れている。

俺は微笑み、綾華の震える手を、両手で包んだ。

「俺が一緒だ。……だから、大丈夫」

綾華は小さくうなずく。

手が握り返される。俺を見る綾華は、力なく笑う。

飛行機が離陸体勢に入り、滑走路を高速で走行する。

綾華の、手を握る力が一層強まった。

機内が揺れた。宙に浮く感覚に体が総毛だつた。

数秒経った後、機内の揺れは収まった。

繋がれた手と手は、お互いの汗で湿っていた。だが、離さなかった。

綾華は窓の外の、小さくなっていく大地を見ながら、ぼつりとつぶやいた。

「実家では私、おばあちゃんに可愛がってもらってたの。おばあちゃん、孫の私には優しくったんだけど、お母さんとか、他の親戚の人には、つらくあたってた」

俺は、おばさんの言葉を思い出した。

——私の母は呆れるほど頭が固くてね。縁を切ったのも、母さんの気性に嫌気が差したのが一つの理由ね。

俺は、「翼さんは、綾華には優しくったんだな」とうなずく。

「おばあちゃんが大好きだった。おばあちゃんも私が好きで。頭首の仕事は忙しかったみたいだけど、おばあちゃんは暇を見つけては私と遊んでくれた。私はその時間を、毎日楽しみにしてたの。……けど、関東に引っ越した後、おばあちゃんが死んだって知らされた……本当に悲しかった」

綾華は寂しそうに視線を下げて、体の震えを抑えるように両腕を組ませた。

「おばあちゃんは、最後まで親戚の人に憎まれたまま死んでいったんだと思う。……頑固で、憎たらしい老いばれ。皆の憎しみがこもった視線で、そう罵られながら」

綾華は、窓の外の真っ白な雲を悲しげに見つめた。

「今日、やつとおばあちゃんに会える」

「実家にお墓があるのか？」

「うん。実家を離れてから、一度もお墓参りに行ってあげられなかった。着いたらまず、おばあちゃんに挨拶しなくちゃね」

綾華は目の縁に溜まった涙を指でぬぐい、微笑んだ。

そして、喋り疲れたのか、ふう、と小さく息をつく、シートに身を沈めた。

しばらくの間、沈黙が流れる。

ふと、手の平から、暖かい温もりが消えた。見れば、繋がれていた手は解かれて、綾華は静かに寝息を立てていた。毛布をそっとかけてやる。

「綾華」

と小さく溜息をつく。

この安らかな表情も、目覚めると同時に消え去ってしまうのか。一体何に思い悩んでいるのか、綾華は俺に打ち明けてはくれなかった。

俺には、ただ見守ることしかできない。だから、せめて一緒にいてあげること、綾華を支えることができれば。

イヤホンを手に取り、シートの端子へ繋ぎ、耳にあてる。クラシックが流れてくる——おばさんの好きな曲だ。

俺は、一つ深呼吸をした後、目を閉じた。

心を空にし、意識を広げる。

……男の、現在の居場所。

その問いに呼応するかのように、インスピレーションが頭を掠め、すかさずそれを掴む。

直感によると、男は現在、この飛行機から南西にいる。

飛行機に搭乗した時点での、男のいる方角は、東北。つまり、関東から北、この飛行機の現在位置より南。その範囲に、あの男がいる。

目を開く。窓から差すまぶしい太陽の光に、手をかざす。寝ている綾華の上に身を乗り出し、そっとカーテンを引いた。

その時、ふと、綾華の右手が、何かを掴もうと動いていることに気づく。

綾華の顔を見る。すると、唇がかすかに動いて、寝言が聞こえた。思わず微笑み、

「綾華」

と、呼び返して、その手を握った。

空港に到着して飛行機から降りると、しばらく経って綾華の携帯に連絡が入った。

空港を出て、指定された場所に向かうと、迎えの車が待機していた。

運転手の中年の男性に優しく迎えられ、俺達は後部座席に乗り、出発した。

一時間程走って国道を降り、山の中を過ぎると、田舎の町並みが四方に広がった。

車は運転手の慣れたハンドル操作によって、狭い道を難なくと前進していく。

途中、人気のない公園の側を通った。木々に囲まれた散歩道が、公園の中央へ続いている。

綾華が、「懐かしい」とぼつりとつぶやいた。

そして、窓に身を寄せていた俺へ近づき、横から乗り出して外を見つめる。俺の頬と、綾華の柔らかな頬とが触れ、こすれる。

「小さい頃、よくここで遊んだの」

囁くような小さな声。

顔を離して、間近にある綾華の顔を見ると、その瞳は寂しげだった。俺は目を伏せ、そうか、と短く返した。

車はそのまま小さな住宅街へと進んだ。そこに入っすぐ、水酉家の屋敷があった。

高い塀が、一直線に住宅街を貫いている。車はそれに沿ってしばらく走ったが、塀の終端は一向に見えてこない、

そのうち、大きな門が現れ、その前で停車した。車から降りると、着物姿の女性が門から出てきた。

年は俺達より少し上くらい。長い黒髪を後ろで結わえ、色白で清潔感があった。

無表情だが、落ち着きがあって風格が感じられ、勤めてから結構経つのだと、容易に想像がつく。

「……綾華様、智也様。ようこそ、いらつしやいました。使用人の水沢で御座います。どうぞ、こちらへ」

淡々とそう告げた後、門の中へと案内した。無言で後を追う。様子からして、水沢と名乗ったこの女性と、綾華はどうやら初対面らしい。綾華が引越した後に加わった使用人だろう。

門に足を踏み入れて、改めて敷地の広さに驚愕した。屋敷の西側に、まさか、と思うほど大きな庭園があるのが見える。

「智也様、こちらです」

立ち止まっていた俺の方へ、水沢さんが振り向き、呼んだ。

我に返り、「すみません」と、二人の元へ駆け寄る。そんな俺を見て、綾華が、「あほ」と、かなり気に障る事を言って、くすくす笑う。

水沢さんは俺を一瞥した後、再び先導して歩き始めた。その背中揺れる、結わえられた長い髪を見ながら、随分と静かな人だな、と思う。

恥をかいた事を少し恨めしげに思いつつ後を追った。

玄關まで来ると、数人の着物姿の女性が待ち構えていた。

……よし。やるなら、今か。

服の中で、俺の胴に巻きついている蛇へと意識を向ける。

すると、蛇は俺の腹の上を這い始め、その縄は徐々に解かれていった。

Tシャツの袖から小さな頭が出てくるのを視界の端に確認し、俺は前方の使用人達へと焦点を合わせる。

近づくと、使用人達は礼をし、中央に立つ、小柄でふくよかな中年の女性が歩み出た。

隣で綾華が息を呑む音が聞こえる。

女性は、俺達を交互に見つめた後、綾華に、「お久しぶりです」と、笑顔でお辞儀をした。綾華の目が見開かれる。

「としおばさんなの？」

綾華の震えたつぶやきに、女性が目を細め、うなずいた。

綾華はしばらく女性を食い入るように見つめていたが、不意に「おばさん！」と、走り寄る。

しかし、女性の間近まで来て、足を止めた。人前で抱きつくのは、さすがに躊躇われたのだろう。

綾華は目に涙を浮かばせ、「あんまり懐かしかったから、つい…

…」と、頬を赤くして笑う。

女性は綾華を見上げながら、「大きくなりましたね」と涙ぐんだ。

綾華は、俺へ振り向き、

「この人は、水瀬杜枝さん。みなせとし 私が小さい頃から、ずっとここにいるの」

と、紹介する。「どうも」と軽く会釈すると、水瀬さんはふつくらとした頬を緩ませて、

「智也様のことは、和子様から話をうかがって存じております。綾華様や和子様と、家族のように親しく接して下さっていると——」

と流暢に言い、さらに、ありがとうございます、と深くお辞儀をした。

「こちらこそ、お世話になるばかりで。おばさんには、感謝の言葉が尽きません」

俺も礼を返す。頭を下げた時、視線を右斜め後ろに移す。服から出た白蛇が、玄関近くの木の後ろにひそんで、俺を直視していた。

蛇と一瞬の間、見つめ合い、

——行け。

と、命令を下した。

蛇が木陰から、草むらを掻き分けて玄関へと近づく。その時、

「——あれは」

と、綾華の前に立つ水瀬さんの、つぶやきが聞こえた。

水瀬さんは、俺の右側——蛇のいる方向にじつと目を据えていた。気づかれたのだと気づき、即座に蛇に視線を向け、

——動くな。

と、行動を停止させた。

蛇は、石の陰で、死んだように微動だにしなくなった。

ゆっくりと水瀬さんを見やる。その表情を見た途端、背筋を寒気が走った。温厚そうな笑顔は消え、それに代わって、ぞっとするほどの無表情が浮かんでいる。水瀬さんの警戒するような視線に、額に汗が浮かぶ。

蛇を直接目にしてはいないようだが、その禍々しい気配は伝わっただろう。

どうせ、ばれはしない。そう高をくくって、密かに屋敷内を調べさせる為に蛇を放ったのが間違いだった。

この家では、使用人までもが霊感が強いらしい。

傍らにいる、玄関まで俺達を案内した水沢さんや、前方の女性達は幸い気づいていないようだ。

密かに舌打ちをした。

綾華は眼前の、女の様変わりに気づかず、俯きながら、懐かしさの涙を、必死にこらえていた。

その時、

「お屋敷の中へ案内致します」

場に漂うどこか不穏な空気を察したのか、横に立つ水沢さんが、先導して歩き始めた。すると、水瀬は我に返ったように、

「どうぞこちらに」

と、表情を明るく作り変え、促した。

第二章 四

案内されるまま、俺達は広い廊下を進んでいった。

板張りの床が軋んで音を立てる。建ってから随分と年月が経過しているようだが、隅々まで掃除が行き届いて清潔に保たれ、多少の老朽感は気にならない。

綾華は辺りを見回して、鼻をかすかに動かし、懐かしい香りを味わっている。

前方を歩く水瀬の、横幅の長い背中を睨む。

後頭部が見えるだけで、どんな表情をしているかは解らない。だが、きつと、見る者が寒気立つような無表情が浮かんでいるのだろう。

——くそ。

内心、そう毒づく。

水瀬が俺に特殊な『匂い』を感じているのと同様に、俺もこの屋敷から、何らかの『匂い』を感じている。それを探るための行動が、結局あだとなった。

警戒されてしまった今、屋敷内で再び蛇を使う訳にはいかない。それに。

もし、綾華が水瀬を通して、俺が呪術師であることを知ってしまったら——。

水瀬はおそらく、幼い頃の綾華の世話役だったのだろう。周知の仲であるのは明らかだ。

——あの男からは危険な匂いがします。

そんなことを綾華に吹き込むかもしれない。拳を握りしめる。

と、廊下が二手に分かれる所に差しかかり、先導する水瀬と水沢さんが立ち止まって振り返った。

俺と綾華、さらにその後ろに続くもう一人の女性が、足を止める。

水瀬が口を開く。

「お着きになつて早々、申し訳御座いませんが、親戚の方々の大事な話し合いがある為、綾華様には別棟まで来て頂きます。智也様は、それが終わるまで、お待ち頂くようお願い致します。その間、庭園を散歩したり、客室でおくつろぎ下さい。……百合香」

俺の後ろに付いて来ていた女性が、「はい」と前へ進み出た。

「智也様のお世話を担当致します、園田と申します。御用があれば、難なくお申し付け下さい」

園田さんは、齒切れ良く喋り、礼をした。明るそうな雰囲気を持った、二十歳前後の女性だった。

「……では、綾華様。参りましょう」

水瀬が言う。綾華は不安そうな面もちで俺に視線を送った。

俺が微笑みうなずいてみせると、綾華は、決心したようにうなずき返した。

水瀬は無機質な声で、「参りましょう」ともう一度促して、廊下を歩き始めた。

水沢さんが、「さあ、綾華様」と優しい口調で促す。

綾華は後ろに続いて歩き始めるが、一度こちらに振り向いて、「行つて来るね」と小さくつぶやいた。

何も言わずに、見送った。綾華の背中が見えなくなると、一息をつき、かたわらに立つ園田という女性に視線を向けた。

「じゃあ、客室に案内しますね」

園田さんが言う。その明るい雰囲気、張り詰めた空気が一気に霧散していった。

「ええ。……行きましょう」

綾華が心配で、気のない返答をしてしまう。けれど、園田さんは明るい顔を少しも崩すことなく、「こちらへ」と、案内し始めた。

歩きながら廊下の床に視線を落とし、ぼんやりと、綾華が見せた不安げな顔を頭に浮かべる。

「庭園を散策する際には、お申し下さい。案内しますので」

わかりました、と抑揚のない声で返し、ジャケットの腕袖をずらして、腕時計を見た。三時三十二分。

「……親族会議がいつ頃終わるか、わかりますか？」

「……どうかなあ。たぶん、夕方頃には、と思うんですけど。……やっぱり、綾華さんが気になりますか？」

「ええ。まあ」

時計から顔を上げて曖昧な返事を返すと、園田さんが、何を思ったのか、くすりと笑って顔を近づけてきた。

「やっぱり、お二人は付き合ってるんですか？」

あまりにも唐突な質問を間近で囁かれ、俺は一瞬、自分が複雑な状況に身を置いていることも忘れ、「は？」とうわずった声を上げた。

客室に着いた。園田さんがにつこりと、「どうぞ」と促し、俺は、失礼します、と上がった。

和室で、広さは俺の屋敷の客室の数倍はあった。一人で使うには広すぎるかな、と苦笑しながら、窓際の障子を開けると、大きな庭が一望できた。

「すごいな……さすがに、これは」

手入れを怠っていないことが、ありありと解かる。自分の屋敷の庭には自信があつたが、これの前では比較する気にさえならない。

「智也さん。お茶を淹れましたので、どうぞ」

背後から、明るい声がかかる。

窓から離れ、部屋の中央の長机の前の、座布団に腰を下ろす。

机の上に置かれた湯飲みから、白い湯気が上がっている。その横には、お茶菓子が小皿に乗って置いてあった。

俺は、園田さんに視線を向け、

「ご一緒しませんか？ 話し相手がいてくれると助かります」と誘ってみる。

園田さんは「是非、御一緒させて頂きます」と嬉しそうに、もう一つ湯飲みを持って向かい側に腰を下ろした。

お茶を注いで、それを自分の口まで持っていた後、小さく唇を開かせ、ふうと白い吐息を吐く。

その様子をぼんやり見ていると、

「どうぞ。美味しいですよ、そのお菓子」

と、右の手の平ですすめてくる。

俺はうなずき、それに手を伸ばすが、園田さんの視線がじつと、お茶菓子の注がれたままなので、手を引っ込めてしまう。何となく、園田さんの心の内が解った俺は、

「良かったら……半分あげましょうか？」

と、苦笑混じりに言った。

「そんな……お客様にお出ししたお茶菓子を、使用人が口にするなんて、とんでもないことです」

否定の言葉を口にしてはいるものの、その表情は明らかに欲しいと叫んでいる。

ポケットティッシュを一枚引き抜き、それでお菓子を数個包むと、何も言わずに、園田さんの手の平に乗せた。

「誰かに言ったりしませんから。……食べて」

すると、園田さんは一瞬啞然としたが、

「……すみません。じゃあ、頂いちゃいます」

と、舌を出して照れたように笑って、俺の差し出す手に、手を重ねた。

一息入れた後、庭を散歩することにした。さっそく園田さんに案内を頼むと、彼女は待つてましたとばかりに、目を細めうなずいた。鮮やかな緑に囲まれた緩やかな小道を、園田さんと二人で歩いていると、微風がべたついた肌をなでる。

この屋敷は、北海道の道東に位置するから、関東より大分涼しい。去年の夏は、猛暑が続いて、ストレスが溜まる一方だった。エアコンにしがみ付いて離れない俺を、外に連れ出そうとする人間が一名いて、必死に戦ったが、その強引さに根負けして、引きずり出さ

れた。

そんな、だらけた夏の日々を思い出すと、今年の旅行が北海道で良かったとしみじみ思う。

この事を園田さんに話すと、

「都会の生活か……懐かしいなあ」

と、園田さんは遠い目で、高い塀の向こうの空を見つめる。園田さんの明るい雰囲気がいぼんだ。

「実は私、ここに来るまでずっと都会にいたんです。就職先も見つからず、自暴自棄になってた頃があつてね。けど、そんな時この家に拾われた。給料もまあまあだし、家での衣食住も許されてるし、言うことないですよ、ホントに」

「そう言っている割りには、あまり嬉しそうじゃないですね」

俺がそう言つと、

「……そんなことないってば」

と、園田さんは思案げにぼそりとつぶやいた。

数秒間の沈黙の後に、俺は、

「てば？」

と、思わずつぶやく。

言葉遣いが戻っているのに気づいたのか、園田さんははっとして、顔を赤くした。

「ごめんなさい……言葉遣いには気をつけていたんですが、気を抜いた途端に、つい……」

あたふたと慌てながら、そう弁解する。

……さっきからどこか馴れ馴れしかったのは、意図してやっていた訳じゃなかったのか。

由緒正しい家の使用人は、礼儀作法云々を厳しく教えられるのだろう。見た感じ、根っからの都会っ子だった彼女には、少々難しいのかもしれない。

俺は、

「いいよ、そんなこと」

と、ぼつりと言い、

「タメ口でも、全然構わない……いや、むしろその方が気が楽だ。今、周りには誰もいないから平気だろ？」

園田さんが驚きの表情を浮かべる。彼女は迷っているようだったが、

「じゃあ、お言葉に甘えるね。智也君」

と、はにかむように笑って言った。

その思い切りのよさに、好感が湧いた。だが。

……その後すぐに、後悔することになった。

緊張が取れたのか、園田さんは楽しそうに語り始め、その勢いはとどまる事を知らず、まるで話相手が二人いるような気分だ。

この人にとって、敬語は、自制心を保つ最後の砦だったらしい。長い会話を好まない俺にとって、この状況は最悪なはずだったが、綺麗な景観の為か、不思議と嫌な気分にはならなかった。

大きな池の前まで来ると、その側の木製のベンチで休憩することにした。

ふと、別棟の方から、黒いスーツの男性が歩いてくる。四十半ばくらいで、背はないが、肩幅があつてがっしりとしていた。

俺達に気づくと、笑みを浮かべ軽く礼をし、母屋へ歩いていこうとする。しかし、園田さんが「黒谷さん、こっちこっち」と庭中に響くような声で、手を振って招くので、やれやれといった様子で首を振り、方向を変えこちらに近づいてきた。

俺と目が合うと、男性はにこりと微笑んで、再び礼をした。

俺は、どうも、と軽く頭を下げる。

「様子はどうです？」

園田さんが、開口一番にそう尋ねると、黒谷と呼ばれた男性は、「長引きそうです」

と、返した。

山男を思わせる太い声だったが、優しげだった。

——ただ。空元気と言ったらいいのか、笑顔に覇気がない。

よく見れば、頬が引きつっていて、目の下には隈がはっきりと浮かんでいる。

……この人、かなり疲労が溜まってる。やばいんじゃないのか。そう思った時、

「黒谷さん、また無理してるでしょう?」

同じ事を思ったのか、園田さんがその顔を見て、眉をひそめて言った。

黒谷さんは、「やっぱり顔に出ちゃってるか」と、苦笑いしながら自分の頬をさする。

「もし倒れたりしたら、娘さんが悲しみますよ」

園田さんは口を尖らせて注意するが、黒谷さんの穏やかな微笑みを前に、どうしても優しい口調になるらしかった。

「ただの寝不足ですよ」

黒谷さんは苦し紛れにそう言っ、乾いた笑い声を上げた。

園田さんがまた口を開きかけると、間髪いれずに、「失礼します」と言っ、母屋へ逃げていった。

園田さんは「ちょっと、黒川さん!」と立ち上がっ、その背中に呼びかけるが、すぐに諦めたように座った。

「誰なんだ、あの人」

「……さあ、誰でしょうね。当ててみて」

園田さんは眉をしかめたまま投げやりに言い、不機嫌そうに溜息をつく。

俺は数秒間、視線を宙に浮かせた後、

「ボディーガード」

と、一言、つぶやいた。

園田さんの不服そうな表情が、一気に驚きの色に染まる。

「なんで解かったの?」

俺の顔をまじまじと見てくる。

……なんで、と聞かれても、呪術による『読心術』を使ったのだから、解るのは当たり前だ。

「……なんとなく、そう思っただけ」

適当にそう返し、ベンチの背の上に両腕を広げて乗せ、寄りかかり、ぼんやりと空を眺める。

「勘が良いんだね。……黒谷さん、優しくしておっとりしてるから、傍から見て、とてもボディーガードに見えないのよねえ」

「そうだな、と短く返事を返すと、ふとある事に気づく。」

「なんで、ボディーガードなんて雇ってるんだ？」

「声音が、真剣になる。」

意表をつく質問だったのか、園田さんは「それは……」と言葉を濁して、視線を当てもなく彷徨わせたが、突然、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「本当は、外部の人には言っちゃいけないんだけど……」
顔を近づけて、そう囁く。

「口堅そうだから、別に良いわ。……言わないって約束できる？」

俺は身体を起こして、ああ、とうなずく。

すると、園田さんは口の端に手を押し当てて、声をひそめて言った。

「水西家の人達にはね、不思議な力があるみたいなのよ……靈感って言ったらいいのかな。本当かどうかは知らないんだけどね」

「ああ、その事はもう聞いたよ。それが何か関係しているのか？」

園田さんは、そうよ、と真面目な顔で、大きく頷く。

「水西家には古い師が何人かいるらしくて、その人達は、以前、政界の要人から度々依頼を受けてたらしいの。でも、最近はどうも依頼の数が少なくなるばかりで……」

園田さんは、話に重みを持たせたいのか、身振り素振りを交えて、唸るような低い声で喋る。怪談をしている訳じゃあるまいし、と俺は笑いを堪えながら、「それで？」と先を促す。

「自棄になったのか知らないけど、かなり危ない仕事に手を染め始めたんだって。たぶん、公には言えないような仕事なんだと思う」

「……本当か、それは」

「わからない。他の使用人が、そう言っただけだから」

「……そうか」

俺は目を瞑って、深く息を吐く。

……公には言えないような仕事、か。

おばさんが水酉家と縁を切ったのは、もしかしたら、それが一番の原因なのかもしれない。

「……まあ、使用人の誰かが、単なる暇つぶしに作った話だと思うんだけどね。水酉家の人達は皆、すごく優しいし、やばい事やってるようには見えないもん」

園田さんの言葉に、俺は返事をせず、黙って視線を空へ向けた。

すると、園田さんが不安げな目で俺の顔を覗きこみ、

「もしかして、私、凄くまずい事言っちゃった？」

と、氣遣うように言った。

「……そんなことないから、大丈夫だ」

俺は反射的にそう返したが、声の語尾は消え入るように小さかった。

「ごめんね。もう、こんな話はしないから許して。この通り」

園田さんは本当に申し訳なさそうな表情で、手の平を合わせる。

俺は「だから、平気だってば」と、園田さんに苦笑を向ける。

そのまま沈黙が流れ、お互いに一言も喋らなくなった。喋り疲れなのか、園田さんはぐったりとベンチの背に寄りかかり、懐からハンカチを取り出して、額に浮いた汗を拭いている。俺と園田さんの距離は会話をしていた時と変わらず近いままで、小さな息が俺の首筋に柔らかく拭きかかる。

俺はゆっくりと肩の力を抜き、視線を再び真上の藍色の空へと戻す。

薄い藍の生地の上に点々と散りばめられた白模様。その中の一つが、限りなく透明に近くなって今にも掻き消えてしまいそうだった。その薄っぺらな雲と重なって、綾華やおじさん、おばさんの顔が一瞬のうちに浮かんで消えた。

俺が手に入れた幸福な日々は、案外あっさりと消えてしまうものなのかもしれない――ふと、そんな事を思った。

復讐に身を捧げれば捧げる程、大切なものが削り取られていくような感覚があった。こうして、俺が復讐に精根を尽くす毎日を送っているうちに、知らない所で、何か、大切なものが俺から奪われていくような気がする。

この感覚が、罪を犯し続ける人間に与えられた、一生の間付き纏う罰なのかもしれない。

罰、といっても、それは別に神様が罪深き人間に与えている訳じやなく、復讐は人の心を喰らう、という単純明快な事実が、人間には罰のように感じられているのだろう。

……俺が呪術師であることは、綾華には口を裂けても言えない。それに、この水酉家には神職者が多数いるから、この家の者にも知られる訳にはいかない。神職者にとって、俺の使役する呪術は、何とおぞましく見えるだろうか。

知られたが最後、綾華やおじさん、おばさんとの縁は確実に断ち切られるだろう。

ふと、綾華は今、どうしているかな、と思った。そう考えているうちに、心配が胸から溢れ出し、気づかぬうちに視線が別棟の方に向いている。

今まで、綾華達が悩み苦しんでいる間、俺は幸せな時間をただ噛み締め、そして復讐に奔走するばかりだった。半端な幸福に溺れて、自分の事しか考えていなかった。

綾華が、このまま手の届かない所へ行ってしまうのではないか――そんな事有り得る筈がないと、頭では理解していても、何故か不安だけは、根拠もないまま急速に膨らんでいく。

「……俺は、どうすれば良いんだ」

気づいてみれば、本音が口をついて出ていた。俺ははつとして、園田さんに聞こえてやしないだろうな、と隣に視線をやる。俺の願いに反して、園田さんは身体をこちらに向かせて、物言いたげな視

線で俺をじつと見つめていた。

聞かれたと気づいた時には、「智也君、悩みがあるの？ 相談に乗るわよ」と園田さんに真剣な表情で、手でがっしりと両腕を掴まれている。

第二章 五

庭園から客室へ戻つてくると、園田さんが再び、お茶にしない？
と言ひ出し、御菓子を用意しに、部屋を一旦出ていった。しばらく経つと、彼女は苦々しい顔をしながら、もう一人、使用人を引き連れて戻ってきた。その表情から察するに、園田さんは、俺への応対を一人で気楽にやりたかったに違いない。園田さんの後ろに立つ使用人は、俺と綾華を屋敷の門から玄関まで案内した、あの口数の少ない、水沢という女性だ。

水沢さんは、凜とした面持ちで頭を下げた。結った長い髪が、背中の上で柔らかそうに左右へ揺れ、目を惹き付けられる。彼女が顔を上げる際に、改めてその小顔を真正面から見て、彼女が美人であるのに今頃気づいた。

水沢さんは園田さんの後に続いて静かに入ってきて、お茶の準備を始めた。

園田さんは、他の使用人が居る為に、仕方なしに振る舞いを元に戻したらしく、どうも浮かない顔をしていた。

水沢さんは園田さんの様子が昼頃と比べてどこか違っていることに気づいたのか、準備を進めながら、時折、ちらりと彼女に視線を向ける。

園田さんは、粗忽な行動が目立っていた。それが目に付く度、水沢さんが険しい視線を彼女に送る。

その視線に気づいているのか、わざと気づかないふりをしているのか、園田さんは依然とつまらなそうに、ただ準備を進めている。

……いくらなんでも、気が抜けすぎている。

彼女の振る舞いは、上辺だけのものでしかなく、完全に緊張感が抜けてしまっている。

後ほど彼女が、水沢さんら他の使用人達にこつ酷く叱られるのは、容易に想像がつく。園田さん自身も、そのことは十分解っているは

ずだが、どうやら開き直ってしまったらしい。

園田さんに、どうぞ、と芋羊羹を出される。顔を上げて園田さんを見てみると、やはり唾液を垂らして芋羊羹を見つめていた。

……全く仕方がないな、この人は。

俺は水沢さんの方へ振り向き、

「すみません。やっぱり冷たいお茶を出してもらって良いですか」

と、申し訳なさそうに言った。ポットから急須に湯を注いでいた水沢さんは、ポットのボタンから指を離し、「畏まりました」と、すぐに手元を片付けて立ち上がり、部屋を出ていった。

俺は、ようじで羊羹を一口の大きさに切った。

水沢さんを横目でちらりと窺がって、彼女が準備に集中してこちらに背を向けているのを確認する。

俺は静かに園田さんを手で招いた。彼女はすぐに、「何？」と言いたげな表情で近づいてくる。

俺は羊羹をようじに刺すと、園田さんの口の前にそれを持っていった。園田さんはすぐに何をするか気づいたようで、少し頬を朱に染めて、ゆつくりと小さな口を開き、ぱくりとかぶり付く。そのまま俺が羊羹からようじを引き抜こうとしたその時、

冷ややかな鋭い視線が、俺達を射ぬいた。振り向けば、水沢さんが俺達を直視して立ち尽くしていた。驚いて言葉も無いらしく、状況を理解するのに必死になっているようだった。

「えっと……」

俺は呟きながら、ようじから手を放した。園田さんは面色を真っ青にして目を見開き、水沢さんの憤怒に満ちた目に囚われて身動きができずにいる。彼女の口からようじが棘のように突き出ているが、そんな醜態に気づく余裕はないらしい。

「何をしているの」

低く鋭い声が、水沢さんの口から漏れ、静まり返った部屋に重く響き渡る。沈黙が寒風のように俺達の間をすり抜けていく。

「……ごめんなさい」

数秒後、園田さんは悄然と、聞き取れないような声でそう呟いた。そして、弁解の言葉を吐こうと、さらに口を開くが、水沢さんは、園田さんの糸の様にか細いその声を、

「私に謝っても仕方がないでしょう!」

辛辣な言葉で両断した。黙り込んでしまう園田さんをきつく睨みつけた後、水沢さんは「智也様」と俺の方へ向き直った。

「使用人がこのような大変無礼な行為を働き、本当に謝罪の言葉もありません、智也様。すぐに新しいものにお代え致します」

そう言って御菓子の皿を回収する水沢さんの目には、園田さんの姿はもう映っていないようだった。

部屋に居るのは自分と一人の客だけ、とても言わんばかりだ。

仲間に見放された園田さんは、俯いて肩を震わせている。

掛ける言葉が見つからなかった。俺の余計な行動が、園田さんを窮地に追いやったのは間違いない。人の目が及ばない所ではお互いにタメ口で話す、というのはまだ許せる範囲かもしれない。だが、客に出した食べ物を使用人が口にするのは、明らかに度が過ぎている。

俺自身が気楽だからと、ただそれだけの理由で、彼女の事を考えもせずに浅はかな提案をしたことに、罪悪感が湧いてくる。

「……水沢さん。ちょっと待って」

彼女は包丁で新たに羊羹を切っていたが、俺が呼ぶと、手を止めて「何でしょうか?」と振り向いた。

「園田さんが御菓子を食べたのは、俺が無理に勧めたからなんだ。今回だけは見逃してやってくれないか?」

「見逃すというと?」

「つまり、他の使用人には喋らないでいてあげて欲しいんだ。この件に関しては、俺にも少なからず責任がある。この事が原因で園田さんが辞めることになったりしたら、何だか嫌なんだ」

「智也様は気に病むことはありません。すべての責任は、私を含めた使用人の者達全員にあります」

そう淡々と告げられると、返す言葉が見つからず、俺は「そうか……」と押し黙ってしまう。

「もついいよ、智也君」

俺のすぐ横でじつと俯いていた園田さんが、顔を上げて、力なく笑いながらそう囁いた。そのまま園田さんは立ち上がり、水沢さんの横に並んで手伝いを始めた。しかし、

「お客様の応対は私に任せて、あなたは厨房に行って夕食の準備の手伝いをしてきて」

と水沢さんに指示されて、園田さんは表情を曇らせながら、部屋を出て行った。

気まずい沈黙が流れる。俺はゆっくりと息を吸った後、額に手をつけて大きな溜息を吐く。

水沢さんはしばらくの間険しい表情を浮かべたままだったが、時間が経つごとに眉間にできた皺も弛緩して徐々に消えて、元の無表情に戻った。

「お待たせ致しました」

机の上に、新たに羊羹の載った皿が置かれる。続いて、冷たいお茶の入ったグラスが、氷が揺れる小気味良い音を立てて、コースターの上に置かれる。

それらを置いていく水沢さんの手をぼうつと見つめながら、俺は

「なあ、水沢さん」と呟く。

「何でしょうか」

「せっかくだから、少し話し相手になつてくれないか」

水沢さんは一瞬俺の顔を窺がう様に見たが、少し間を置いた後に「わかりました」と頷いた。

俺は、静かに机の横に正座する彼女を見ながら、

「水沢さんは、どうしてここで働こうと思ったんだ？」

と、聞いた。

突然自分の事を聞かれ、意表を突かれたのか、水沢さんは視線を揺らめかせながら、

「何故と言われましても……私は水西家の分家に生まれ、この家で働くために幼い頃から指導され、中学校を卒業した後に、奉公人としてこの家に招かれました」

……つまり、水沢さんは、自分が使用人になる事に、疑問を抱いたことは一度もなく、それが自分に課せられた義務であるかのように思っていた訳だ。

「なるほど、そうなのか。……突然変な事聞いてごめん」

「いえ、どうかお気になさらず」

「ありがとう。……今話を聞いて思ったんだけど、俺の境遇は水沢のと少し似ているかもしれないな」

「似ていますか？」

「……ああ。俺の場合も、生まれた時には既に両親が息子の将来を決めててさ、俺はその目標へ向けて、幼い頃から努力を強いられたんだ。俺と水沢さんに違いがあるとすれば、その努力が苦痛だったかどうか、だろうな」

「智也様は、苦痛だったんですか？」

「ああ、苦痛だった」

俺は視線を落としてそう呟いた。その後で、顔を上げ水沢さんを見て、実はトラウマになってるんだ、と苦笑いを浮かべて言った。

「私は、使用人になるのが当然だと、幼い頃から信じて育ちました。苦痛かどうかを考える以前に、もう私の目標として確定していたんです」

「そっか。使用人になるまでずっと走り続けていたんだな。少し立ち止まってみて、自分に合った目標が、他にあるかもしれない、と疑問を抱いたことはなかったのかな」

「それは……」

水沢さんは、視線を地面に落として、何か考えを巡らしているようだった。それは、過去に残してきた想いに再び出会って戸惑っているように見えた。

「水沢さんは、幼い頃から使用人になるべくご両親に手塩に掛けて

育てられた。その結果、こんなにもしつかりと仕事をこなして家に貢献できる使用人になることができた。水沢さんはそれを当然のことのように思っているみたいだけど、苦痛から目を逸らしてばかりだった俺から見れば、それはかなり凄いことなんだよ。誇っても良いことだと思う」

俺が自分でも知らないうちにそう熱く語ると、水沢さんは頬を少し赤くして、歳相応の、嬉しそうな表情を俺に初めて見せた。

「けれど、水沢さんとは違って、長年の努力を積み重ねてこなかった人もいるんだ。水沢さんと到達した場所は同じだけれど、そこに至る道のりは全く違っていた」

誰のことを言っているのかすぐに解つたらしく、水沢さんはすぐに顔から微笑を消して、再び俺を無機質な目で見つめた。

「別にさっきの話を再び巻き返そうとしている訳じゃない。ただ、園田さんは働き始めて日も浅く、出身が都会だったこともあって、このような田舎で生活することに慣れてない。さっき水沢さんが来る前、園田さんは俺に、都会の生活について色々聞いてきた。たぶん、昔が懐かしかったんだよ。それで、ついつい思い出しているうちに、さっきのように仕事の手がなくなっただんだと思う」

俺は一気にそう喋り、短く息を吐いた後、再びゆっくりと口を開く。

「……ただそのことを理解してあげて欲しいんだ。世話の掛かる後輩でストレスも溜まるだろうけど、彼女を見放さないでいて欲しい」
一頻り喋った後で、また余計な事を言ってしまったな、と溜息を吐きながら反省する。

顔を上げて、水沢さんの顔を窺がい見る。再び淡々と厳しく言い返されるかと思いきや、

「見放す訳、ありません」

と、水沢さんはぽつりと呟いた。

「さっきは、つかつかとなつて彼女を怒り過ぎたかもしれません。お見苦しい所をお見せ致しまして、申し訳御座いません。でも……」

私は、彼女を見放そうとは思っていません。安心してください」

彼女の声音は落ち着いていて、その目は優しかった。

……なんだ、やっぱり優しい人じゃないか。

先程までの彼女は、感情の籠らない声で淡々と必要事項だけを述べていて、まさに機械だった。だが、こうして優しい微笑を浮かべているのを見ると、本来はとても素直な人なんだな、と気づかされ胸を動かされる。

「どうやら杞憂だったみたいだな。さすが、水西家は旧家だけあって良い人材が揃ってるな」

俺がそう笑いながらグラスを手に取り冷たいお茶をあおりながら、透明なガラスの向こうに、薄いピンクに頬を染めた水沢さんの顔が映るのが見えた。

第二章 六

目覚めると、私の身体は布団の中にあつた。掛け布団を除けて、身体を起こす。八畳の和室の中央に布団は敷かれていて、私の右横には使用人の女性が無言で正座して待機していた。

「お目覚めになりましたか、綾華様」

使用人の静かな声が耳に響いた途端、反射的に胸に不快感が広がった。私はその違和感の原因が解らず、動揺するが、今は状況を把握するのが先だと気付く。

「私はどうして――」

……ここで寝ているのだろう。意識が途絶える前の記憶を辿ってみるが、どうも思い出せない。

考え込んでいると、使用人が水差しでグラスに水を注ぎ、それを私に寄越した。私は使用人の顔をなるべく見ないようにしながら、グラスを受け取って一気に飲み干すと、布団の横の畳の上へ乱暴に置く。

視線を落として布団の上に据えながら、再び考える。

板張りの廊下を歩いて案内され、儀式を行う部屋の襖の前に立つたことは覚えているけれど、その後の記憶がどうも曖昧だ。

慎重に記憶を取り出して、それを時間軸に沿って順番に並べてみる。すると、あることに気づく。

……そうか。儀式を行っている時の記憶がないんだ。

「もしかして……儀式、失敗した？」

視線を下げたまま、震えながらそう聞いてみる。使用人は静かに首を振り、落ち着いた声で、

「……いいえ。儀式は成功しました。やはり、綾華様も、儀式の記憶は失っているようですね。前代の次期頭首であつた和子様も、同様の症状を呈していました。けれど、生活に支障を来たす事はありませんのでご安心下さい」

「良かった。成功してたんだ」

私は胸を撫で下ろして、やったよ、お母さん、と心中で呟き、微笑む。

……これで、お母さんはやっと解放される。

今日行った儀式によって、お母さんの身体に宿っていた『霊』がようやく解き放たれ、代わりに私の身体にそれが宿った。宿った『霊』は、通常、宿主の身体に直接働き掛けたりすることはなく、じつと大人しく、次の継承者へ宿るその時まで、宿主と生を共にするだけだと、お母さんが言っていた。

……この身体の中には、私の魂の他にも、何百年もの時を現世で彷徨い続けた『霊』が憑いているのだ。二つの意識がこの肉体に宿っている。

私に宿ったこの老いた『霊』も、宿主が普通の生活を送っている分には、身体に影響を及ぼすような真似はしないらしい。

だから、『霊』を宿すこと自体は、今後の生活にそれほど影響はない。

けれど、水西家には、『霊の宿り主になったものは家の頭首になる』という決まりがある。だから、自分でも信じられないけれど、今の私は水西家の頭首だ。しかし、頭首の実権は、現在二十八歳の従兄弟、一馬さんがまだ保有している。だから、当分の間、私は家に帰って今まで通りの生活を送れる。……そう。何も、問題はないのだ。

私は今まで、一体どれだけ思い悩んできたのだろう。積み重なる不安に胸が痞えるような苦しさがあった。けれど今は、胸に沈殿していた澱みがきれいさっぱりなくなって、清々しい気分が心を包み込んでくる。

「やっと……終わったんだ」

気付かないうちに、目の縁に涙が溜まっていた。私は指でそれを払い除ける。ふと自分が装束を纏っていることに気付く。私は顔を上げて、使用人に向き直り、口を開こうとするが、

「綾華様、お着替えは既にご用意しております」

私の言わんとすることがすぐに解ったのか、女性は傍らに置いてあつた着替えの浴衣を手にとって差し出した。

「お着替え、お手伝いいたしますね」

女性がそう言つて立ち上がるうとする。だが、使用人の顔を見た途端、私の心には何故か、先程の不快感が再び蘇つてきた。

「……いい。自分で着替える」

気付けば、私は女性の手から浴衣を奪い取つていた。一体何をやってるの、私は、と心の内で自分の行動に驚きつつ、

「看病してくれてありがとう。でも、もう出てって」

目を逸らしながら、冷めた口調でそう突き放した。視界の隅で、一瞬、女性が俯くのが解る。しかし、彼女はすぐに顔を上げて、

「畏まりました。部屋の外で待機しておりますので、何かありましたらお申し付け下さい」

女性は崩れそうな表情を必死に微笑ませて、そう言い残し、すつと部屋を出て行った。

……一体、どうしてこんな事を。

胸に手の平を当てて擦りながら、しばらく使用人の出ていった襖を見つめていた。しかし、そうしていても仕方がないことに気付き、静かに息を吐くと、装束を脱いで着替え始めた。

「……智也が待つてるから、早く行こう」

この家に着くまでは、ずっと儀式のことを考えてばかりだったから、今更になつてやつと旅行に来たという実感が湧いてきた。

壁際にあつた鏡の前に立つて、様々な角度から自分の浴衣姿を何度も確認する。それから髪を梳かして、ようやく準備を完了させると、私は逸る気持を抑えて、静かに部屋を出た。

私が出てくると、廊下で襖のすぐ横に佇んでいた使用人が、すぐにこちらに顔を向けた。

けれど、私はそれを無視して、足元にあつたスリッパを素足のまま履くと、智也のいる客室へ向かつて廊下を早足に歩き始めた。

「綾華様、お待ち下さい」

呼び掛けられたので、仕方無しに私は足を止め、後ろへ振り返る。使用人は駆け寄ってくると、私の前に足を揃えて立ち止まる。

「先程電話が入り、一馬様が今週中に屋敷へお戻りになられるとの連絡がありました」

「兄さんが？」

「はい。一馬様も、頭首となった綾華様にお会いする事を楽しみしておられます。……智也様のいらっしゃる客室へ向かわれるのでしたら、私のご案内致しますが……」

「いい。一人で行けるから」

私は使用人に背を向けて、早足で廊下を曲がると、そのまま走り出した。

どうして、あの使用人に冷たい言葉を向けてしまったのだろう。別に恨みがある訳じゃない。彼女に会ったのは、儀式の前、装束へ着替えさせられた時が初めてだった。儀式の前に会った時は、普通に会話は交わしていたし、嫌悪感はなく、むしろ好感さえ抱いていた。

なのに、さつき目覚めた時は、顔を見ただけで吐き気がした。眼前にいる人間が使用人だと気付いた瞬間、何故か、無性に――憎らしく想えたのだ。

日が落ちて屋敷の庭には静かな闇が訪れる。客室で一人、畳の上に横になって、窓ガラスの向こうを見つめながら、綾華はどうしているかな、とぼうつと考えていた。

するとその時、襖の先から「智也」と呼び掛ける声がした。はつと顔を上げて、襖の方へ振り向く。

「綾華か？」

立ち上がると、襖へと歩み寄り、ゆっくりと開ける。その先には、目を細めて明るい眼差しでこちらを見つめている、浴衣姿の綾華が立っていた。

――驚いて声が出なかった。たった半日、離れていただけだという

のに、まるで数年の時を経て再会したかのように、哀愁が胸を締め付けてくる。

「親族会議は、無事に終わったのか？」

「あ、うん……大丈夫だったよ。何ていうか、思ったほどじゃなかった」

綾華がそう言って軽快に笑うのを見て、即座に胸に安心感が広がっていき、先程まで緊張していた頬が自然と緩む。

「お前なあ、俺がどれだけ心配したのか解って——」

軽口を叩こうとしたが、言葉を最後まで紡ぐことはできなかった。それは、綾華の頬を一筋の涙が流れていたからだだった。その雫が真っ直ぐ落下していくのを視線で追う。

雫が地面にぶつかって弾け飛んだ時、何故か理由も無く、何か大切なものを失ったような喪失感が、胸を掠めていった。

「綾華……お前……」

俺が呟いて、綾華の顔に目が釘付けになっていると、

「あれ……どうしたのかな、私」

綾華は自分の頬に手の平を当てて涙を拭いた。

「智也の顔を見たら、どうしてか、目頭が熱くなってきた……変だよ。ごめん、驚かせて。迷惑掛けちゃうから、ちよっと顔洗ってまた来るよ」

そう言って踵を返そうとした綾華の腕を掴む。

「馬鹿だな」

俺は綾華に近づき、彼女の頬を濡らす涙を手の平で優しく拭いてやった。

「俺の事なんて良いんだ。お前は自分のことだけ心配してれば良い。ごめんな、一人ぼっちですと辛かっただろ」

「……智也」

綾華が俯きながらぼつりと呟く。

「そんなこと言うと、余計に涙が出てくるよ。何故か解らないけど、この涙、止まらないの」

綾華は、自分の濡れた両手を見つめながら、言う。

「理由も無く涙が出てくる事だってあるさ。中に入って座れよ。お茶淹れてあげるから」

「うん。ありがとう、智也」

そう言うって綾華はいつものように元気な笑みを浮かべるが、涙だけは一向に溢れて止まなかった。綾華も、自分が泣いている理由が解らないらしかった。涙がやっと止んだ後も、熱いお茶を飲みながら、俺が渡した紺のハンカチの、涙を拭いてできた黒い染みを、不思議そうにずっと見つめていた。

翌日から、俺は綾華と共に、水西家の運転手を一人借りて、北海道の観光に回った。

素直に楽しかった。北海道に来るまで綾華の身を取り巻いていた憂鬱な雰囲気、今では欠片も無く消え去ったようで、綾華は晴れ晴れと観光を楽しんでいた。あまりにも子供のようにはしゃぐので、少し始末に困ったが、その世話焼きも気付いてみれば楽しみの一つになっていた。

綾華の笑顔が、以前のものと比べてどこか変わったような気がした。今までの綾華は、いつも懸命に笑っていていようとしていた。それは、悩みを頭から追い出して必死に忘れようとする自己防衛の意図が含まれていたに違いなかった。綾華の笑顔は、いつか消えてしまふような、一時だけのものではしかなかった。その笑顔在必死に取り繕うことは、綾華にとつてどれだけ苦痛だっただろう。だが、今の綾華に浮かぶ天真爛漫の笑顔は、見る者の心を暖かく染め上げるような優しさがあつた。それは、綾華の心の奥底に長い間しまわれていて、ようやく顔を出した表情だった。

……時を忘れるほどの楽しさは、日が没するのを早めてしまう。庭に出て星空を見上げたり、静かな夏の朝を堪能することを、気付いてみれば幾度も繰り返し返していて、既に一週間が経過していた。

最初見た時は思わず言葉を失ってしまった豪華な夕食も、北海道で過ごす最後の夜にもなると、自分の胃の大きさを念頭に置きなが

ら平らげていくことができるようになっていた。とは言え、毎回のよう料理を机ぎつしりに並べられるので、食べ終わった後に腹が張り切れんばかりに膨らむのには変わりなく、俺は重い身体を引き摺って綾華と一緒に客室へ戻ってきた。

それから綾華と今日の観光について色々語り、十時頃に綾華が自室へと戻っていくと、俺は窓際に置かれた椅子に座り、年季の入ったランプのオレンジ色の光の下で本を捲って、静かで穏やかな時間を過ごした。

本を読みながら、ぼんやりとこの一週間を振り返る。胸を満たした楽しい思い出が、名残惜しさを一層募らせる。明日、この北海道旅行も終わりを告げ、俺達は関東へ帰らなければならない。

ふと本から顔を上げて、壁に掛かった時計を見れば、いつの間にか十二時を回っていた。ついつい時間を忘れて物思いに耽るのは俺の悪い癖だ。ぼんやりとそう考えながら、腰を上げる。その瞬間、ある直感が青い閃光となって俺の脳を走り抜けた。

——例の呪術師の男が、動き始めた。

腰を浮かせたまま、俺は身動きを止め、目を閉じて精神を集中する。

男の現在位置を感知する。男は北へ向かってかなりの速度で移動していることが解った。移動手段はおそらく、飛行機か、新幹線だろう。

俺は瞳を半眼開くと、精神の集中を維持したまま、ゆっくりと立ち上がり、バツクの中から地図と赤ペンを取り出した。

俺は頭の中で計算して男の大体の位置を予測しながら、地図の上に赤い線を引いて、位置の移動を記していく。

男はこの一週間、東北地方に留まったままで、移動はなかった。それが、突然動き出した。

男は、自分が常に動向を監視されていることに気付いているはずだ。だが、この呪術による『マーキング』は、俺から男に対しての一方的なものであり、男の側から俺の現在の居場所を特定すること

はできない。

男は監視されていることを知っていながらも、その敵がどこに居るかは把握できない。しかし、俺の家の住所は、男に既に知られているし、俺も元々男から隠れようとは思っていなかった。だから、この『マーキング』の目的は、あくまでも相手の出方を知る為だった。俺が夏休みの初めに遠隔的な呪術によって男に与えた毒は、いまだ致死量には届かないが、しかし少しずつその影響が見え始めてきた頃だと思う。

原因不明の肉体の痛み、精神の不安定——それらが、徐々に男を蝕み始める頃だ。

そろそろ男も、何か手を打ってくるはずだが、今のところ、俺に対する牽制攻撃も、解呪の試みも、男は行っていない。

——男の移動は依然として止まらず、北へ北へと動き続ける。

次第にペンを持つ腕が震えていき、額から落ちた汗が地図の上に無色の染みを点々と作っていく。

赤い線が地図の上に引かれて、ゆっくりと伸びていく。その先にあるのは——。

第二章 七

その時、庭から、車のタイヤが砂利を踏み砕く音が聞こえてきた。その音に混じって、男の気配が身体にひしひしと伝わってくる。

それは、俺の心にわずかに残っていた希望を木っ端微塵に打ち砕き、過酷な現実を突きつけてきた。

「……嘘だ」

乾いた唇が震えながら紡いだその言葉が、静まり返った部屋に空しく響き渡る。

庭に面する窓の向こうで、一台の車のヘッドライトの光が、庭園の周りを迂回して、暗闇の奥へと消えていくのが見えた。

……男がここへやってきた。リムジンに乗って、堂々と。その事実が示すもの、それは一つしかない――。

汗を吸って柔らかくなった地図が、俺の手の中でぐしゃりと音を立てて、ただの紙屑へと変貌する。右手で掴んでいたペンは、力を加えられるあまりに、徐々に机の表面に減り込んで先端から潰れていき、その赤いインクが血のように滲み出ていく。

俺は呼吸を止め、そのまま数秒間、目の前の机を睨んだまま身動きをしなかった。額から汗が垂れ、机の上に斑点を作っていく。

「ぐっ――」

俺は短く息を漏らして、右腕を勢い良く振り上げた。目を全開に開くと同時に、拳を机に叩き付けた。机の端に置いてあったコップが跳ね、水が畳の上に散開する。

そのまま何度も机を殴った。

手の甲の切れた皮膚から血が溢れ、いくつもの細い筋を描き、滴り落ちる。

――嘘だと、信じたかった。

しかし、現実に目を瞑ることは俺には許されなかった。

もし今この瞬間に、冷静に目の前の現実を受け止めようとしなけ

れば、今まで俺がしてきた事はすべて無駄になってしまつのだ。

けれど、この事実を受け入れる事は俺には断じて無理だ。どうしても、俺は希望に縋ることを諦めきれない。

だから、俺は、断固として現実を否定しようとする自らの心を、冷徹の刃で切り捨てることにする。

頭の中で、絶叫が響き渡つて一向に止まない。叫びを発しているのは俺の心だ。俺はその心を、黒いヴェールによって幾重にもわたって覆い、その心が発する叫びを強制的に聞こえなくさせる。

俺は自らの心を削り落として、再び冷静さを取り戻した。ゆつくりと顔を上げると、立ち上がつて窓の外の蒼い闇を見つめる。

窓ガラスに映つた俺の眼は、赤い光を宿していた。今の俺は、憎しみの想いに操られる、ただの傀儡人形だ。だが、この憎悪は俺のものではない。これは、俺の大切な人達が生前に抱いていた想いだ。この想いがある限り、俺はまだ復讐を遂行することができる。

頭の隅に残つた少しばかりの理性で、そう考える。

——眼前にあの男がいる。

その事実を反芻すると、興奮が全身を伝わって頭に這い昇つて来る。

これから俺は男と接触する。もし男が俺の両親を殺した仇だつたとしたら、その仇を前にして俺が成すべき事は一つしかない。

——その肌に牙を食い込ませ、その骨を微塵に砕き、その血に毒を流し込んでやろう。

今まさに、俺は敵を『蛇咬』せんとしていた。

窓から視線を外すと、俺は水浸しになつた畳を見下ろして、その前にしゃがんだ。

畳の上で薄く広がっている水に、血みどろの右腕を浸す。濁つた水が、畳の隙間に吸い込まれていく。

その時、俺のいる客室の前を数人の足音が通り過ぎ、それに混じつて使用人の話し声が聞こえてきた。どうやら、『一馬様』——頭首代理のお帰りらしい。

俺は立ち上がり、バックの上に載せてあった紺のハンカチを手に取り、右手に巻いた。そのハンカチに残っていたわずかな温もりに、一瞬身体が震える。

「……綾華」

頭の中に残っている彼女の笑顔が唯一、俺の精神を繋ぎ止めていた。

綾華の純白の笑顔と、黒く汚れた憎しみだけが胸の中を漂っている。俺は相反するその二つを寄る辺として抱き、復讐の道に自らを放つことを決心した。

客室を出ると、照明がわずかしくなく薄暗い廊下を、人の声がする方向へ歩いていく。訳もなく焦りが募ってきて、歩調が自然と速くなる。俺は、歩を進めながら、現状を整理し始めた。

男は十二時頃に、突然北へ移動を始めた。そして、二時間前、北海道に降り立ち、ついさつき、男はこの水西家に到着した。

男は間違いなく、俺が水西家に滞在中である事を掴んでいる。それで、こうして、俺の前に突如姿を現すという強硬手段に出た訳だ。……それだけなら、まだ良かった。俺は最初、男はこの家の高い塀を飛び越えて侵入してきた、家の者に気付かれぬよう闇に溶け込み、俺の前にひっそりと姿を現すのかと思った。

だが、違った。男は水西家の門を堂々と潜って屋敷内へ入ってきた。それはつまり、男が水西家の関係者——いや、水西家の血筋の者であるということだ。

これでやっと、男の素性がはつきりした。男の名前は、水西一馬。水西家の頭首代理にして、強力な呪術師でもあり、綾華の従兄だ。……俺は、信じたくなかった。水西家が、あの事件に関係しているという事を。

こうして自分の素性を易々と俺に知らせた奴の意図が、解らない。だが、奴のこの突発的な行動が、俺に対する精神的な攻撃として、十分に作用したことは確かだ。

水西一馬は、今までずっと監視してきたはずだ。自分の従妹であ

る綾華と兄弟のように接する俺の姿を。

俺が綾華と親しい間柄である事を知っていれば、俺の精神に多大なダメージを与えることが容易いことが、すぐに解る。

だが、それが一体、何になるというのか。

……もし戦闘になった場合でも、俺に勝てる自信が、奴にはあるのかも知れない。

今この瞬間の為に、俺は今までどれだけ準備をしてきたことか。その準備が全く齒が立たぬほどの切り札が、あいつにはあるというのか。

「……確かに、その可能性はある」

ここは水西家。奴の本拠地だ。この土地、もしくはこの屋敷に何か秘密が隠されていてても可笑しくはない。というより、絶対にあると考えていた方が良さだろう。

それ以外の理由として考えられるものを挙げれば、単純に、何か話し合いをつける為に来たのかもしれない。もしそうでないのなら……俺を困惑させることを楽しんでいるのかもしれない。

あの日に目にした、奴の嘲笑が脳裏に浮かんた。

俺は舌打ちをつくと、思考を断ち切った。

……考えても仕方がない。俺にだって秘策ならいくらでもあるし、この際、直接会って奴の意図を確かめてやる。

俺は歩きながら、呼吸を落ち着かせ、無心になろうとするが、頭に奴の嘲笑が浮かんて一向に消えなかった。

それを取り払おうとするが、しつこくそれは脳裏に張り付いてくる。

俺は耐え切れなくなって、思わず左腕を払って廊下の壁を殴りつける。その衝撃で壁の板が減り込むと同時に、腕が激しく痺れ、大きな痛みが身体を縛り上げ、俺は足を止めた。

激しい痛みによって、その目障りな表情は強引にかき消された。

……こんな八つ当たりをするなんて、俺の精神は相当錯乱しているんだな。

ふとそう気付くと、思わず笑いが込み上げてきた。

声が聞こえてくる方向へひたすら歩いていくと、廊下に張られた窓ガラスの向こうに、中庭が見えた。中庭のさらに奥の方へと目を凝らすと、別棟と母屋を繋ぐ外廊下が見えた。女性の使用人達が、外気に晒された屋外の廊下を渡って一直線に別棟の方へと歩いていく。

その女性達から視線を外し、彼女達の進行方向にある別棟の戸口を見やる。別棟の、外廊下へと続く戸口の前に、男性の使用人が数人、自分達の方へ近づいてくる女性らに顔を向けて、待機している。男性の一人が、「早くこちらへ」と少し大きな声で叫んだのが、俺の歩く廊下の先にある、外廊下へ続く戸口を通って、こちらまで響いてくる。

男性達が立っている別棟の戸口に視線を据えながら、俺は足早に外廊下へと向かった。

すると、外廊下へと続く戸口の前に一人、見覚えのある女性使用人が立っているのに気付く。この家に到着してすぐ、俺に庭園を案内してくれた女性、園田さんだ。彼女が俺に気付き、顔を振り向かせる。

「智也君……？」

園田さんが驚いたように声を上げる。何故ここに、とても言いたげな目で俺を直視する。

俺は彼女の視線を無視すると、そのまま戸口を通って外廊下へ足を踏み出そうとする。

「ちよつと……何してんの、智也君！」

右腕を掴まれ、身体が後方へ引く。俺は舌打ちをすると、腕を掴んでいる彼女の右手首を、自由な方の手で掴み、強引に引き剥がした。

「邪魔するな」

蛇眼で強制的に彼女の身体を凍りつかせる。すると、彼女は口を半分開いたまま、身体を震わせて木偶の坊のように立ち尽くす。

苦しそくに喘ぎながら、俺を見つめる彼女の姿に、俺の理性が再び蘇る。

「ごめん、違った。……『眠ってくれ』」

命令の誤りに気付いた俺は、即座にその内容を変更し、新たに命令を下した。園田さんはその瞬間に気を失い、身体は人形のように地面に崩れ落ちる。俺はすぐに手を伸ばして彼女の身体を支え、ゆっくりと廊下の床へ横たえた。

それが終わると、俺は立ち上がって、再び外廊下へと向き直った。そして、その光景を目の当たりにし、一瞬息を飲んだ。

外廊下を歩いていた女性達、そして、その先に立っていた男性達が、一斉にこちらに顔を向けて、微動だにせず、俺を見つめていた。その眼光は、まさに獲物を発見した鷲のようだ。

彼らは俺の呪術を目の当たりにして、俺のことを敵と判断したらしい。

プレッシャーに、足が怯みそうになるのを必死に堪えて前を見据える。

俺は外廊下を、一步一步踏みしめるようにゆっくりと歩き始めた。一層鋭くなる鷲達の眼光に対抗するように、俺も蛇の紅い眼光を目に宿して、彼らに迫る。

外廊下のちょうど中間に佇んでいた女性達が、正面に構えて俺を見据え、何か異国の言葉を呟き始めた。これは……ロシア語、か。「やっぱり使用人は全員霊能力者か」

俺は声高く笑いながら、左腕を垂直に上げる。服から出てきた白蛇が、腕に螺旋状に絡み付き、頭を平行に前へ出して威嚇する。

その時、あの気配が廊下の先から迫ってくるのを感じた。俺は身体をびくりと震わせて、立ち止まる。

女性達も呟くのを止め、後ろへ振り返り、別棟の方向を向く。

男性達も、戸口の前から身を引き、廊下の端へ並列する。

戸口の扉が、錆びた鉄の軋む音を甲高くたてながら、ゆっくりと開く。その音は、まるで少女の悲鳴のように甲高くて、夜空へ吸い

込まれるように消えていった。

扉が開け放たれた戸口に、薄い蒼の月光が注がれ、一つの影が浮き上がった。

腰まで届くほどの長い黒髪。長身で肩幅のある体躯に、スーツを纏っている。

その長い影は、コツコツと革靴の音を響かせながら外廊下へ降り立つ。そして、数秒間、じっと俺を見据えるように顔を正面へ向けたまま立ち尽くした。

遠くてはつきりとは見えないその顔を、俺は食い入るように睨みつけながら、同じようにじっと立ち尽くす。

男が片足を前へ踏み出し、再び靴音を響かせながら、ゆつくりと外廊下を渡り始めた。男が一步を踏み出す度に、その長い髪が、男の背中を撫でるように左右に揺れる。

俺は緊張で頬が強張るのを感じながら、垂直に上げた左腕を下ろし、その腕に蛇を絡み付かせたまま、外廊下をゆつくりと歩き始めた。

二つの足音が、灰色の石床に伝わって廊下に響き渡り、中庭へ分散していく。

俺と男は前へ歩を進める中、互いの顔を直視する。その鋭い視線の交差は、息が詰まるほど激しく、俺の喉から荒い呼吸音が漏れて空気を裂く。

女性達は外廊下の中間位置に立ち尽していたが、男――水西一馬が近づいてくると、何も言わずにその場から退き、道を開けた。水西一馬は、女性達が立っていた場所に来て、止まった。俺も、眼前の男を見上げながら、そこに近づいて立ち止まる。

ようやく男の顔の全貌をはつきりと捉えることができた。鼻が異様に高く、一見外国人かと見間違う。

その顔は、月明かりを全面に浴びているせいだろうか、驚くほど青白かった。生きている人間の顔ではない。死人のそれだ。

俺は無言で男を見上げながら、殺意を滲ませた視線を、男の黒く

澀んだ瞳に向かって放ち、突き刺さんとする。今にも飛び掛つてその心臓を食い千切つてしまいたい——そんな、獣のように野性的で憎しみに満ちた想いを必死に抑え込みながら、ただじっと、男と視線をぶつけ合う。

額から汗が浮かび出て、顔の上を滑り落ちていく。

……何故、そんな瞳をしている。

男の瞳は、悲哀一色に染まっていた。

俺は、男へ向ける視線を一層尖らせて敵意を示してみた。だが、その一方で、胸の内では大きな動揺があった。

……お前に呪いを刻み付けた人間が、今、目の前に立っているんだぞ。なのに、何故そんな目を――。

男の顔には、以前対峙した時のような嘲笑も、呪いを身体に刻まれたことへの憤怒も、全く表れてはいなかった。男はただ、無表情のまま、その悲しそうな空虚な瞳で、俺を見下ろしているだけだった。

男へ殺意を向けても、それは受け止められることも、打ち返されることもなく、空しくすり抜けていくばかりだ。

……何なんだ、お前は。

怒りが込み上げてくる。両親が殺されたあの日、俺は記憶を消され、あの凄惨な事件のことを忘れた。だが、その日に俺が抱いた激情だけは、欠片も失うことなく胸の内に残っていた。だが、眼前にいる男は、俺を見ても、全く動揺はない。何の感情も湧き上がることはない。

男の瞳の奥で揺らいでいる悲哀の念は、事件を思い起こした為に生じたものではない。男は全く別のことを想って哀しんでいる。俺の記憶にある、以前の男の印象と比較してみると、まるで別人だ。以前、この男を見上げた時、この男との間に大きな隔たりを感じた。俺がどんなに足掻こうと、越えられない壁を感じた。

男は、俺の事など、鼻から気にしていない、眼中にない。あの事件も、男にとっては、過去に処理した一つの『仕事』でしかないの

だ。

「ふざけるな」

俺は奥歯を噛み締めながら、荒い息遣いと共にその殺意の籠った
呟きを漏らす。俺のその呟きは奴に届いたのか、

「……加賀智也。また会ったな」

固く閉じていた口を微かに開かせて、男がぼそりと抑揚のない声
で呟いた。

その一言が、俺の頭に重く響いた瞬間、あるうことか、俺の心の中
にあった怒りや動揺はすべて消え失せ、代わりに恐怖だけが俺を
取り囲んだ。身体のコから凍りつくような感覚に襲われる。

男の瞳は、先程までの悲哀の色を消していた。そして、眼の奥に、
黒々と燃え盛る炎を再び宿していた。無表情であったはずの男の顔
には、にやりと不気味な笑顔が浮かんで、俺を嘲笑うように見下ろ
している。

俺は奴の視線に精神を貫かれ、身動きが出来なくなった。

——こいつは、本当に人間なのか。

男の威圧感が、脳裏を真っ白に染め上げる。このまま白い靄に意
識を包まれ、この現実から逃れてしまいたい衝動に駆られる。だが、
恐怖が俺を現実へと引き摺り戻し、遠のきかけた意識が再び鮮明に
蘇った。

男がもう一度口を開いて何かを言おうとする。

——その時、俺は予感した。大切なものが、粉々に潰されるその瞬
間が、眼前に迫っていることを。

第二章 八

殺し合いになることを覚悟していた。だが、予想に反し、水西一馬は使用人に、俺を客室に案内するように言い渡した。

そして、二人だけで対談することを提案した。事件の真相を聞き出したかった俺は、いいだろう、と頷いた。威勢良く言ったつもりだったが、その声は、自分でも驚くほどに、震えてか細く、弱弱しかった。男は俺の声を聞くと、眼を大きく見開き、唇を吊り上げて笑った。

その嘲笑が、目に焼き付いて離れない。

「こちらです」

中年の女性が、客室の襖を開けた。その使用人の顔を見て、少し驚く。

俺を客室まで案内していたのは、水西家に着いた初日、俺が玄関の前で白蛇を屋敷内に放とうとした時に、それに気づき、この一週間、俺を監視し続けていた、あの水瀬 杜枝という使用人だった。すぐ目の前にいたと言うのに、全く気が付かなかった。

「智也様」

俺が険しい視線で睨んだまま立ち尽くしていると、水瀬は視線を逸らして客室に向けながら、無表情で促した。

……落ち着け。

俺は軽く頭を振ると、客室へ入った。八畳ほどの和室で、中央にぽつんと長机が置いてあるだけで何も無い。

長机の前に敷かれている座布団の上に正座する。襖が閉められ、客室には俺一人だけが残されて、夜の静けさが部屋を覆う。

目を閉じて、深呼吸を繰り返す。

感情に任せて行動しても、それはただ、最悪の結末を招くだけだ。今はとにかく、落ち着く事が最善の選択だ。

俺の左腕に絡み付き、時折身を捻らせて動いていた白蛇が、する

すると俺の服の中へと戻っていく。ちょうどその時、襖が開く音がして、目を開く。

「待たせたな」

水酉一馬が、静かな声音でそう言い、無表情で客室へ入ってきた。長机を挟んで、俺の真正面に座った水酉一馬の顔は、先程のような嘲笑を浮かばせてはおらず、真剣な目つきをしていた。

……まるで別人を相手にしているような気分だ。

男の態度や表情が突然切り替わる異様さに、俺は言いようもない恐怖を抱く。

数秒間、お互いに相手の顔を正面に捉えたまま、視線を交わした。沈黙を破ったのは、男の方だった。

「その目……昔と全く変わっていないな。俺を食い殺そうとする目。さすが加賀家の跡取り息子だけあって、執念深いな」

「そうだ。この八年間、あの事件を忘れたことは一時もなかった……」

「さあ、聞かせてもらおうか」

俺が単刀直入にそう言うと、途端に水酉一馬は、先程の嘲笑を顔に取り戻し、俯いて、肩を震わせて笑いを噛み殺した。

「一体何を話せば良いのか」

「事件の真相をだ」

男の声を掻き消すように、俺は強く言い放つ。

「まず、加賀治也と加賀智を殺害した人物の名を明かせ」

男の顔を食い入るように見ながら、そう言う。

男は薄ら笑いを浮かべたまま、黙っている。俺は舌打ちして、続ける。

「俺はお前に記憶を奪われ、昏睡した。再び目を覚ました時には、二人の死体は消え、玄関に広がっていた血は、跡形もなく綺麗に消え去っていた。……お前が処理したんだろ？」

俺の問いに男は答えず、

「どうやって、記憶を取り戻した？」

と逆に質問を返してきた。

「それは愚問だな。方法ならいくらでもある」

男は、「確かに」と口を曲げながら呟く。

少し間を置いて、

「水酉家の、事件との関与を明かせ」

と、俺は依然として怒気を含んだ声で言った。

男は黙ったまま、顔を伏せ、口元を曲げている。

その男の顔を見た途端、一瞬我を忘れた。俺は立ち上がると、机を足裏で男の方へ蹴り飛ばした。

机の端が、伏せていた男の頭に、鈍い音を立てて、勢い良くぶつかる。男は肩を跳ねて、大きく後ろに仰け反って、仰向けに倒れた。「言え」

俺は目を全開に見開きながら、男を見下ろし、低い声で静かに言った。男は自身の頭に片手を当ててさすりながら、俺の言葉を嘲笑うように、くぐもった笑い声を漏らしている。

俺は、拳を握り、奥歯を噛み締める。

前歯が突き刺さって唇から溢れた血が、渴いた口の中に滑り込んでいく。

それを飲み干し、俺は「そうか」と小さく呟く。

「なら」

俺は左腕を伸ばし、その指先を男の額へと向けた。その途端、男が目を見開いて瞬きを止め、押し黙った。男の手が、自分の首へと持つていかれる。男の首は、血管が浮き立ち、痙攣していた。それを、男の伸ばした指が上から押さえてさする。

「苦しいか」

俺は、自身の首を掴んでうめく男を、顎を上げて見下ろし、鼻息をこぼしながら笑う。

男は、忙しない呼吸音を漏らして、震える両手を首に重ねたまま、大きくなった目で俺の顔を捉える。身体を苦しげにくねらせながらも、男は顔に嘲笑を張り付けたままだった。

俺はそれに気付くと笑うのを止め、唇を引き結んだ。そして、懐

に手を入れ、白蛇の首を掴んで、その長い身体を引き出した。そのまま蛇を男の方へと投げる。蛇は、男の身体の上へ降りると同時に、一瞬で四方から身体に巻きついた。

蛇が何重もの縄になって、男の身体を頭から足先まで、縛り上げる。真つ白でなめらかな蛇の美しい体躯とは対称的に、スーツが捲れてあらわになった男の腕は、蛇のうろこが触れた部分から次第に青く変色していく。

「さあ、言え」

俺は男を睨みつけながら脅すが、男は青白い唇を笑わせながら押し黙ったままだった。

俺は、そうか、と再び同じ呟きを漏らし、俯いた。

そして、

——やれ。

そう念じた瞬間、男が腹を強く圧迫され、一際大きく呻いた。それから何度も、立て続けに、蛇が男の身体の圧迫を繰り返し、その度に男が喉から呻き声を漏らした。

畳に、男の吐き散らした血の混じった唾液が、点々と滲んでいる。それを見ながら、

「言え」

と、小さな声で呟く。だが、男は何も言わない。俺は歯を強く噛み締めながら、「何故、お前は」と呟いてから一瞬押し黙った後に、
「……抵抗しないんだ。お前なら、こんな呪術、すぐに解けるはずだ」

蛇が舌を素早く動かしながら、男の顔の、間近に迫り、石のように固定された視線を男に投げかける。男はただ、それを空虚な目で眺めて、弱弱しく息を吐いている。その小さな息が、室内の冷たい空気に、微かな白い煙となって男の口元から上がって消えている。

そこで、男が初めて口を開いた。

「もうあの時とは違う。お前を傷つけると、悲しむ人がいるからな」
その呟きは、辺りに響いて消えた後も、俺の頭に長く木霊した。

さっきの、男の哀しみに満ちた目が、再び脳裏に蘇った。男が抱く悲哀の想いは、男が今口にした、その人へと向けられたものなのだ、反射的に解った。そして、男がその人物の事を氣遣うあまりに、俺に呪術の矛先を向けることができずにいることも。

その人物とは。

俺の頭の中で、思考が瞬間的に駆け巡った。青く、赤く、記憶や思考が光を放ち現れ消えていく。その眩い閃光の彼方に、ある人物の、優しげで、子供のような笑顔が浮かんだ。

男の身体から、蛇がするすると解かれていった。男から離れた白蛇は、真っ直ぐ俺の足元へと這って来て、足首に絡み付いた。

額から汗が、ぽつぽつと畳の上に落ちていく。その中で、俺は、「その、悲しむ人とは、おばさんのことか？」

と、足元の、濡れた畳に目を落としながら、唇を震わせ呟いた。

俺は顔を上げて男を見るが、男は俺の言葉に頷かなかった。だが、頷かなくとも、俺は哀しげな男の瞳を目にし、真実なのだすぐに直感した。

「くそ……」

俺は涙が溢れてきた目に手の平をかぶせ、拭った。そして、その手を滑らせて額に当て、前髪をくしゃりと掴んで俯いた。

——おばさん、嘘だろ。

蛇が足首から這い上がり、俺の首の周りに絡み付く。小さな頭が、氣遣うように、俯いた俺の顔の近くまでやってきて、長い舌をちらつかせる。

俺は、垂れ下げていた方の手で、蛇の身体を撫でながら、

「そつだったのか……」

と、呟き、力の限りに齒を噛み締め顎を震わせた。

……この可能性があることは、男が水西家へ到着したその時点で既に解っていた。だが、俺は、大切なものを失いたくないという、懇願にも似た強烈な欲求に、頑なにその可能性を否定していたのだ。

事件に水西家が関わっているということは、頭首になるはずだっ

たおばさんも深く関係している可能性が高い。そして、その配偶者にあたるおじさんも、だ。

水西翼という、綾華の祖母にあたる前頭首や、今、眼前にいる水西一馬。この二人は完全に事件に関与していると言い切れる。

おばさんは、水西家と縁を切った。

それはおそらく、綾華の為を想ってやったのだろう。おばさんとおじさんは、危険な仕事を生業としている、この水西家から、綾華を引き離したいと思ったに違いない。

けれど、それを頭首が簡単に許すはずがない。縁を断つという申し出に頷くのと引き換えに、何か大きな条件を提示してくるはずだ。その大きな条件とは何か。それは間違いなく、――。

そこで、強制的に思考を断ち切った。その事実を思い浮かべたら、それだけで、俺は本当に大切なもののすべてを失うことになるだろう。

……四人で過ごした、今までの日々は、すべて嘘だったのか。

俺は前髪を掴んだ右腕で顔を隠し、肩を震わせながら、心の内で、誰ともなく疑問をぶつけた。

おばさんとおじさんは、頭首に提示されただろう、その『大きな条件』を完遂させた後、後始末として、殺された加賀治也、加賀智の息子を長期にわたって監視することをさらに要請されたのだ。監視を行う理由として、考えられるのは様々だが、はっきりしていることは、水西家は、あの事件と関与しているが為に、俺を監視しなければならぬという、単純明快な事実だ。

二人は、頭首から提示された大仕事を見事遂行し、晴れて水西家と縁を切ることに成功し、愛娘を連れて、関東へ飛び、そして加賀家の隣に一戸建てを構えて引っ越してきた。

二人は、俺に、家族のように親しく接するように偽り、実は近接した位置から目標の監視を行うという、効率的な方法を取って、俺の監視を継続してきた訳だ。

水西家が事件に関与している事実が、確定的になった今、二人が

監視を理由に俺に近づいてきたのは間違いないだろう。二人が綾華を連れて引越してきた時期や、水西家の事情などを考慮すれば、もう疑いようもない。

俺は愚かだ。騙されているとも知らず、彼らの輪の内に入り、本当の家族の一員になった気でいた。

……人は、人を、簡単に騙せるもんだな。

俺は濡れた唇を曲げて、笑った。口の中は、血と塩の味でいっぱいだった。

俺は愚かだ。最も近くにいた彼らが、最も憎むべき存在であったことに全く気付きもしなかった。

「……愚かだ」

……こうして、真相を知ってなお、彼らの笑顔を信じようとしているのか、俺は。

「加賀智也」

突然、水西一馬が掠れた声を上げた。泣き顔を晒すまいと覆っていた、右手をわずかに開かせ、開いた指の隙間から、男を見据える男は、机に片手をついて身体を支え、よろけながらゆっくりと立ち上がった。

「お前は、大切にされている。これだけは本当だ」

その抑揚のない声に、俺は目を見開いて、青ざめた男の顔に見入った。

俺は、よりにもよってこの男の言葉に、一瞬でも安心感を抱き、それを信じようとした。

「お前から、慰めの言葉が聞けるとはな」

俺は唇をわずかに吊り上げて笑いながら、目を閉じて、溜まった涙を右手で拭う。そして目を開けると、男がいつの間にか、眼前に立っていた。

俺の視線が、男の右手に注がれる。男は拳を握っていた。

何をしようとしようとしているのか、俺の頭が理解する余裕もないままに、男は一瞬で、その拳を振り上げた。

避ける間もなく、肉を打撃される鈍い音とともに、頬に大きな衝撃が走った。

身体が後ろに傾き、障子へと突っ込む。障子の格子が外れて、俺は後頭部を窓ガラスへとぶつけて、呻く。

「いくら呪術を使わないように、と言いつ聞かされていても、これだけされて、何の制裁もないのもおかしいからな」

水酉一馬は、殴った拳にぱっくりと開いた傷を口に当てて舐めながら、にやりと笑って呟いた。

俺は後頭部に両手を当て、痛みを堪えながら、顔を俯かせて笑った。そして、「なぜ、お前は……」と、ゆっくりと口を開いた。

「……ここへ戻ってきたんだ。俺が滞在している間、あのまま東北に身を潜めていれば、俺に水酉家の事件との関連性を知られることもなかっただろう」

すると、男は返す。

「あの人に、予定通り帰るように言われたからな。お前が真実を知ろうとするなら、それを止めるな、と言われてはいたが、俺は鼻からお前に話すつもりはない」

俺は、そうか、と呟き、立ち上がった。腕に付いていた障子の切れ端を取り、視線を下げながら、俺は言う。

「頭首代理。この度は、一週間にもわたってこの家に滞在させてもらい、感謝しています」

無機質な声で滞在の礼を言うと、俺は襖へ向かって歩き始めた。

しかし、男とすれ違う際に、唇を吊り上げて「だが」と呟き、

「今は客としておとなしくしているが、俺は、貴様をいつか、殺すだろう」

と、襖の前に立って、後ろにいる男に向かって振り向かずと言った。

一瞬、間があった。

「……お前とは良い友達になれそうだ。殺し合いをする上において、だがな」

男の、その楽しそうな声音に、俺は低い笑い声を漏らした後、部屋を出た。

第二章 九

俺は水酉一馬との対談が終わると、部屋に戻り、崩れ落ちるように布団に横になってそのまま眠った。

窓から日が差す頃に目覚めると、この一週間の習慣通りに、朝の仕度を早々に済ませ、朝食へと向かった。先に着いて、俺の来るのを待っていた綾華が、おはよう、と笑顔で声を上げると、俺は一瞬表情を消した。が、すぐにおはよう、と顔を見ずに挨拶を返し、隣の席に着いた。俺は入念に毒見をしてから、食事を始めた。食事中は、綾華も俺も、終始無言だった。俺が、会話を寄せ付けない雰囲気을明らかにしていた為か、綾華は数回口を開こうとはしたものの、何も言えずに押し黙ってしまうのだった。

朝食を済ますと、当初の予定通りに、ここを出発する準備を始め、俺は荷物をまとめると、それを無表情な使用人らに荒っぽく手渡した。

綾華は昨夜のうちに仕度を終えていたらしく、先に外へ出てるかと、使用人に、俺へのことづけを頼んでいた。

俺は、それを聞くとすぐに玄関に向かった。玄関の石畳の上に、既に揃えて置いてある自分の靴を無造作に履くと、玄関の左右に並列する使用人に、軽く頭を下げて挨拶し、歩き始めた。

使用人達は、目の前を通り過ぎる俺を、黙って見送ってはいるものの、その視線は明らかに俺を蔑んでいた。

俺は視線を正面に向けながら、そのまま脇目もふらずに早足で外に出た。

外に出ると、朝の微風が、汗ばんだ手の内を、冷たくすり抜けていく。

俺は、髪がさらさらと風になびくのを感じながら、伸びた前髪を指で一掴みし、それを横に撫で付ける。そして、顎を上げて透き通った空を見上げた。

空の色は限りなく白に近かったが、薄い青が、最後の抵抗とでも言わんばかりに、各所で薄く混じって必死に広がるうとしている。

俺は、それを見て、わずかに唇を開いた。そこから白い吐息が漏れ、顔に吹きかかり、散って消える。

——こうやって、大切なものは、薄く掻き消えていくんだな。

白色の空に混じっている薄い青を目に映しながら、俺は、口の中で小さく呟く。その言葉は、吐息と共に霧散していった。

と、じつと立ち尽くす俺の肩に、そつと手が置かれる優しい感触がした。振り向くと、背後に、力ない微笑を浮かべた園田さんが立っていた。

俺は昨夜のことを瞬間的に思い出し、彼女の顔から目を逸らした。すると、園田さんは、

「智也様。ご案内します」

と、俺の前を歩き始めた。俺は、きびきびと歩くその背中を見て、小さく息を吐くと、すぐに後を追った。

この家に到着した日、庭を案内された時のように、並んで歩く。

「昨日のことだけど……」

園田さんが呟き、俺の顔を見るのがわかる。俺が何も反応を返さずにいると、園田さんは前に向き直り、

「本当に驚いたわ。あんなことできるんだ、人間って」

と、さらに小さく呟いた。園田さんの腕が震えていることに気付くと俺は、

「こうして近くにいただけで、怖いだろ」

と静かに言った。

視界の隅で、園田さんがわずかに頷くのが解った。

「怖い。正直言って、あなたが人間だと思いたくない。幽霊かなんかじゃないの」

震えてか細くなった声で、園田さんは言い放つ。俺は目を伏せて唇を笑わせながら、

「残念ながら、人間だよ。昨日、君に使ったのは呪術だ。幻でも何

でもない、現実の出来事だよ」

皮肉を込めた俺の言葉に、園田さんは唇を引き結びながら振り向き、

「嘘つき」

と、呟いた。その憎しみの籠もった言葉に、俺の心臓は大きく脈打って、胸が締め付けられるように痛む。俺は目を伏せ、苦し紛れに、乾いた笑い声を漏らす。すると、園田さんは、逆立てていた眉を途端に緩ませ、表情を悲しそうに歪めた。そして、「ごめん」と一言呟いた。俺は足元に転がっていた小石を、無意識のうちに踏み潰し、

「謝る必要なんかない。嘘だと信じた方が賢明だよ。こんな世界に飛び込んだら、寿命を削られるだけだ」

と、言葉を返した。そこで会話は途切れ、沈黙が続く。門が見えてくる頃になって、右手で拳を握り締めていた園田さんがようやく、その、血色のない白い唇を動かす。

「同僚の今朝の様子を見れば、昨夜、何か大変なことがあったのはすぐにわかったわ。智也君が、やったんでしょ？」

彼女の張り詰めた声に、俺は、

「やったよ」と抑揚のない声で小さく呟く。園田さんは伏目がちに視線を下げ、大きく息を吐いて白い靄を顔の前で放散させると、

「昨夜に何があったか、私には理解できないけどね、それで智也君を嫌いになった訳じゃないわ。……むしろ、好きよ。智也君がここに来た初日、秋音の前で私のこと、かばってくれたでしょ。あれで良い人なんだってすぐに解った。秋音がね、ずっとそのことをばやいていたんだけど、すごく嬉しそうに笑ってたわよ、あの子」

園田さんは覇気のない笑みを浮かべ、淡々とそう語った。

『秋音』とは、きつと寡黙な女性の使用人、水沢さんのことだろう。

だんだんと門に近づくにつれ、隣で歩く園田さんの息が荒くなつて、口から漏れた音が、直に俺の耳へと響く。

俺は、前方を見据えていた目を、園田さんへ向けた。すると、園田さんも反射的に俺を見た。目が合った状態で、園田さんはふと立ち止まり、それに続いて俺も止まる。

「これ」

先程からずっと握り締めていた右の拳を、園田さんは開かせ、その手の内にあつた折り畳んだ紙切れを手渡した。

受け取って開くと、携帯電話の番号と、メールアドレスが、ピンク色の細い字で中央に書き記してあつた。隅に、小さく自分のフルネームを書いてあるのに、思わず微笑んだ。

「相談したかったら、いつでも連絡して。せつかく知り合いになれたんだし、これっきり、っていうのも悲しいから」

園田さんの頬はわずかに緩み、笑みに少し明るさを取り戻したようだった。俺はそれを見て、それまで無意識のうちに身体を縛っていた緊張が、ゆっくりと暖かく溶けていくのが解つた。

「来年も、綾華さんと一緒においでよ。私、」

——楽しみに待ってるから。

とでも、園田さんは言おうとしたのか。園田さんの言葉は、俺の「もう、来ることはないな」という、冷たく言い放った言葉でかき消された。

園田さんは視線を下げ、「そう」と寂しげに笑って頷いた。しかし、すぐに表情を明るくし、

「じゃあ、『北海道』に遊びにおいで。私、休暇もらって智也君迎えに行くから」

と、精一杯に笑いながら園田さんは言った。

「ありがとう」

俺は俯きながら目を細めて微笑み、呟いた。

第二章 十

俺と綾華を乗せた車は、空港へと直行した。

俺はシートに身を預けて窓の外の景色を見ながら、出発する前に、あの、水瀬という中年の女性使用人に言われたことを、ぼんやりと思いついて出していた。

どうか、綾華様の傍にいてあげて下さい。

どんな威圧的な言葉を投げかけられるのだらうと、身を強張らせて、目の前にいる中年の女性を睨んでいた。だが、その口から飛び出した意外な言葉に、俺はどう返事をしたらいいかわからず、啞然と、その皺のある膨れた顔に見入った。

「綾華様は、ご自身の大きな悩みを一生、一人で抱えて生きようと決心なされています。けれど、それはあまりにも過酷な運命で、いつか、その運命の重みに潰れてしまいそうになるでしょう。そんな時、智也様がどうか、綾華様に手を差し伸べて下さい。そうすれば、必ず綾華様はその手を握って立ち上げられます」

必死に頭を下げて頼む込む水瀬に、俺は毒気を抜かれたように見つめていたが、すぐに無表情な顔で、「わかりました」と一声言って頷いた。だが、それに続いてさらに口を開き、

「言いたいのはそれだけです。てつきり俺は、綾華に近づくな、って言われるかと思っただけだな。……昨夜のこともあるし。それに、俺の家と、あんたが仕える家は、犬猿の仲だから」

と、俺は相手の反応を窺がうように、視線を水瀬のその血色の悪い顔へと据えながら言った。

すると、水瀬は一瞬表情を陰しくさせたが、すぐに目を細めて笑顔を浮かべ、言った。

「例え、過去に、智也様の生まれた家と、私の仕える水酉家との間に、何かしらの因縁があったにせよ、智也様は綾華様にとっての大事な存在であることに変わりはありません。それに、綾華様だけで

なく、和子様、修一様にとっても、本当の子供と同じくらいに大きな存在です」

水瀬は、胸につかえていたしがらみが解けたとでもいうように、晴れ晴れしい笑顔を浮べていた。それを見ると、俺は胸に罪悪感が湧くのを感じ、目を逸らし押し黙った。

俺には自信がなかった。家族のように親しい彼らを信じる、という、今までには絶対と言い切れるほどあった大きな自信が、昨夜の一晚の間にできた巨大な溝によって抜け落ちて、嘘のように底を尽こうとしていた。

「……だから、智也様もどうか、三人を信じて下さるように、私からお願いします」

俺は耐え切れずに、頭を下げる水瀬に背を向けて、早足で車に駆け寄り、すぐさま綾華の座る後部座席へ乗り込んだ。

背中に、「智也様」と大きく呼ぶ声がかかったが、俺は無視して、ドアを閉めた。そして、俺は、ひどく歪んでいるだろう、自分の顔を、隣で顔を覗き込んでくる綾華から逃れるように、窓側へと寄せ、伏せたのだった。

物思いに耽っているうちに、窓の外の風景は頻繁に切り替わっていき、そして突然、運転手の、到着を知らせる声がかかった。

いつの間にか、車は空港に着き、停車していた。

俺は辺りを見渡してから、隣に座る綾華を見やったが、綾華は俺に視線を返さずに口を閉じたままで、さっさと荷物を持って車から降りた。

それから綾華は無言のまま、トランクを引いて、早足に搭乗口へと向かった。俺も、そんな綾華に、声をかけようとはしなかった。早足で前に行く綾華を、俺の足はゆっくりと大腿に追い続けた。飛行機に乗る際にも、綾華は依然として押し黙ったままで、窓際のシートに二人並んで座ると、やっとのことで俺へ視線を向けた。「どうして今朝、私を無視してたの。今日の智也、すごくおかしい

よ」

綾華は怒ったように眉を曲げているが、その瞳は少し潤んでいて、
縋るような視線を俺に寄越した。

俺はすぐに綾華から視線を外し、首を正面に戻して、前の座席の
背に焦点を置く。

「そうだな」

俺はぶっきらぼうにそう答えて、黙った。すると、綾華は左腕で、
シートの肘掛を荒っぽく叩いた。そして、

「言いたいことがあるなら、はっきり言いなさいよ」

と、怒りを抑えた声で言った。俺は無表情で綾華に振り向き、

「別に、お前に怒っている訳じゃないさ。ただ、意外なことがあっ
て」

と、抑揚なく言った。

「何、その『意外なこと』って」

「言う必要のないことだ」

綾華の言葉に被せるように、俺は少し強い口調で言う。綾華は、
俺の腕を両手で強く掴んだ。

「なんでもかんでも、黙ってればいいって訳じゃない。言いなさい
よ」

爪を立てる程に指に強く力を入れて、俺の腕を掴む綾華に、俺は、
離せよ、と呟いてその腕を引っ張る。

「言いなさい」

「離せ」

俺は立ち上がって、掴まれた右腕を強引に振り上げて、綾華の両
手を引き剥がした。

中腰の体勢で、手に力を込めて掴まっていた綾華は、反動で、シ
ートに勢い良く身体を投げ出された。

俺は無機質な目で綾華を見下ろし、首を微かに振って静かに息を
吐くと、シートにゆっくりと座り直した。

綾華は崩れた体勢のまま、じっと動かずにシートに身を沈め、顔

をうな垂れたように伏せていたが、ふと、「ごめんね」という小さな呟きが微かに聞こえた。そして、間を置いた後に、

「智也、ごめんね」

と、掠れた声ではつきりと聞こえた。綾華の、垂れ下げられた肩は小刻みに震えている。

「せっかく、怖いことが全て終わったと思ったのに、どうして？

……智也が私を嫌いになったのなら謝るよ、ごめん」

俺は反射的に「嫌いになったわけじゃない」と振り向いて言うが、俺の言葉は届いていないようで、綾華は、ごめん、ともう一度繰り返し、震える左手を伸ばして俺の右手を掴んだ。

「嫌いになってもいいから、絶対に離れないで……いなくならないで。お願いだから……」

嗚咽の混じった声で、縋るように、綾華は俺の右手に指を滑り込ませる。

その手の感触は、俺の心に渦巻いていた疑念を麻痺させ、その暖かさに心を委ねてしまいそうになる。

俺は歯を噛み締めて、指から手を離し、その暖かさを拒否した。だが、それでも右手に執拗に綾華の指が絡んでくる。俺は小さく息を吐いた後、その指を握った。

「嫌いになんかなるはずないだろ」

暖かい温もりに縋りたい心と、彼女達を疑う心が同時に渦巻いている。俺は、そのどちらへも片寄ることができずに、その間で葛藤していた。

第二章 十一

北海道旅行から家に帰ってきた俺達は、おじさんとおばさんに笑顔で迎えられた。その日は全員で水西家のリビングに集まって、俺と綾華は土産話を、夜遅くまで飽きずに披露して過ごした。お互いに喧嘩のことは忘れ、楽しい一時に浸ることだけに集中していた。俺はソファーによりかかって、冷えた麦茶の入ったグラスをあまりながら、ふと、この夏休みに四人で海へ行かないか、と提案した。

北海道から帰ってきたばかりなのに、もう次を考えているのか。おじさんはこう言って苦笑したが、おばさんはすぐに目を輝かせて行こう行こう、とおじさんの肩を揺すり始めた。綾華もお母さんが行くなら私も、と賛成したので、おじさんは眉をひそめながらも、仕方ないなと渋々賛成した。

俺はそんな三人の反応を眺めた後に、「俺が全額負担するよ」と一言呟いた。三人の驚いたような視線が、予想通り、自分の顔に集中するのを感じると、俺は口を開いてその意図を説明したのだった。何物にも変えがたい、俺にとって最も大切なもの。

それは、三人との絆だ。

その絆を俺に贈ってくれた三人に対して、俺からも何か贈り物がしたかった。

その贈り物が、今回俺が提案した旅行だった。

いつ壊れてもおかしくないこの絆を祝い、楽しいひとときの記憶を心に刻んで残したい。この旅行は、俺のそんな願いを達成し、そして三人にも恩返しをすることができる、絶好の機会だった。

俺は、今までの感謝の気持ちを込めて、三人に旅行をプレゼントしたいんだ、と語る。

だが、おじさんとおばさんは、半分負担すると言って聞かなかった。しかし、俺が身を引かないので、最後には苦笑交じりに了承してくれた。綾華は俺の隣でじっと、俺の恩返し云々の話を聞いている。

たが、ふと、「智也って、そんなマジな話をよく平気な顔で言えるよね。聞いているこっちが恥ずかしくなるような話を」

と、可笑しそうに笑いながらソファアを立って、台所に向かっていった。そして、冷蔵庫を開いて、顔を近づけて中を覗いている。ライトに照らされたその横顔が本当に嬉しそうだったので、俺は、提案して良かったな、と人知れず微笑む。綾華は旅行に行ってから、行く前の憂鬱そうな様子が嘘のように、屈託のない笑顔を浮べるようになった。俺は綾華の横顔を遠目に見て安心しながら、一方で、その笑顔を崩したのは俺なんだよな、と飛行機での出来事を思い出して胸が痛んだ。俺はふと視線を横へ移し、テーブルにいたおじさんとおばさんを見やった。二人は心から何かを安心していているような、そんな表情で綾華を見ていた。俺はそれを見て、すぐに微笑を顔から消した。

綾華には、俺の知らない『事情』があり、そして、おじさんとおばさんは、俺の知らない『真相』を密かに抱えている。

三人が俺一人を残して、自分達だけが違う場所に身を置いて、取り残された俺を遠くから見て笑っているような、そんな根拠のない錯覚が起こる。

これほど近くにいるのに、三人との間に大きな溝を感じられてならなかった。俺はこの巨大な溝を憎むあまり、おじさんとおばさんを見ながら、無意識のうちに唇を強く噛んで、血の味を口の中に広げていた。

旅行は、綾華が出場する水泳の大会の後に行くことに決まった。大会が迫るにつれ、水泳部の練習も激しさを増し、毎日夕方になると、ふらふらとおぼつかない足取りで帰ってくる綾華を、俺はエプロンを着けて玄関で迎えることになった。大会前日になると、恒例の特製オムライスを、食卓に並べ、綾華の活躍を祈った。翌日の早朝に、俺は綾華を励ましの言葉とともに送り出し、その日の夕方、首を長くして屋敷で待っていると、綾華はうな垂れながら帰ってきた。

た。惜しくも関東大会への切符を逃したらしく、悔し涙を浮かべながら、せつかく俺が作った冷やし中華を、味も解らぬような速さで口に詰め込んで平らげ、おまけに作り置きしていたおじさんの分まで腹に入れ、それだけに飽き足らず、俺の皿にまで手を伸ばした。そこで、ようやく俺はその手を掴んでストップさせた。

綾華は伸ばした手を俺に掴まれたまま、わんわんと泣き喚き始めた。大きな声で泣く綾華を見るのは、久しく無かったので、俺は驚いた。けれど、綾華の続けてきたハードな練習の模様をよく知っていたので、今までの綾華の努力を振り返ってみれば、泣くのは当然のことだと気付いた。俺は泣いている子供をなだめる様に、頭にと手を置いて撫でたのだった。

小学生の頃、泣いている綾華をそうやってなだめたことがある。懐かしい思い出が蘇り、俺は自然と微笑みながら、こうした穏やかな時間にいつまでも浸っていたいと感じていた。

第二章 十二

待ちに待っていた、旅行へ出発する当日、これ以上はないと思えるほどに快晴だった。無感動な奴、とよく言われる俺でさえ、『透き通った青空』というものの典型が、今自分の頭上に広がっていることに、胸を大きく揺り動かされた。

俺達はバスで駅へ向かい、電車に乗り、数回乗り換えた後に、さらに新幹線に乗った。久しぶりの四人での旅行に躍動感を覚えつつ、移り変わる景色を堪能し、ようやく美浜へと着いた。約四時間を移動に有し、着いた時には正午だった。

休む間もなく引つ切り無しに泳いでいる綾華の、はしゃぎようにも驚いたが、水着姿のおばさんが、どこで知り合ったのか、若者たちの輪の中に入ってビーチバレーをしていたのにはさらに驚いた。しかも、それが傍から見えていて全然不自然でなく、年の差を感じさせないのだ。おじさんは、砂浜で遊ぶそんなおばさんを、海岸沿いにあつた階段の、段の端に座って、黒いサングラスの角を光らせて眺めていた。

俺は綾華が泳ぐのに付き合おうとしたが、泳いで早々、筋肉痛でギブアップし、砂浜に座って、綾華が時折海面に浮きながら手を振るのを、黙って眺めていた。

夕方になって、各自で暇を潰すのをやめ、四人で海岸沿いにある木々の間を散歩した。林の中の小道は、薄暗く、すぐ近くからさざなみの心地良い音が入ってくる。

俺はこの穏やかなひとときに、恍惚さえ感じて、目を細めていたが、傍らを歩いていた綾華にそれを気味悪がられた。さすがに行き過ぎているとは自覚しているが、俺にとってこうした時間は、言葉で偽ることのできない、大きな宝物だったのだ。

こうして俺達は二日間美浜に滞在し、澄んだ海の色に誘われるまま、泳いだり、波打ち際を散歩したりと、各々、好きなように空い

た時間を過ごした。宿泊する旅館は海岸のすぐ近くにあり、夕食は海鮮料理に舌鼓を打ち、夜は温泉に浸かってリラックスしてから、心地良く睡眠へと入るのだった。

二日目の晩、この旅館における最後の夕食を終え、四人で廊下を歩き、自室に向かっていった。

「ねえ、綾華。後でもう一回、温泉入りに行こうか」

おばさんが歩きながら綾華の背後に立って、浴衣に包まれたその華奢な両肩を掴み、後ろから片方の肩に顎を乗せて言った。綾華は、首をおばさんの顔が乗った肩の方にわずかに傾け、

「今夜、観たい映画があるから、私はいい。明日の朝、入りに行く」と答える。

すると、おばさんは、つれないわね、と顔をしかめて綾華から身体を離れた。そしてすぐに、隣の俺の方へ振り向き、

「なら、智ちゃん、一緒に入るっか」

と、悪戯っぽく笑いながら言った。俺は嘆息しながら、なんでもうなるんだ、と呟く。

「混浴よ、混浴」

と、おばさんは俺の肩を叩きながら、艶の入った声で呟く。そして、突然わざとらしく「あ」と声を上げて、慌てた素振りで見回し、

「修一さんの前でこんなこと言っちゃって平気かしらね」

と、口の前に手を置いて、ふふふ、と笑う。

おばさんの、呆れるほどばれの古臭い演出に、俺とおじさんは、同じように溜息を吐く。唯一、綾華だけが、傍らで可笑しそうに笑っていた。

「残念だけど、おばさん一人で行ってくれ。それか、混浴ならおじさんと一緒にどうぞ」

おじさんに視線を振ると、おじさんは眼鏡の奥の目を見開き、少し慌てた様子で「おい、智也」と呟く。

俺達は、そんな、いつもながらのくだらない談話を交わしながら、

廊下に四人分の足音を響かせ、階段を下って一階へと降りる。階段の脇にあった自販機でおじさんがビールを買っている間、俺は立ち止まっている綾華に向かって、

「何の映画を観たいんだよ」

と、呟く。

「ホラーで有名なやつ。なんて言っただけ。……とにかく、智也も部屋に来て一緒に観ようよ」

「俺はいいよ。明日は朝早いんだから、今日は夜更かしせずに早く寝ろよ」

俺がそう口を添えると、綾華はつまらなげに眉を曲げて、「わかってるよ、そんなこと」と、俺を睨んでから目を逸らした。

おじさんが缶を二本抱えながら、「ついでにおつまみも」と隣の自販機へ手を伸ばしたところで、綾華は痺れを切らして「映画始まつちやうから、私、先に戻ってるよ」とすたすたと歩いていつてしまった。俺はそれを横目に見やってから、腕を組んで鼻歌を唄っているおばさんの方へ向いて、「おばさん」と呟く。

そして、さらに視線を、自販機の前で屈みこむおじさんへ向けて、「おじさん」と同じように抑揚なく呟く。

二人は、俺のどこか真剣な声に、すぐに顔を振り向かせた。

「話があるんだ。綾華が寝た後、三人で夜の散歩がしたい」

おばさんは目をわずかに大きく開かせ、表情を強張らせた。開いた唇が震えている。

おじさんは無表情な顔で、眼鏡の奥の瞳を真剣な色に染めて、俺を真っ直ぐ見た。

少し間があった後に、おじさんはゆっくりと口を開く。

「わかった。綾華が寝た後、三人でこっそりと外に抜け出すんだな。後で綾華に知られて、拗ねられても私は知らないぞ」

冗談で言っただつもりだったのだろうが、俺もおばさんもそれには笑わず、静まり返った廊下におじさんのその張り詰めた声が重く響いた。俺は二人を無機質な目で交互に見ながら、口を開き、

「待ち合わせ場所を決めておこう。旅館の玄関を出て、正面にある道路を渡ると、海岸沿いの林道があるから、そのそばのベンチで、俺は先に行って待ってる」

俺は、胸にこみ上げる黒く染まった感情をどうしても抑えることができずに、自分でも恐ろしく冷淡な声音でそう告げる。

俺が言い終えると、二人は、無言のまま俺の顔をじっと見つめ、ゆっくりと頷いた。

「おじさん、おばさん。必ず来てくれ」

俺はそう言葉を添え、鋭い視線に『何のことが、わかっているだろう？』と念を込める。

おばさんは、俺のその視線から逃れるように、その見開いた目を、足元の地面に落とし、肩を大きく上下させた。耳に、おばさんの口から漏れる荒い呼吸音が、響いてくる。

一方、おじさんは、唇を強く引き結び、頬に大きな皺が浮き上がっている。おじさんは、眼鏡を片手で掴み取ると、もう片方の手で目頭を押さえて揉んだ。そして、しばらくその手で顔を覆ったまま、動かさなかった。

俺はそんな二人の様子を眺め、一言「じゃあ、後でな」と小さく呟くと、二人に身体を背けて、廊下をゆっくりと歩いていった。

第二章 十三

旅館を出ると、すぐ目の前に、道路が海岸に沿って、横一直線に走っている。俺は、道路の前で立ち止まり、通り過ぎていく、いくつかのヘッドライトの光をしばらく眺めていたが、道路が闇に包まれて静かになると、左右を見て、やって来る車の無いことを確認してから、走って道路を横切った。

すると、眼前にはもう、林が広がっていて、その間に小さな狭い道が海岸へと続く奥の方へと伸びていた。その散歩道に入るところのすぐ脇に、先ほど俺が待ち合わせ場所として指定した、例のベンチがあった。俺はそれへ近寄ると、木でできた表面を手で軽く払って、葉っぱやゴミなどを落とした後、座った。

蝉の鳴き声が、四方から聞こえてくる。

背後へ振り返ってみると、細長い黒い影がたくさんそびえ立っていて、ずっと奥の方には、海岸の砂浜が、木立の影に小さくくりぬかれて見える。鬱蒼としたその空間の中で、無数の蝉が鳴き叫んで、その悲痛の声をこだまさせていた。

俺は、理由もなく小さな溜息を吐きながら、前に向き直る。ジャージのズボンのポケットから、携帯を取り出して開き、時刻を確認し、待ち合わせにはまだ何時間も余裕があることを知り、再び溜息を吐いてベンチを立った。

林の中の小道に足を踏み入れる。足裏に、積み重なった幾枚かの葉っぱの固い感触がする。

薄暗い小道には、人の気配はなく、騒がしい蝉の鳴き声さえ、この寂しげな空気をかき消してはくれない。

うねった道の上に所々落ちている固い青葉を、俺は一步踏み出すごとに強く踏みつけていく。

ささやかな思い出の一コマが、頭に蘇る。それらは記憶の底から浮き上がって、俺の脳裏に美しく閃くたびに、瞬時に黒い筆で塗り

つぶされてその色を失っていく。

大切なものが、俺の内側から塵となって崩れ落ちていく。

心の底に、その塵が、黒く汚れた色を晒して溜まっていく。

……俺は元から何も手に入れてなどいなかった。

どんなに手を伸ばしても、決して掴めるはずはなかったのだ。それでもあきらめずに伸ばしてみても、わずかな欠片だけが指に触れるだけだった。

……今、気付いた。俺は元々、手を伸ばす必要などなかったのだ。何故なら、既に、俺は大切なものを獲得していたからだ。

それは、屋敷の裏口で、あの血塗られた光景を目にし、この目に焼き付けた時から、存在していた。

——復讐を完遂させる。

その命令が、俺の大切な人たちが残してくれた遺言であり、俺のかけがえのない大切なものでもあったのだ。

復讐とは、心の寄る辺の無い者が縋りつく恰好の名目なのかもしれない。俺は、その名目に喜んで縋らせてもらう。

——父さん、母さん。

俺はこの、臓腑が煮えくり返るような復讐の念を、あなた達の最後の遺産として、快く受け取らせてもらう。

俺は気付けば、腹の底から零れ出た、絶叫にも似た笑い声を、蒼い闇に包容された林の隅々にまで轟かせていた。

第二章 十四

「ねえ、綾華」

呼ぶと、鏡の前で長い髪を丹念に梳かしていた綾華が、「何？」と、鏡に映った、背後の私を見る。

和室には、布団が二式敷かれ、私はその一つに下半身だけを滑り込ませて身を起こしている。

体の震えを、悟られないように必死に抑えながら、掛け布団を握りしめ、言う。

「綾華の未来の夫ってどんな人かしらね」

言つと、綾華が目丸くし、「いきなり、何？」とつぶやく。

「……智ちゃんだったら、言うことないんだけどなあ」

そう本音を滑らせると、綾華の頬がほんのり赤く染まり、「何よ」ともう一度、つぶやく。

「なんとなく訊いたみただけ」

と、舌を出して笑うと、綾華は「もう」と怒った表情で——けれどまんざらでもない声音で言う。

——本当にそうなれば、どんなにいいかしら。

息をつきながらそう考える。

綾華との間に、沈黙が流れる。

私は、「綾華」と真剣な声で呼んだ。

綾華はヘアブラシを持つ手をぴたりと止めて、髪を揺らせながら振り返る。

「綾華なら、智ちゃんとこれからも仲良くやっていけるわよね？」

二人で一緒に生きていくのよ。……いい？」

念を押すように言つと、綾華は不思議そうな顔をし、不安の入り混じった声で、

「なんで、いきなりそんなこと……」
とつぶやく。

私はただ苦笑だけを返して、黙り込む。

綾華は物言いたげに私を見つめていたが、息をついて首を振ると、再び鏡に向き直った。

しばらく経つと、綾華は布団に入った。私も横になり、掛け布団を胸まで引き上げる。そして、布団にくるまった体を綾華へと向けた。

すると、綾華もこちらを向いて「おやすみ」と可愛らしく微笑む。そして、細い腕を伸ばし、部屋の中央にぶら下がった糸を引き、部屋が真っ暗になる。

闇に包まれてなお、薄く浮き上がる綾華の寝顔を時も忘れ見つめていた。

閉じられた瞼と、微かに動く鼻、そして小穴を開いた唇。

輪郭があやふやであるはずのそれらが、不思議とはつきりと見える。

静かな寝息が聞こえてきたので、我にかえって、布団から出て立ち上がった。

綾華の枕元までそっと近寄り、しゃがんで、綾華の額に手の先を当てた。

「綾華……」

涙と共に、愛しく想う気持ちがこみ上げてくる。

柔らかい頬に指を這わせ、優しく撫でる。

このままこうして。そんな誘惑を必死に切り捨て、立ち上がって玄関に出た。

襖の隙間から差す光が、黒く塗られた畳を、長方形に黄色くくり抜く。

その優しい寝顔を、はつきり目に焼き付けた。

——行ってくるね。

微笑むと、目をつむって涙をこぼし、襖を閉めた。

後ろ髪を引かれながらも、すぐに、手に抱えていた上着を浴衣の上に羽織り、素足のまま靴を履き、廊下に出た。

隣のドアをノックする。

ひんやりと冷たいノブを握って、回してみるとドアは開き、私は玄関へ入って後ろ手に閉めた。

襖が開き、強張った表情の修一さんが出てくる。

修一さんの震える手が私の顔に伸びてきた。

下まぶたに、指の触れる生暖かい感触がする。

「修一さん、私……」

すぐに、再び涙がにじみ出す。

修一さんの濡れた手の先が頬へと当てられる。修一さんは微笑んで言う。

「きつと、大丈夫だ。智也を信じよう」

体を包まれるような、暖かい声だった。けれど、この罪悪感は、消えることはなかった。

「信じてるわ。だって智也は……私の子よ」

そう力なく笑う。

肩に手を回され支えられながら、廊下に出た。

生暖かな空気の漂う廊下を、体を密着させて歩く。

ゆっくり歩みを進めながら、ふと首を、廊下の窓へと向けた。

底の知れない闇が、道路や木々を呑み込んで、すべてを一色に染め上げている。

闇に目を止めた途端、体が金縛りのように動かなくなった。

闇から視線を外すことができず、視界が黄色く変色し始める。喉が詰まり、全身の筋肉がこわばる。

……懐かしい。この感覚は、何年ぶりだろう。おそましくて、抗いようのない、恐ろしい感覚。それでも、この感覚は懐かしい。

「和子！」

強く肩を揺らされ、ようやく我に返った。

私の顔を覗き込む修一さんを、息を切らせながら見る。

「また……あの症状が出てきたか」

私は汗に濡れた額をぬぐいながら、「そうみたい」と小さくうな

ずく。

昔、鬱病を患っていた時。闇をじつと見詰め過ぎると、視線がそれに囚われ、呼吸が止まり、身動きができなくなる——そんな特異な症状が、時折現れていた。

たいていは今のように助けられるのだけれど、ひどい時には失神し、あるいは呼吸困難に陥り病院に運ばれた。

数年間影を潜めていたその症状が、蘇り始めた。

「大丈夫か」

修一さんが、私の両頬に手を当てる。私はそれに、自分の手を重ね、
「大丈夫よ」と微笑み、頬から剥がした。

ぐったりとした身体で、再び歩き始める。

……鬱病が治り、この罪悪感に息を詰まらせることがなくなったのは、智也のおかげ。

無口で、自分の気持ちをなかなか伝えられない不器用な子。だけれど、どんな時も他人を思いやることを忘れない優しい子……。けれど、さつき。その智也が、あんな眼を私に向けた——。

赤くきらざらと、鈍い光を放つ二つの眼。それは、まるで、いつか見た、人間の眼に——。

その瞬間、あの血塗られた光景が脳裏に閃いた。
住宅街の一角、民家の塀に挟まれた狭い道の上。

私は、二人の男女と向かい合っている。

突然、男の脇腹が裂けた。破れた臓腑から血しぶきが出る。

塀の上に、赤い直線が、幾重にも刻みつけられる。

続いて、女の両肩が潰れ、腕が、人形のそれと同じように大きく弧を描いて揺れる。足元の地面に、斑点が浮き上がる。

コンクリートの上に広がっていく二つの血だまり。それが混ざり合って、一つの湖を作る。

それを私は呆然と見下ろす。

私の記憶のフィルムに、その情景が、黒く焼きつけられた。今、それが脳裏に、生々しく映されている。

気づけば、絶叫を上げていた。

……二つの死は、片時も心から離れてくれなかった。

一時、幸福を手にいれたとしても。それは心に空いた二つの大きな穴からこぼれて消えていく。

私は、こんなに謝ってる。なのに、どうして。

どうせ、許されないのなら。このまま、狂ってしまえば良いのかもしれない。死んだ彼らも、それを望んでいる。

一層、声を張り上げて、絶叫する。

白い光が見える。あれに触れれば、私はきっと救われるだろう。

二つの屍の手が、私の背中を後押ししてくれる。ありがとう。私はこれで――。

その時、甲高い音が二回鳴った。

絶叫が止まる。

両頬が痺れて、熱くなった。

間近にある修一さんの顔を呆然と見る。

修一さんは片手を振り上げて、息を切らせていたが、目が合うとその手を下ろした。そして、

「……もう、君は十分償ったんじゃないのか。過ちを繰り返さないで、そう心に深く――決めるほど深く、刻んだんだろ？ もついいんだ。過去の記憶に、振り回される必要はない。その記憶を手放していいんだ」

記憶を手放す――何度もそうしようとしたけれど、無駄だった。

私は「できない」と、泣きながら首を振る。

「それを手放すのは許されないことだと、君は思っているのか」
優しく抱きしめられる。

「そう。いけないことよ……」と、嗚咽と共につぶやく。

「なら……行こう、和子。智也のところへ。すべてを話して、その重荷を降ろすんだ」

小さくうなずいて、頭を胸にこすらせると、さらに強く抱きしめられた。

第二章 十五

「ここに居たか」

背後から柔らかい声がして、俺は彼方に見える水平線から目を離して、ゆっくりと振り向いた。

砂浜に、おじさんが来て立っていた。そして、おじさんの腕に縋りつくようにおばさんがその隣に立っていた。おばさんは、俺の視線を受けると、ゆっくりと腕から手を離して、こちらに身体を向けた。

「待ち合わせ場所に居なかったから、少し探したんだぞ」

おじさんは、微笑みながらそう言う。俺は、目を逸らして、「ごめん」とつぶやく。

「綺麗だな」

そう言ったおじさんの視線が、俺の顔を通り越して、はるか遠くへと据えられた。

俺は、後ろへ振り向き、揺れながら銀色に照り輝く海面を見やり、ああ、と静かに頷く。すると、その時、

「智也」

小さな声がして、すぐに顔を振り向けると、おばさんが崩れそうな顔を必死に笑らせながら、こちらを見つめていた。その目は悲しげに潤んでいて、俺は胸が裂けるような痛みを覚え、見ていられずに視線をおばさんの顔から下げる。

おばさんは、自身の両腕を、震えを抑えつけるように、固く組ませていた。

「話って何かしら」

おばさんの、その弱弱しく震えた声を聞いた途端、何故か怒りが湧いてきて、俺は上着の胸の辺りを右手で掴み、握り締める。

「言わなくても、わかっているだろ」

溢れ返る感情を抑えきれずに、低く震えた声で言った。

おばさんの身体が、びくりとそれに反応して揺れる。

……何故か、どうしても二人の顔を見ていられなかった。俺は視線を灰色の砂浜に落としたまま、身体の向きを変え、海を正面に見た。両手の拳を握り締める。

「おじさんとおばさんを旅行に誘ったのは、今まで家族として一緒に過ごしてくれたことに、本当に感謝していたからだ。だけど、理由はそれだけじゃない。……事件の、」

「事件の真相を知りたいのか、智也」

俺が言い終わらないうちに、おじさんが言う。

初めて聞く、おじさんの怖いほど真剣な声。俺は暴れまわる心臓を押さえながら、「そうだよ」と、わずかに頷く。

「お前は既に、水西家の頭首代理との対談によって、おおよその事実は予想していると思うが……私の口から真実を話そう」

おじさんのその言葉に、俺は振り向き、見ていられなかったはずのおじさんの顔を食い入るように見つめる。

だが、その時、

「待って」

とおばさんが叫び、おじさんの腕を掴んで、必死に止めようとした。おじさんは、開きかけた口を再び閉じ、腕に縋りつくおばさんを見下ろした。

「私が話すわ、すべて」

おばさんはそう言うのと、すぐに、「智也」とこちらを向いて、

「こっちに来て」

と、笑いかけてきた。その笑顔は、先ほどの哀しみに満ちた崩れかけの微笑ではなく、俺が何年も目にしてきた、あの、心を優しく包み込むような笑顔だった。

俺は思わず身体をおばさんの方へ向かせ、足を前へ踏み出しかけたが、寸前で押し留まった。俺は目を逸らし、脇を向いて、「いいから、早く話してくれ」とつぶやきかけた。が、俯いている俺の視界の中に突然おばさんの足が入ってきたと同時に、背中に優しく腕

を回される感覚がして、俺のそのつぶやきは自然とかき消えた。

「智也。あなたは、私の大事な子なの」

耳元で、おばさんはそう囁く。俺は抱きしめられながら、固まったように動けなかった。柔らかい温もりに、有無を言うことができず、次第に身体力が抜けていく。

なくなっただけの大切なものが、再び姿を現してきた気がした。じめじめしていた胸の内が、澄んだ水で満たされ、潤っていく。

「話すわ、全部」

おばさんの優しい囁きが、耳に心地良く響いた。それと相反するように、哀しみと狂気に満ちた話が、おばさんの口から紡がれていった。

第二章 十六

旅館を出ると、すぐ目の前に、道路が海岸に沿って、横一直線に走っている。俺は、道路の前で立ち止まり、通り過ぎていく、いくつかのヘッドライトの光をしばらく眺めていたが、道路が闇に包まれて静かになると、左右を見て、やって来る車の無いことを確認してから、走って道路を横切った。

すると、眼前にはもう、林が広がっていて、その間に小さな狭い道が海岸へと続く奥の方へと伸びていた。その散歩道に入るところのすぐ脇に、先ほど俺が待ち合わせ場所として指定した、例のベンチがあった。俺はそれへ近寄ると、木でできた表面を手で軽く払って、葉っぱやゴミなどを落とした後、座った。

蝉の鳴き声が、四方から聞こえてくる。

背後へ振り返ってみると、細長い黒い影がたくさんそびえ立っていて、ずっと奥の方には、海岸の砂浜が、木立の影に小さくくりぬかれて見える。鬱蒼としたその空間の中で、無数の蝉が鳴き叫んで、その悲痛の声をこだまさせていた。

俺は、理由もなく小さな溜息を吐きながら、前に向き直る。ジャージのズボンのポケットから、携帯を取り出して開き、時刻を確認し、待ち合わせにはまだ何時間も余裕があることを知り、再び溜息を吐いてベンチを立った。

林の中の小道に足を踏み入れる。足裏に、積み重なった幾枚かの葉っぱの固い感触がする。

薄暗い小道には、人の気配はなく、騒がしい蝉の鳴き声さえ、この寂しげな空気をかき消してはくれない。

うねった道の上に所々落ちている固い青葉を、俺は一步踏み出すごとに強く踏みつけていく。

ささやかな思い出の一コマが、頭に蘇る。それらは記憶の底から浮き上がって、俺の脳裏に美しく閃くたびに、瞬時に黒い筆で塗り

つぶされてその色を失っていく。

大切なものが、俺の内側から塵となって崩れ落ちていく。

心の底に、その塵が、黒く汚れた色を晒して溜まっていく。

……俺は元から何も手に入れてなどいなかった。

どんなに手を伸ばしても、決して掴めるはずはなかったのだ。それでもあきらめずに伸ばしてみても、わずかな欠片だけが指に触れるだけだった。

……今、気付いた。俺は元々、手を伸ばす必要などなかったのだ。何故なら、既に、俺は大切なものを獲得していたからだ。

それは、屋敷の裏口で、あの血塗られた光景を目にし、この目に焼き付けた時から、存在していた。

——復讐を完遂させる。

その命令が、俺の大切な人たちが残してくれた遺言であり、俺のかけがえのない大切なものでもあったのだ。

復讐とは、心の寄る辺の無い者が縋りつく恰好の名目なのかもしれない。俺は、その名目に喜んで縋らせてもらう。

——父さん、母さん。

俺はこの、臓腑が煮えくり返るような復讐の念を、あなた達の最後の遺産として、快く受け取らせてもらう。

俺は気付けば、腹の底から零れ出た、絶叫にも似た笑い声を、蒼い闇に包容された林の隅々にまで轟かせていた。

第二章 十七

その話の禍々しさに耐えきれなくなり、俺は「やめろ」とつぶやき、遮った。

「綾華にも、それが憑いているのか？」

俺のその囁きに、おばさんは一瞬の間を置いて、「そうよ」と悲しげにつぶやく。

それを聞いた途端、俺は反射的に、背中に回されたおばさんの腕を掴んで、引き剥がした。

――嘘だ。

そう呻いて、歯ぎしりしながら、自分の腕をもう片方の手で力の限りに握りしめる。

顎と腕から、骨が軋む音がする。

俯いたおばさんの背後で、おじさんが目をつむり、つらそうに眉をよせて唇を引き結ぶのが見えた。

俺は、捲くられたジャージの腕袖から出ていた自分の腕に爪を立てる。

そして、「なぜ、儀式を行わせた」と、怒りを噛み殺しながらつぶやく。

激情にまみれたその声に、おばさんが身体をびくんと大きく震わせる。

俺は、下げていた視線をおばさんへ向けて、睨む。おばさんはその視線を受けると、顔を俯かせた。すると、おじさんが、代わりに口を開く。

「そうしなければ、和子の体に宿っている霊が、暴れ出すからだ。宿り主の体を侵して、次の継承者に儀式を行わせるよう、必死に訴えかける」

おじさんは俺を見てそう言い、おばさんに近付き慰めるように肩に手を置く。

俺はおばさんへ険しい視線を向けたまま、怒りに声を張り上げ言い放った。

「綾華を守るんじゃないかったのか。その決断の向かった先が、このザマだとは。聞いて呆れる」

顔を伏せたおばさんが、悲しげに目をつむる。

おじさんの、「智也」と怒りをあらわにした声を聞き流し、俺はおばさんから視線を放す。

そして俯き、足元の砂を睨んだ。

——綾華。どうして俺に言わなかったんだ。そんな汚らわしい獣など、俺が微塵に切り刻んでやったのに。

腕に食い込んでいた爪を、強く横に引き、肌を裂いて憎悪の傷痕を切り刻む。

俺がいけなかったのか。綾華が抱えていた苦悩に気付きもせず——いや、気づいていても、それを理解しようとしなかった。幸福な時間に浸り続け、それが永遠に続くのを、ただ願いつづけていた。そうしている背後で、綾華が泣き叫んでいたというのに。

俺は、腕から滴る血を手の平で拭き取り、その濡れた手を握りしめる。

握った手の隙間から、血が一滴漏れて足元に落ち、灰色の砂粒を黒く染め上げる。

その赤みがかった黒を見つめながら。

——俺が綾華を。

そうつぶやき、目から一粒の雫をこぼす。
すると、

「違う、智也のせいじゃない。あなたがさっき言った通り、これはすべて私のせい」

おばさんの声が、伏せた俺の頭の上にかかり、俺は顔を上げておばさんを見やる。

おばさんは悲しそうな瞳を微笑ませながら、口を開く。

「……綾華はきつと、話したら智也に嫌われると思ったのよ。智也

が呪術師だなんて、綾華は知らないから。だから、」

「黙れ」

俺は、低く震えた声で遮る。そして、二人を睨みつけながら、言う。

「おばさんとおじさんは、俺が呪術師であることをやっぱり知ってたんだな。今まで知らないふりをして、俺を嘲笑っていたのか。……親切に接してきたのは、事件の後始末として、俺を監視するためだったんだろ？」

怒りを込めて言うと、おばさんは身を乗り出して、「違うわ」と必死に弁解するように叫び、

「……違うのよ。私があなたに近づいたのは、一緒に過ごしたかったから……本当の、家族のように。……確かに、私はあなたの監視を命じられたけれど、そんなもの無視した」

信じて、智也。

おばさんは、濡れてただれた頬を必死に緩めて笑いながら、俺にそう囁いた。

さらにおじさんがその横に並び、同じように、訴えかけるような視線で俺の顔を直視し、言った。

「智也、四人で過ごした日々を思い出せ。お前は、あの時間が偽りだったと、本当に信じるのか」

俺の頭におじさんの声が響き渡り、脳裏にその日々の記憶が蘇ってくる。

しかし、その記憶は既に黒く塗りつぶされており、懐かしい感情や情景などは、何一つとして浮いては来なかった。

俺は唇を曲げて自嘲げに笑いながら、

「信じるも何も、もう思い出せないのだから、偽りかどうかなんてわかる訳がない。……それに」

俺は、おばさんを見つめる。

「例え監視するためじゃないとしても、おばさんは決して、俺と一緒に過ごしたいから近づいてきたんじゃない」

おばさんは、俺の声に反応してわずかに目を見開き、俺を驚いたように見据える。

俺は目をゆつくりとつむり、深く息を吸った。そして、決心して目を開いた。言ったが最後、二度と後戻りができなくなるだろう、その言葉を、吐く。

「おばさんは贖罪のために俺に近付いてきたんだ。そして、罪を償っているという、安心感が欲しいために、俺の本当の家族を『演じて』きたんじゃないのか。自分の為だけを思ってたな」

俺の顔を映したおばさんの両目が、全開に開かれる。

一瞬の間の後、おばさんの口から、甲高い絶叫が吐き出され、それは、さざ波の上に乗って、水面を伝って彼方に消えていった。

おばさんは崩れ落ちるように膝を砂浜につけ、目を見開いたまま打ち震えた。

おじさんが走り寄り、その肩を抱く。そして、顔を上げ、憎しみのこもった視線を俺に寄越した。

俺は無機質な目でおじさんを見返す。

そして、視線を移し、おばさんを見下ろして言う。

「あなたは単なる役者であって、俺の家族ではない」

すると、おばさんが、「違う。違うのよ」と何度もつぶやきながら、砂の上を這って俺の足にしがみついていた。

俺は足を振って引き剥がそうとするが、執拗にズボンを強く掴んで引っ張ってくる。

「違うの」と繰り返して、頭をうな垂れ、泣き叫ぶおばさんを見下ろしながら、俺は冷徹に言い放つ。

「……話せ。あなたが負った罪のことを」

おばさんの手が動きを止める。

「智也、貴様……」

おじさんが怒りに顔を歪め、俺を睨みつけてそうつぶやき、拳を握って、ゆつくりと近づいてくる。

俺は憎悪を乗せたその視線を受けながら、そっと上着に手を滑り

込ませ、それを引き出そうとする。

「話すわ」

その時、足元からそんな掠れたつぶやきが聞こえた。

おじさんがぴたりと足を止め、握っていた拳を解く。

俺も上着に入れた手を止め、視線を下げておばさんを見る。

おばさんは砂に手をつけて身体を支えながらゆっくりと立ち上がった。

「例え、私が役者だったとしても。私は智也を愛しているし、信じている」

うわごとのようにそうつぶやいて、自分に言い聞かせているようだった。

そんな、虚ろな瞳を地面に這わせているおばさんを見ながら、俺は冷たく「話せ」ともう一度促す。

おばさんは、顔を俯かせたまま、震える唇を動かした。

第二章 十八

私と修一さんは、広い和室の中央に、厳しい顔つきの老婆——頭首と向かい合って正座していた。

昼間の日差しが、障子戸を突き抜けて、畳の表面をつややかに照らす。

部屋には、花瓶も掛け軸も、飾るものは何一つとしてない。

頭首の背後にある白い壁だけが、時の経過とともに映し出た、うねった茶色の模様を描き出している。

何度この和室で、こうして母と、正面から向き合っただろう。

対談の度に、激しい恐怖にみまわれた。

けれど、今回は違った。

私は、隣に静かに正座している修一さんを見やる。

修一さんは、視線に気づいて振り向くと、瞳をほほえませ、膝の上の右手の親指を立てる。

私はうなずくと、視線を前に戻した。

しかし、正面に座っている小さな老婆を見た途端、恐怖の代わりに、おぞましいほどの憎悪が湧き上がってくる。

——この人間がいるから、私は——綾華は……。

視界が、歪んでくる。

目に力を込め、長く見開いていたせいで涙が滲んできたのだろう。

その時、突然、

「憎いか、和子」

と、低いしわがれた声が正面から聞こえた。

母が——水酉翼が、閉じかかった細い眼をこちらにじっと向けている。

そのかすかな瞼のすきまから、深い黒の瞳がのぞいて、私に鋭い視線をよこしている。

私は母の言葉に、黙ったまま、無機質な視線を、その皺のよった

顔へと向ける。すると、

「もつと憎め。その憎しみが呪力となって、お前の力を蘇らせるだろう」

と、母は目を限りなく細めて、私を食い入るように見た。

その視線に身体を貫かれた途端、微小だった恐怖が、一瞬で膨れ上がった。

私は視線から逃れるように目をつむる。

そのまま深く息を吐いて、落着きを取り戻す。

わずかな沈黙の後に、私は決心して目を開き、「頭首」と言った。

「今日、対談を申し出たのは、お願いしたい事があるためです」

張りつめた自分の声が、部屋に響き渡る。

私は母をじつと見る。

母は沈黙したまま、しばらく言葉を返さなかった。

肌を冷たく撫でていくような、気持ちの悪い沈黙が降りる。

時間が経つにつれて下がっていく私の視線が、自分の手元に来た

時、母が口を開いた。

「縁を切りたいのか、和子」

即座に顔を上げて、母を見た。

震える喉を絞って、何かを言おうとするが、口からは吐息しか出

ない。

「いいだろう、切るがよい」

さらに驚きの言葉が、紫色の皺のよった唇から、紡がれる。

私は、「どうして——」と小さくつぶやく。

「切れ。止めはしない」

表情一つ変えずに、母は低い声で言う。

しかし、「だが」と言葉をさらに付け加えた。

「己の宿命だけは代えられない。確かに縁を切れば、お前は責務から解放され、綾華は次期頭首としての義務を失う。綾華が将来つくべき座には、頭首代理の一馬がつくことになる。……だが、水西家の女として生まれた以上、綾華は『儀式』を行わなければならない。

我が一族の神、『鷲』の継承を行わなければ、現在の継承者——つまりお前の命が危険に晒される。それだけにとどまらず、それが次の継承者や一族全員にまで及ぶ可能性がある。よって、縁を切ることは可能だが、綾華の、『鷲』の継承者としての義務は消えることはない」

母は、一旦そこで言葉を切ってから、短く息を吸い、「だがな」とつぶやく。

「お前が既に肌で感じている通り、『鷲』は継承者に対して、肉体、精神、いずれにも影響を及ぼさないから、ほとんど無害と言ってよい。普通に生きていく分には、何ら問題にならないだろう」

母が淡々と語り終えると、私は隣でじっと押し黙っていた修一さんに、視線を向ける。

修一さんは、唇を引き結んで眉を険しくよせていたが、それでも私を見ると一つうなずいてみせた。

私は、深呼吸をする。そして、鼓動が速くなるのを感じながら、母を正面に見てゆつくりと口を開く。

「それでも——水西家と縁を切りたいと思います」

母はかすかに目を閉じた。そして、「そうか」とうなずき、黙り込む。

静かな沈黙が流れる。

母が何も言わないので私の心に徐々に安心が流れ込んできた時、しかしふと母が口を開いた。

「ひとつ条件をのんでもらおうか」

途端に心臓が跳ね上がる。

隣から、「条件だと。まだ言うか、このババア」と、修一さんが怒りを露わにつぶやくが、私は片手を彼の前に出してそれを静止し、「条件——とは、何ですか」

と、声を震わせながら言った。

これは、すでに覚悟していたことだ。

だが、降り積もった恐怖心に目を瞑ることは許されなかった。

「加賀という家の名を、お前は聞いたことがあるか」
母が言うと、

「知っているに決まっているだろうが。俺達と同じ、呪術師の家系だ。それが、どうした」

私の代わりに、修一さんが訝しげに答える。

母は、片眉をわずかに吊り上げて、修一さんを見やってから、

「あの家の性質は知っているか」

と、どちらともなく訊く。

私が無言で視線を修一さんに振ると、修一さんは私にかすかにうなずき、母を見て、説明し始める。

「何十年もの間、ただひたすらに心血を呪術の研究に注いできた酔狂なやつらだ。研究のためなら、手段を選ばないと聞く」

修一さんの声には、蔑みと嫌悪が含まれていた。

私も、胸に吐き気が込みあがってくるのを感じた。

それは、この家での体験が、反射的に脳裏に蘇ってきたからだ。

この水酉家も、加賀家と似たようなもの。

人殺し同然のことを私はやってきたし、母は私の数倍、命を効率よく死に追いやってきた。

「しかも、研究している呪術が、人を傷つけることを目的としている。そういう呪術に染まる人間だけあって、残虐性は高く、実験の為に平気で生物の命を犠牲にし、非人道な行動を行う」

修一さんはそう話すと、一つため息をした後に、「ったく」と舌打ちし、

「加賀家が、一体どうしたんだよ」

と、うんざりそうに母に視線を向ける。

「実は、この家を重用してくださっている、ある政治家の方が、加賀家に命を狙われている。呪術によって危害を加えられる恐れがあるから、それを阻止してほしい」

母は無表情でそう言う。

その言葉を聞いて眉をひそめた修一さんは、警戒するように、

「阻止するといつても、手段は無限にある。……俺達は彼を呪術で保護すればいいのか」

と、訊く。

「当然それが必要なだが、お前達には、もっと重要な任務をやつてもらう。つまり……加賀家の者に制裁を加えて脅してもらふことになるだろう」

その言葉に、修一さんが食い下がろうと身を乗り出すと、

「……甘ったれるな。そうでもしなければ、連中が引き下がるか。一度決定した事柄は、執拗なまでに遂行しようとする、呪術師の基準から見ても、尋常じゃない精神力をもった奴らだ」

母の言葉を聞いているうち、舌打ちをした。

今まで母の取ってきた行動は、加賀家のそれと全く同質だ。

そんな母がさらりと抵抗なく、加賀家を否定する言葉を吐く——その驕りに、激しい怒りが胸に沸き立つ。

「なら。逆に制裁を加えられる可能性の方が高いんじゃないのか。加賀家には、熟練の呪術師がたくさんいる」

修一さんが声を大きくして喋り立てると、母は横目でそれを見やり、静かに返す。

「それは、昔の話だ。以前は多くの分家が呪術を継承していたらしいが、水酉家同様、時代の変遷と共に、呪術師は消え、加賀家は衰退していった。今では、呪術師の存在する家は、加賀家本家と、分家の香我美家だけだ。しかも、香我美家の方は、今まで必死に積んできた研究と誇りを捨て、猿の生活に身を置き始めた。そうした猿どもに用はない。灸をすえる相手は、本家の者だけだ。加賀治也と加賀智の夫婦。奴らに、制裁を加える」

そう語る母の、死人のように澁んだ瞳に、吐き気がして、口を抑える。

もう片方の手を握りしめる。

握りしめた手の内で、長い爪を、手の平へ突き立てる。

そして、その痛みを好んで感じ続ける。これは、私の重ねてきた

罪への懺悔だ。

こうすることで、自分は償いをしているから母とは別種の人間なんだと、心地よい錯覚に浸れる。

それが、真実になることは決してないとわかっていてもなお、こうせずには私の心がもたない。

「和子。大丈夫か」

口を押さえた私の喉から、小刻みに切れる呻きが聞こえたためか、修一さんが心配そうに顔を近づける。

——私も母同様、ただの殺人者でしかない。けれど。

例えそうでも、私は守らなければならない。何に代えようとも、綾華だけは、絶対に。

背中をさすられ俯いている私に、母が「和子」とつぶやく。

「お前は、呪術師には向いてないたちだ。私へのその過剰な反応は、当然のものだ。だが……お前は、血を汚す運命からは逃れられない。足掻くのはやめておけ」

負の感情を込めたその言葉に、胸から胃液がせりあがり、涙が染みる。

その時、隣で、修一さんが立ち上がった。

横を見ると、私の顔の間近に修一さんの手があり、拳が激しく揺れていた。

「ババア」

表情を消した修一さんが、母を見下ろす。それを母は無表情のまま見上げる。

「やめて。修一さん」

その震える手首を握って止めるが、修一さんは、見開いた目を母に据えて、歯を噛み締めている。

必死に修一さんの腕にすがりついて引っ張り、進み出そうとするのを止めようとする。

「お前が、和子をこの世界に踏み込ませた。消えろ、ババア。呪にとり憑かれた亡者め」

修一さんは叫んで私を振り払い、大股で踏み込み、そして拳を振り上げる。

だが、その刹那、上を向いていた母の口が開き、歯を剥き出した。それと共に、母の喉から、悲鳴のような、けたたましい叫びが起こり、私達の耳を貫いた。

心臓に衝撃が走り、身体の筋肉が引きつる。

叫びが、大気を切り裂くように部屋に木霊する。

私の呼吸は止まり、身動きもできず、次第に視界に光が走って、頭が重くなっていく。

気づけば、視界は反転して、倒れた私の肩が畳に擦れる。

傾いた視界の先に、顔を上げて大きく口を開けた母の姿が見える。母は、叫びながら私をじっと見下ろしている。

その瞳から目を外すことができず、次第に身体が痙攣し、視界が震え始める。

と、突然、修一さんの後頭部が倒れるように私の視界へ入ってきて、母の顔が覆い隠され、ようやくその眼から逃れることができた。それと同時に、甲高い絶叫がやつのことで止んだ。

私は胸を押さえて息を切らせながら、目前に倒れている修一さんに手を伸ばし、背中に触れる。

すると、修一さんは肩を上下しながら体を私の方へ倒し、小さく

「大丈夫か」と途切れがちにつぶやく。その時、

「どうだ。聞き惚れたか」

と、母の嘲笑うような声がした。

「やむを得なかった。この通り、この老いばれの体は、一発殴られただけでも死ぬ。あの場合、呪術を使うのは仕方がない」

修一さんが、背中からかかるその声に、舌打ちをつく。さらに声は続く。

「修一よ、潔くその態度を改めろ。それでは生きられる保障はないことを、胸に刻んでおけ」

胸の前で拳を震わせる修一さんの腕に、そっと手を乗せて、首を

振る。

すると、修一さんはきつく目をつむって眉をよせながら、わかったとばかり、うなずいた。

「それに、和子。……決心を固める。本当に逃れたいのなら」

低く抑揚のない声が、修一さんの体の向こうから聞こえてくる。

……もし、母の要求をのんだら。

体の奥底へしまい込んだ、あの力を再び使わなければならなくなる。

……そして、失敗したら。

その時は、この命が呪に食われて消滅するだけだ。

要求をのまなかったところで、私はこの檻から抜け出せずに、ただ自らの心を腐らせていくだけだ。

迷う必要など、元からなかった。

死んで、魂のみの存在と化そうが、必ず私は綾華を救い出してみせる。

あの世から這い上がっても、綾華をこの胸に抱き続けてやる。

私は両手を地面につけ、体を支えながら、ゆっくりと起き上がる。

「和子」と、下から修一さんの声がかかるが、それには答えない。顔を俯けたまま、唇を開かせつばやく。

「頭首。やります」

第二章 十九

加賀家に到着した時には既に、家の中には二人の気配は残っていなかった。

数分前まで私達は、呪術によって、この家から気配が流出しているのを捉えていた。

けれど今、この屋敷にいるのは、息子のみだ。

再度、呪術によって気配を探ってみるが、二人の気配はいつの間にか隣町まで移動していた。

「どうする、和子」

修一さんが、屋敷に険しい視線を向けながら、言う。

私は鼠色に霞がかった空を見上げながら、

「車で二人を追うしかないわね。ここに数人残していきましょう」

修一さんは舌打ちをし、「面倒かけさせやがって」と毒づく。

車の後部座席に二人で乗り込み、運転手に、すぐさま隣町へ向かうように告げ、発車させた。

「今更逃げようとするとはな。……もしかしたら、俺達との鬼ごっこを楽しんでるのかもな」

修一さんは、車窓の手すりに頬杖をつきながら言った。

「策があるんでしょ。私達を撒こうとしているのはまず間違いないわね」

「策のために自分の息子を置いてけぼりにするクズがどこにいる」

憤りを感じているのは、修一さんだけではなかった。

私は最初、この件を穏便に済ませ、この身を呪術によって汚したくないと、執拗に願っていた。

——だが、今は。

こんな最低の輩が相手ならば、あのおぞましい力を浴びせるのも一興かもしれない——そんな恐ろしい考えを浮かべるまでになっていた。

「和子。無理はするなよ」

修一さんがふと、こちらを見やって心配そうにつぶやく。

「それこそ無理よ。悠長なこと言ってるよと殺されるわ」

右手を強く握りしめ、腹に力を込める。

体内に眠っていた膨大な力が再び渦巻き始める。

久しく忘れていた、力が満ちる快感に、私は酔いしれ、恍惚の吐息を吐く。

この力を使つて、必ず。必ず綾華を救つてみせる。

頭に思い浮かぶのは、綾華の可愛らしい笑顔。今すぐその頬にキスしたいとさえ思う。

その笑顔以外に、今想うべきものは、ない。

「なあ、和子。奴らが俺達を撒こうとしているなら、こうして追うのは……」

「残念だけど、現在の選択肢はこれだけしかないの。見失ったら、その時は――」

私の声は、スーツの上着のポケットから鳴る携帯の着信音で遮られた。

無造作に取り出して耳に当て、はい、と答える。すると、

「姉さん、一馬です」

と、息を切らした若い男の声が聞こえた。

その真剣な声音と荒い息遣いに、緊急の用件だと理解する。

「姉さん。来る必要はありません。ここにあるのは奴らの気配だけで、実物は他を移動中です」

「もう到着したのね？」

「はい。気配を発していたのは、加賀家の分家、香我美家の自宅です。中には……予想通り、罠が。たちの悪い『人形』が、二体ほど待ち構えています」

「……そう。彼らの現在位置は絞れる？」

「どこを移動中ですか？」

そう問われると、私はすぐに車窓から外をのぞいた。

たった今、目の前を通り過ぎた電柱に記された文字を、反射的に記憶し、頭に浮かべて読み上げる。

「安下の五丁目六番地」

「なら、宮小内に向かってください。三丁目で待機を。他の車が三方から挟んで追っていますから、奴らはそこを必ず通ります」

話を聞きながら、運転手に行き先を指示し、「ありがとう。切るわ」と告げて、耳から離そうとする。すると、

「姉さん」

と、強く呼ぶ声がした。

地底を流れるような低い静かな声から、激情のこもった声に打って変わる。

「奴らに出会ったら、迷わずに先手を打って下さい。躊躇すればやられます。先にこっちがアレを出してしまえば、まず負けない。アレは車の窓から放出するのが良いでしょう」

一気に喋り立てるその声に、私はくすり、と人知れず微笑み、「心配してくれてるの？　ありがとう」

と、つぶやく。

姉さん、と心配そうな、そして悲しげな声が返ってくる。

私は「大丈夫よ」と優しくなだめるように囁き、電話を切った。そして、前を見る。

車は既に宮小内の住宅街の中に入り、塀に挟まれた、狭い道の脇に停車していた。

と、修一さんが、

「従弟からか？」

と、険しく前を見据えたまま腕を組み、小さく訊く。

これから起こるであろう惨事への、緊張のためか、その声は震えていた。

私は「そうよ」とつぶやいて、ドアを開き、外に降り立つ。

後ろから「おい」と叫ぶのが聞こえたが、振り返らずに閉める。そして、目を細めて正面を見つめた。

塀に沿って、道が一直線に続いている。

静まり返った住宅街の中の、この道に立っているのは、一つの影だけ。

道の遙か先に、夕日が雲から顔を出し始めていた。その微細な朱の光が、切れ切れの灰色の雲に滲み、淡く広がっている。

世界から孤立した空間が、ここに。

私は一步、一步と、歩み始める。

「和子！」

背中からかかった声が、大きく響き渡り、道の先へと消えていく。歩むごとに、こちらへ迫ってくる気配へと自ら近づいていった。そして、立ち止まる。

曲がり角から、二人の男女がゆっくりと道に入ってきて、私の方へ正面に向いた。

それほど離れていないためか、相手が息を切らしているのがわかる。

男の髪はウェーブがかかり軽くべたついており、女のショートのは髪は柔らかく揺れていた。

至って普通の夫婦に見える。しかし、その顔は。目を大きく見開き、唇を吊り上げて笑っている。

二人は肩を上下に揺らせていた。

それは、走ってきたために息を弾ませているのではなく、狂喜に打ち震えているように見えた。

男が、

「見つかってしまったか」

と口角を吊り上げたまま言う。

その隣で、女がくすくすと笑いながら、口を開く。

「せっかく『人形』まで用意して、走って逃げてきたのに。車相手じゃ、無理よ。……それにしても、ずいぶん強引なやり方。昔の水酉家とは大違い」

嘲笑うように、私をじろじろ眺める。

私は舌打ちし、二人を睨みつけながら、

「うちの依頼主に手を出さないように。……まあ、出さないにしろ、あなた達を今から傷つけるから。逃げて、無駄」

私が低くつぶやくと、二人は目をかっと見開き、声を揃えて笑い叫んだ。

狂気に染まった眼が四つ。

それらが私の顔へと集中し、

「やってみろ、堕ちた呪術師——」

と、男の叫びが木霊した。

それと共に、女の胸元から灰色の細長い物体が飛び出て、女の頭上へ一直線に跳ね、長い身体をコンクリートにざらざらとこすらせながら着地する。

その物体を見て、悲鳴と嘔吐感が喉までさしかかった。

口を押さえて立ち尽くしたまま、目だけを動かしてじっと見る。

てらてらと濡れたような蛇の肌には、まだら模様があり、身体はトグロを巻いて円錐状に盛り上がる。

その小山の頂上に、枝分かれした二つの首が乗り、二つの顔が牙を剥いていた。

双頭の蛇だった。

無数の色が混じった、どす黒いその気配に、頭が軋んで悲鳴を上げる。

「早くアレを出せ！」

ちかちかと点滅する視界の中、背後から迫る修一さんの声が、耳を突き抜けた。

私は嘔吐をこらえながら、右手を下から上へ振った。

振り上げられた手の先から、霊気が迸り、放散されたそれが、吸いつくように肌にまとわりつく。

——そして。

耳鳴りがした。

肩から、すっと薄い膜が剥がれるような、何かが抜け落ちる感覚

がする。

崩れそうな膝を必死に立て、目を頭上へ向けた。

そこには、何の姿もない。

しかし、確かに今、そこに『鷲』が浮いているのを感じる。

左肩に、何か尖ったものが食い込んだ。

おそらく、木の枝に留まるごとく、私の肩に『鷲』が留まったのだらう。

見えない爪に、肌を突き破られる痛み、歯を噛み締めながら、前の夫婦を見やる。

彼らは目を見開いて私の頭上を凝視していた。

その狼狽ぶりを見て、私は震えながら唇を曲げ笑う。
すると、男が言う。

「前言を撤回しよう。君は、呪術師なんかじゃなく——化けものだ」
虚空を眺めながら、男は「素晴らしい」と何度も恍惚の声を漏らす。

一方、女は怒りを剥き出しにして宙を睨み、

「おぞましい。私達の呪術とは、まさに対極に位置する呪術ね。」

それに、蛇と鷲。これほど因縁深く、相性の悪い組み合わせはないわ。残念だけど、私達の方が不利ね」

——けれど。

女が形の良い真っ赤な唇を曲げて、つぶやく。

「蛇は太古から鷲に虐げられる宿命がある——それを覆すことができたなら、最高だわ。私達なら、できないとも限らない。それに、」

女が男と目を見合わせ、笑ってさらに言う。

「私は、あの鷲を呑んでみたい」

背筋を寒気が走り、思わず退く。

二人がこちらに振り向いた。

無表情な白い顔。紅く輝く眼。

その紅い瞳に意識を吸いこまれそうになった時、

「和子！」

修一さんに腕を掴まれ、我に返った。

だが、『驚』に命令を送ることもできずに、ただ視線を横へずらす。

毒牙の矛先をこちらに向けた双頭の蛇が、長い身体を螺旋によじらせながら、飛びかかってくるのが目に映った。

その、こじ開けられた一方の蛇の赤い口に目がいく。

——呑まれる。

身動きする余裕もないまま、二つの口が私の顔目がけて飛びついてくる。

——その時。

空気が切れた。

一瞬、空中に、何本もの線が刻まれたように思えた。蛇の頭や腹や尾に、いくつもの隙間ができ、実体のないその線が蛇の体躯と重なって自ずと浮き上がった。

何本かの線の先が、私のスーツの腕裾や靴先などを、焼けるような音を立てて引き裂いた。

啞然と、足元に散らばった肉片を見下ろす。

肉片から染み出るように、緑色のそれが円を描いて地面に広がっていく。

鼻をつく匂いに、目から涙が染みた。

肉片の断面からは、白い湯気が上がっていた。

その白い湯気の先に、男と女の驚愕の表情が見えた。

その時突然、蛇肉の真上に浮かんでいた『驚』の気配が、前へ移動した。

「——駄目」

立ち尽くす私のそのつぶやきは、誰に聞かれることもなく、『驚』は、目を見開いている男と女の元へと直行した。

そして、赤い飛沫が宙高く上がる。

女の甲高い悲鳴とともに、もう一つ、赤い噴水が湧く。

「何だ……これ」

背後で、修一さんの、生気の抜けたつぶやきが聞こえる。

血にまみれた人間が二人、呻きながら地面を這っている。

男が、目を全開に開き、食いつくような瞳で私を見る。そして、何かを言おうとして、ごぼ、と口から血の塊を垂らした。

女はその傍らで、両腕をだらりと垂らしながら、足だけで必死に起き上がろうとする。

だが、その瞬間。背中を何かに強打され、身体ごと跳ね飛ばされ、宙を一回転した後、地面に、鈍い音を立てて仰向けに落ちた。

女の顔は白かった。虚ろな視線が、灰色の空へと向けられる。

「やめて！」

私は叫び、『驚』に、身体へ戻るよう命令する。だが、『驚』は、全く従おうともせず、男の頭上に浮かんだ。

男が、目を空中へと向けて、切れて赤く濡れた唇を、吊り上げて笑った。

その途端、男の吐き出した血の塊の中から、一匹の蛇が飛び跳ね、赤い飛沫を撒き散らしながら、『驚』へ飛び込んだ。そして、はじけ飛ぶ。

その蛇の血は濃い赤で、無数の血の玉が空中に舞った。だが、それらは地面に落ちることなく、逆に浮遊し、『驚』の気配へと吸いつくように迫った。

その瞬間、『驚』の気配が、逃げるように上昇した。

男の吊り上げられた唇が開き、中からもう一匹、一回り大きい蛇が、赤く照った体をするすると這わせ出てきた。

蛇は、男の首元に巻きつき、その身体を引きずり始め、さらに何メートルか先の、瞳孔を開いたまま動かない女の元へ行き、同じように首に巻きついた。

二人を引きずっていく蛇の後に、ささくれだった無数の赤い線が、灰色の地面に、こすりつけられていく。

さらさら。時折途切れるその音が、遠くへ消えていくにつれ、視界が白く変色していった。

「和子！」

肩を強く揺り動かされ、頭がぐらぐらと揺らぐ。

その弾みで倒れるように地面に膝をつく。

地面についた両手を持ち上げ、広げれば、手の平には、緑の入り混じった赤い血が染みつき、それは指の上を滑るように落ちていく。

その手を空に掲げた。

空は、血に染まっていた。私の手の平はその色に不自然なく溶け込む。

掲げた両腕の隙間から、道のはるか先に、蛇に引きずられる二つの人形を見た。

その一つが、目を見開いてこちらを凝視していた。

——殺す。殺す。

口を閉じたまま、何度もそうつぶやき、消えるまでその男は私から目を離さなかった。

第二章 二十

足元からする、おばさんの掠れた声が止んだ。

俺は、ゆっくりと後ろを向き、海を見やる。

両足を、後ろから掴まれる感触がする。その手を払おうとも思わない。

頬はかさかさに乾いてただれ、口の中からは塩味がした。

風がべたついた肌をなで、身体の熱は次第に冷めていく。だが、心は。

——紫色に炎上していた。

「父さん。母さん」

目に浮かぶ。あの赤く染まった光景が。父さんの、生気を失った瞳が。母さんの、俺の頬へと伸ばされた、あの白い手が。

足にうるさく絡みついてくる手を、足をふって引き剥がし、離れた。

おばさんは、「智也」と繰り返しつつばやき、さらに這って近寄ってくる。

おじさんが、口を開く。

「頭首はおそらく、最初から、全てわかっていたんだ。『驚』が、宿敵である蛇を前にして、冷静でいられるはずがない。だから、」
「馬鹿か。あんた達は」

おじさんの声をかき消す。

「蛇と驚を対峙させればどうなるか。それもわからなかったのか。頭首は最初から、加賀家の人間を殺そうとしていたんだ。それに気づかなかったとは。……そうか。あんた達は俺の両親を、消えてもいいゴミとしか見ていなかったんだ。大事な綾華を守るためなら、ゴミを駆除するくらい、訳のないことか」

声を上げて笑う。

おじさんは、何も言い返さず、ただ俯いた。

その顔から眼鏡が取れ、砂浜に落ちて底が埋もれる。

おばさんは、俺の足にすがりつき、「違うの」と繰り返す。それを見下ろし、言う。

「あんたは、人を殺したんだ。その事実の、何が違う？」

俺の足からおばさんの手が離れた。

「私は……あなたのお父さんとお母さんを……殺した」

おばさんはうわ言のようにつぶやき、砂を掴んで握りしめる。

「そうだ。俺の大切な全てを引き裂き、その命を消した」

おばさんは目を見開きながら、青い砂がついたままの手の平で、顔を覆った。

俺の足元で嗚咽するその姿を見た途端、涙が止め処もなく込み上げてきた。

砂のついた、おばさんの髪に、俺の涙が落ちて染みる。

こんなにも大切なものが目の前にあるというのに。俺はどうしても、自分を止められない。

復讐という名の強烈な磁力が、心を縛って離さない――。

その時、おばさんが立ち上がった。

間近に、おばさんの顔が来る。笑顔だった。

「本当に愛しているわ、智也。……お願いだから、私を、」
許して。

その言葉に、俺の心に巣食う誰かが、答えた。

「貴様を、許すはずはない」

おばさんの顔が――水西和子の顔が、白く固まった。

同時に、俺の胸も、音を立てて裂けた。

歩き出す。立ち尽くす二人の脇を、通り過ぎる。

裂けた胸から、どくどくと何かが滲み出る。俺の背後に、熱い水滴が点々と跡を残していく。

その時、絶叫が響いて、足を止めた。振り返ると、そこには。

自分の胸に右手を突き刺すおばさんの姿があった。

おじさんの咆哮が、耳を突き刺す。

崩れ落ちるおばさんの体を、おじさんが背後から抱える。

——嘘だろ。

おばさんの背中から手が出ている。その指が、わずかに揺れ、伸びる。俺を指して。

俺は足を前に出す。けれど、それ以上進めない。

砂の小山に、黒い水が広がっていく。

和子、と狂ったように叫ぶおじさんの足元が、次第に黒くなる。おじさんの声が響くたびに、おばさんの、垂れ下がった片腕が、ふりこのように揺れる。

生暖かい匂いが、鼻を塞ぐ。

——ああ、血の匂いだ。血。

足元に流れてきた、黒い一筋を、右手ですくってみた。手の平を広げれば、砂と共に真っ黒な血が滴り落ちる。

「智也」

穏やかで、生気のない震えたつぶやきが、おじさんの口から聞こえた。

亡骸を横たえ、首をだらりと垂らしてそれを見つめていたおじさんは、顎を引いて、背後の俺を見た。

見開いた目が、食いつくように俺の顔を捉える。

俺は、「あ」と震える唇を動かして、あとずさる。

おじさんは、ふう、と一つ息をついた。そして、振り向き、
「お前は死ぬべきだ」

と、静かに言った。

そして、絶叫と共に、右手を振り上げ、躍りかかってきた。

思考が働かず、咄嗟の選択肢が浮かばない。

だが、気づいてみれば、俺は無意識に、右の手の平を返して、差し出すようにおじさんに向けていた。

おじさんの、狂気に歪んだ唇から、目を離すことができない。

——おじさん。

服から出てきた蛇が、差し伸ばされた俺の腕をすりりと伝って、

前へ跳ぶ。

そして、おじさんの首に、噛みついた。

おじさんは頭から砂に突っ込み、転がる。

そして、口から、ごぼごぼと、泡を噴き地面を這う。

白い蛇が、二つの穴の空いた首に巻きつき、銀色に照り輝きながら、絞め上げる。

俺は、あとずさろうとして、つまづいた。

倒れたまま、おじさん、と手を伸ばす。

身をよじって小刻みに震えるおじさんが、虚ろな視線を海に向けた。

そして、喉から、ヒュウ、と一つ音を漏らし、動かなくなった。

黒い泥の上に散らばる二つの死骸。

……失った。今度こそ、俺は、すべてを失った。

立ち上がる。右手の拳を、宙へ向けて伸ばした。拳を開くと、握っていた湿った砂が、さらさらと静かに落ちていく。

大切なものはこぼれ落ち、塵となって消えていく。

俺が初めて殺した人間は、俺にとって最も大切な人たち。彼らは家族で、尊敬する人で、そして復讐の相手だった。それを、殺した。大切なものを、俺は、自らの手で、壊した。

——その時、背後から、誰かの掠れ声が聞こえて、心臓が大きく脈打った。

ゆっくりと後ろを見た。その途端、誰かの手に、強く胸を押されて後ろへ倒される。

目の前を通り過ぎる長い髪。

「綾華！」

おじさんの死骸に駆け寄るその後ろ姿に、叫ぶ。

「お父さん！」

そう絶叫する綾華を、俺はもう一度、叫んで呼ぶ。

それを見ちゃいけない。お願いだから、振り向いてくれ。その目を、俺に向けてくれ、綾華。

綾華の泣き叫ぶ声が、波の音をかき消した。

「綾華……」

立ち上がって、片手を綾華に伸ばし呼ぶ。けれど、綾華は振り向かず、おじさんの死骸から離れると、お婆さんの、胸に手が刺さっている死骸へと駆け寄った。

綾華が、泣いている。叫んでいる。顔をあんなに歪めて。髪をかきむしって。

「嫌だ……」

ふらつく足を進ませて、綾華に近づく。

その時、綾華が、何か泣き叫びながら、こちらに振り向いた。

そして、怒りに吊り上った目を、俺に突き刺した。

「智也ッ！」

口を大きく開き、歯を剥き出しにして、そう叫ぶ。

俺の身体を赤い雷が走り、何かを言おうとした俺の喉が、痙攣した。

——綾華、違うんだ。

事実が何一つ変わらない事をわかっていながら、必死に、視線で綾華にそう訴えかける。

すると、綾華が、俺の縋るようなその視線を、ねじ伏せるように、「智也ッ！」ともう一度、長く絶叫した。

綾華の眼の色が、憎しみによって、黒ずんでいく。そこに映っている、俺の顔。

「よくもこんな、殺し方を。……恩知らずだね、智也は」

やめてくれ、綾華。

低くそうつぶやき、頭を押さえる。

すると、綾華は、「やめてくれ、かあ……」と、青ざめた唇を笑わせる。

「不思議だね、智也は。大事な人を、平気で殺せるんだもん。……ほら、お母さんの胸だって、こんなに突き破って……」

綾華は、手元にあるお婆さんの死骸を見下ろし、その胸に差し込

まれた腕の上に手を乗せた。

そのままじつと打ち震えた後、突然綾華は絶叫した。喉が裂けるほどに強く、舌が切れそうなほど長く。

その叫びを聞きながら、許してくれ、と言おうとして、その言葉を寸前で呑み込む。

俺の足にはまだ、おばさんの縋りつく手の感触が残っていた。

——お願いだから、許して……。

まだ、おばさんの亡骸が口を開いて、そうつぶやいているように見える。

絶叫が止まる。綾華は息を切らせながら突然、「わかった」とつぶやく。

「智也はこうやって、自分のお父さんとお母さんを、殺したんだね」「違う!」

反射的に否定する。

「嘘つき。どうせ、智也は昔から人殺しなのよ」

そう言って、狂ったように嘲笑い、叫ぶ綾華。それを見て、俺は初めて、本当に綾華が憎いと思った。

上着に手を入れ、それを掴む。だが、手が動かず、それを服から引き出すことはできなかった。

綾華に背を向けた。

背中に、憎悪の刃が根深く突き刺さる。その激痛に身を震わせながらも、俺は歩き出す。

岸に沿って、砂浜を歩く。

さくさくと砂を踏みしめる音と、さざ波の音とが、耳に静かに入り込んでくる。

同時に、綾華の鳴咽が、聞こえてきた。耳を塞ぐ。やめる。聞きたくない。

耳の中を、綾華の泣き声がくるくると回って木霊する。

「綾華、やめてくれ……」

耳を強く抑えた。耳鳴りがして、一瞬その声が消える。

自分の唇の端が、吊り上がるのがわかる。頬を伝う涙が、その唇の隙間に入り込む。

その涙を呑みこみ、俺は告げる。

「……綾華。俺は、」

お前を殺すよ。

第二章 二十（後書き）

ここで蛇咬は、完結となります。今まで読んでくださった皆様、ありがとうございます。

これからまだ話は続きます。機会があれば、また「蛇咬真く仮く」の執筆を始めるかもしれません。それでは、本当にありがとうございます。感想批判喜んでお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3845g/>

蛇咬 ～この手で君を～

2011年10月5日02時36分発行